江戸名所図會

三

西垣文庫
文庫10
6556
3

文庫10
6556
3

宮内省圖書寮

三

緣山增上寺　廣度院と號し淨家の總本寺十八檀林の冠首にして盛大の佛域なり百一代　後小松院の御願にして

開山は大蓮社酉誉上人中興を普光觀智國師なり

十八檀林は武總常野等に存在せ阿彌陀佛六八本願の中第十八を以て最勝とせるが因を　御當家　御祈願所松平氏の祈願所なり歳を閲歴し能雪霜を受く其守護木公は後人細よりのときは十八公なり依て是を彌陀の十八願に比ひ情舍十八區を建て永く檀林と設け子孫永く安盛慮を徒へ源家の御代を淨家の白旗流義を表し代々守護なるべきを表し又上淨宗護國篇新著聞集るの意を採摘せ

本堂本尊阿彌陀如來

惠心僧都の作中座像御長四尺

額　三緣山

廊山上人真蹟　上人は當寺第十三世なり甲州の産にして高坂彈正の子なり

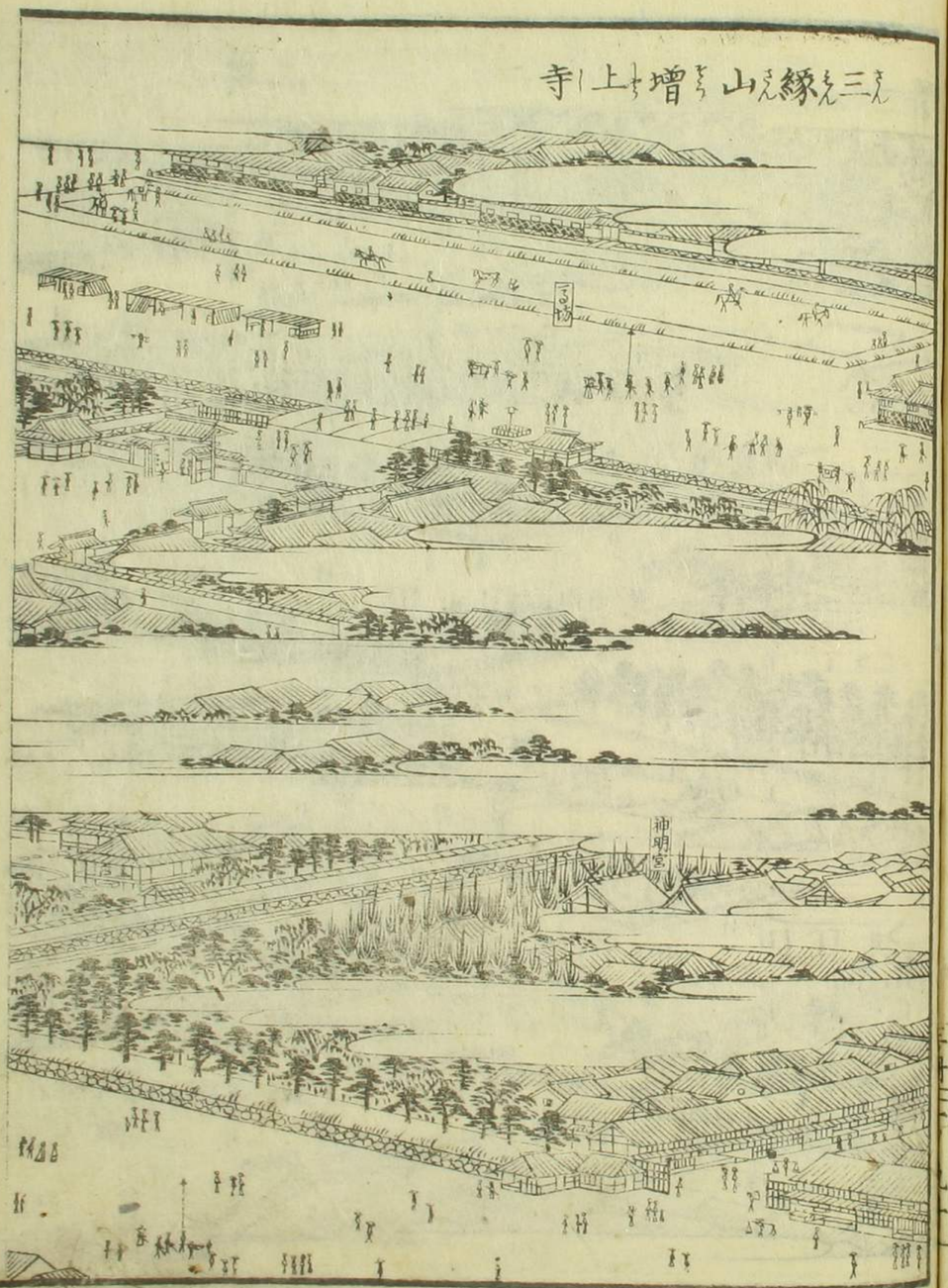
御經藏　本堂の前左の方舞の中にあり或人云ふ納る所の一代藏經なり

後彦坂九兵衛尉　宋板　其先豆州修善寺にありて平政子の寄附なりとそ

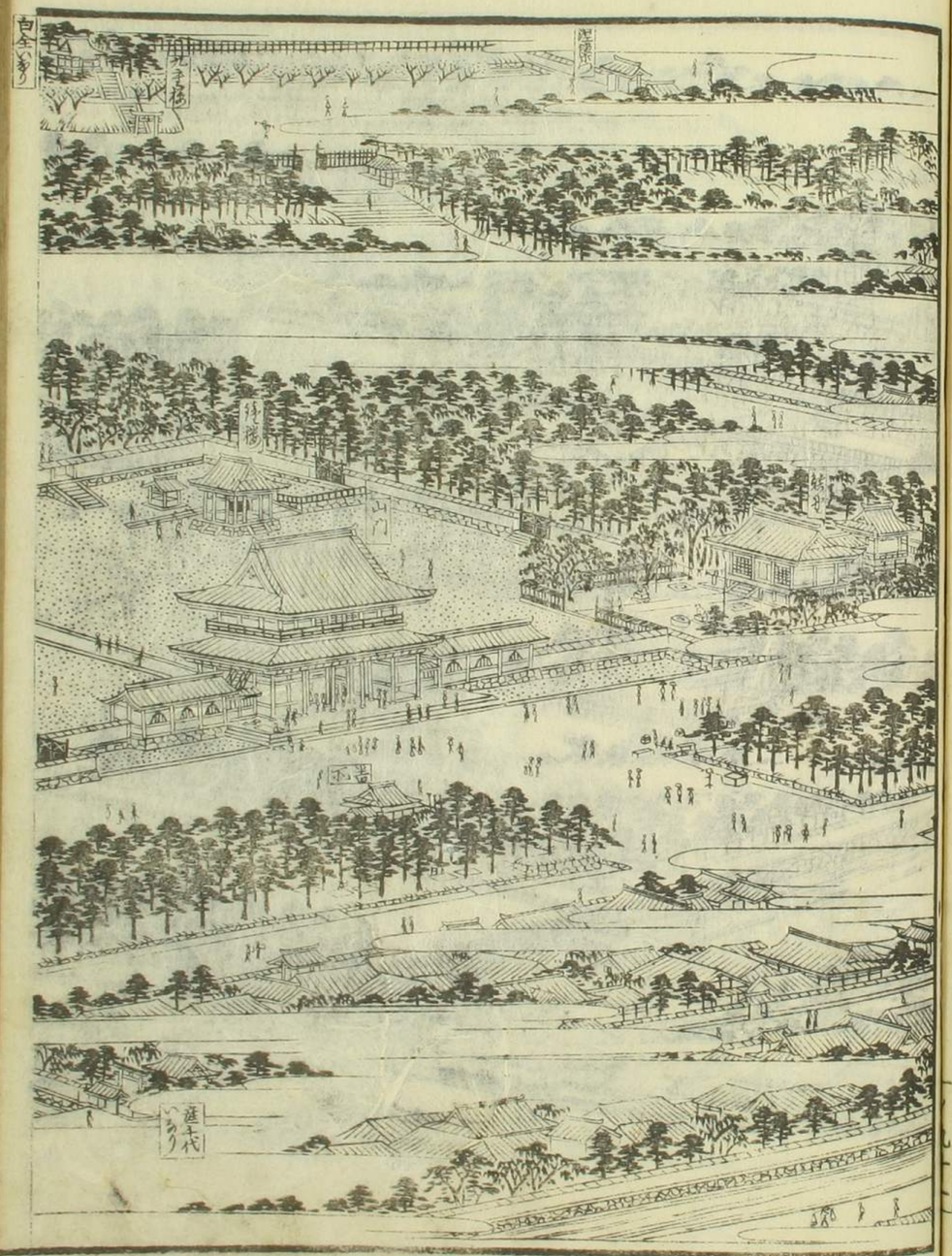
宮造に列せ　寛永九年　照誉上人子學大和尚　台命を奉り當山にて菊岡沾涼云昔八方丈に

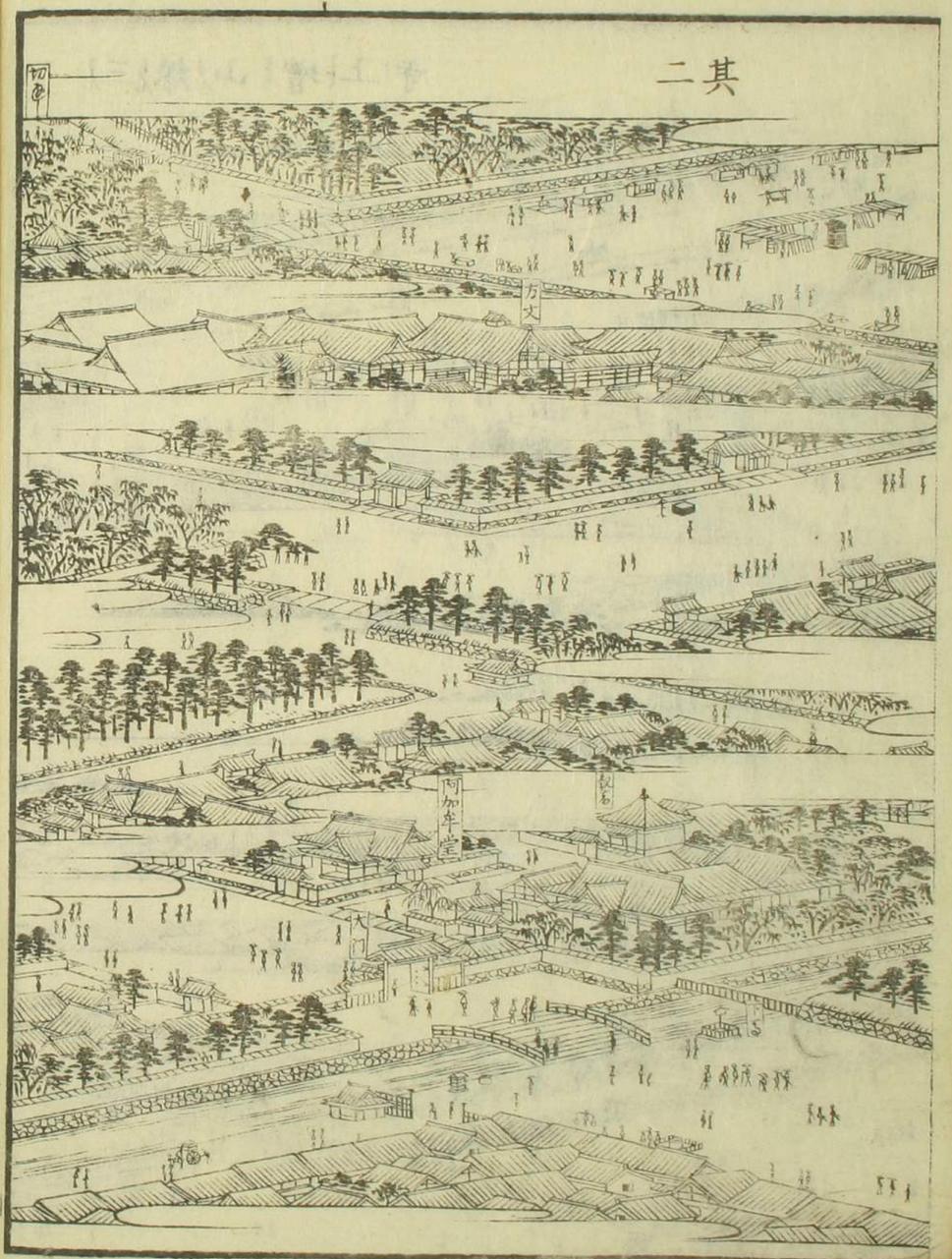
開山堂　同所左にあり　當寺開山以下累世大僧正の

遺像　靈牌等を置き

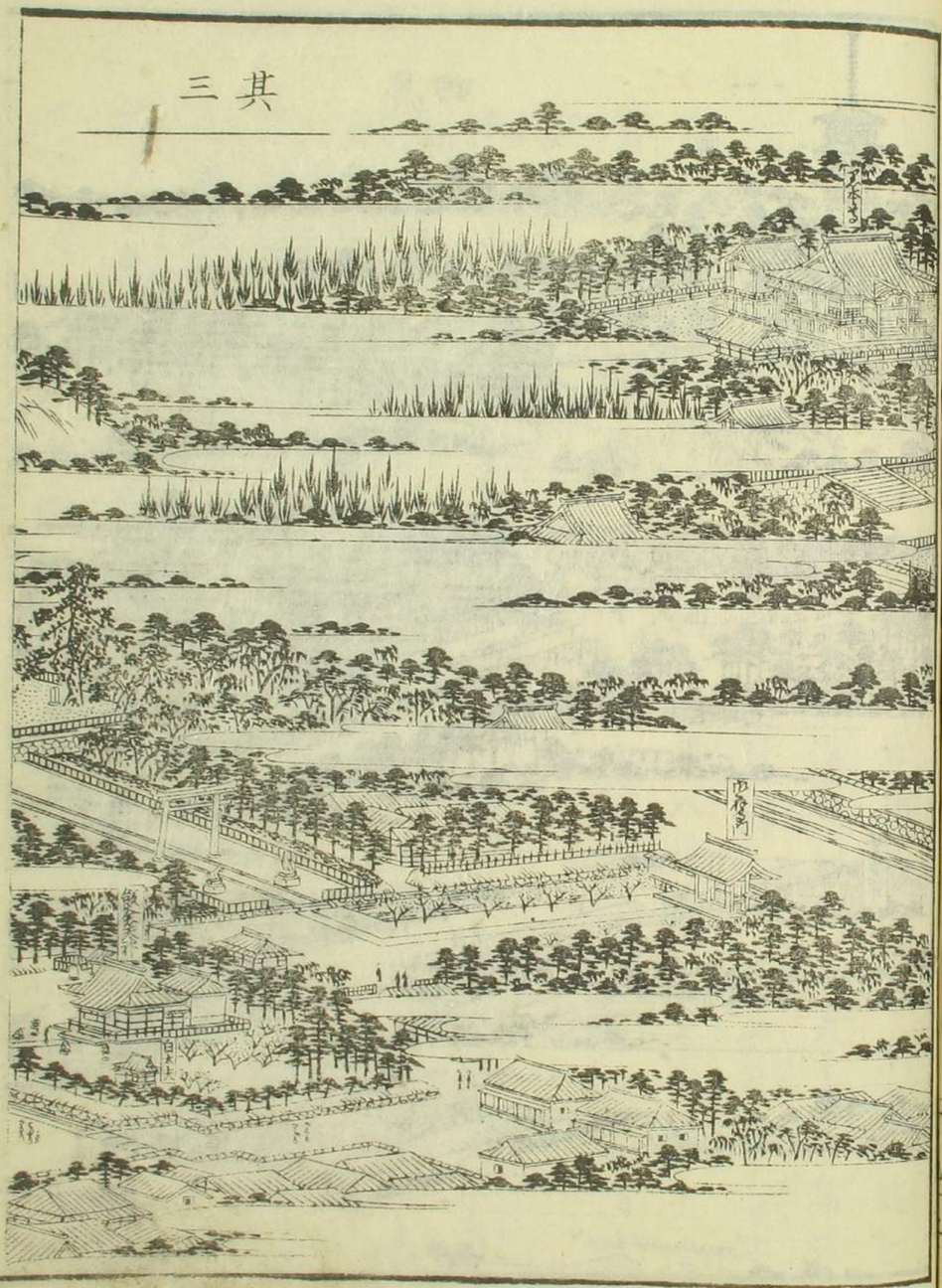


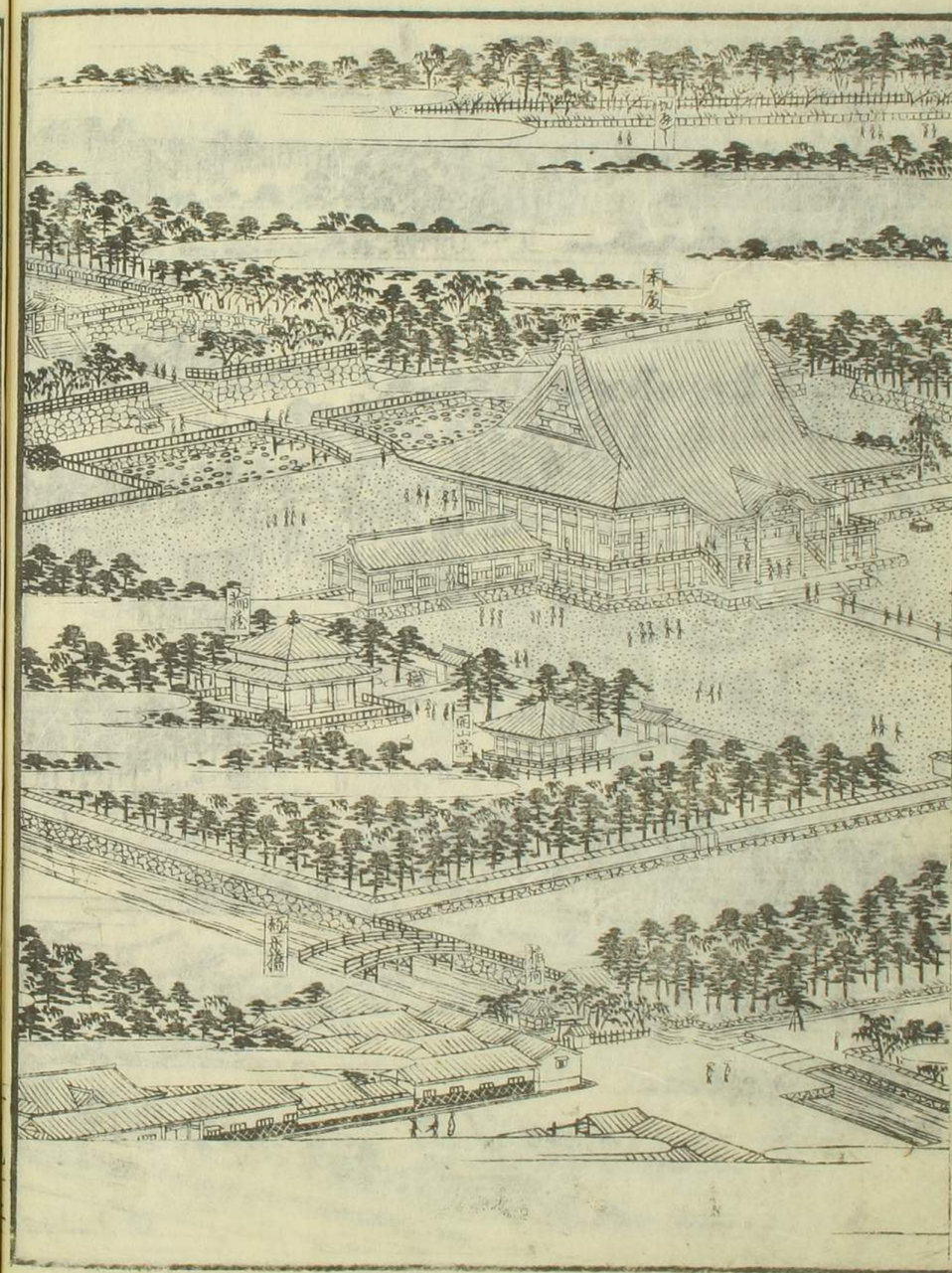
開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号ス 鎮西四代孫八世の祖とす 貞治五年
七月十日 千葉系圖貞治二年 北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守
六月三日とあり
氏胤母ハ新田氏あるも童名を徳壽丸と云 一書ニ徳加冠して
胤明と称す出離の志深く釋典を慕ふ九歳ゆゑ遂ニ同國
千葉寺ニ入て落飾し初めて密教を学ひ後岡公ニ投帰して浄
宗ニ入智道倍熾なるも其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺ニ
住せる 今の増上寺是なり江戸名勝志ニ云増上寺の旧地ハ芝町一丁目越後屋と式部とあり 此寺始ハ真言瑜伽の
道場なりしを竟ニ光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗
風を転じて浄業の精舎とす 永享十二年庚申七月十八日
寂す歳七十五 臘六十七 東國高僧傳ニ應永二十四年ニ寂す 詳ならずとあり 中興開山
勅賜普光観智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誉上人
と号す 平山左衛門尉季重の後裔かゝ傳燈 天文十三年 護國篇十年ニ作る
武州由木ニ生る 系圖ニ云姓ハ由木又ハ金吾拾尉源判重云く
始衣を片山の宝臺寺ニ掘ひ十八歳感誉

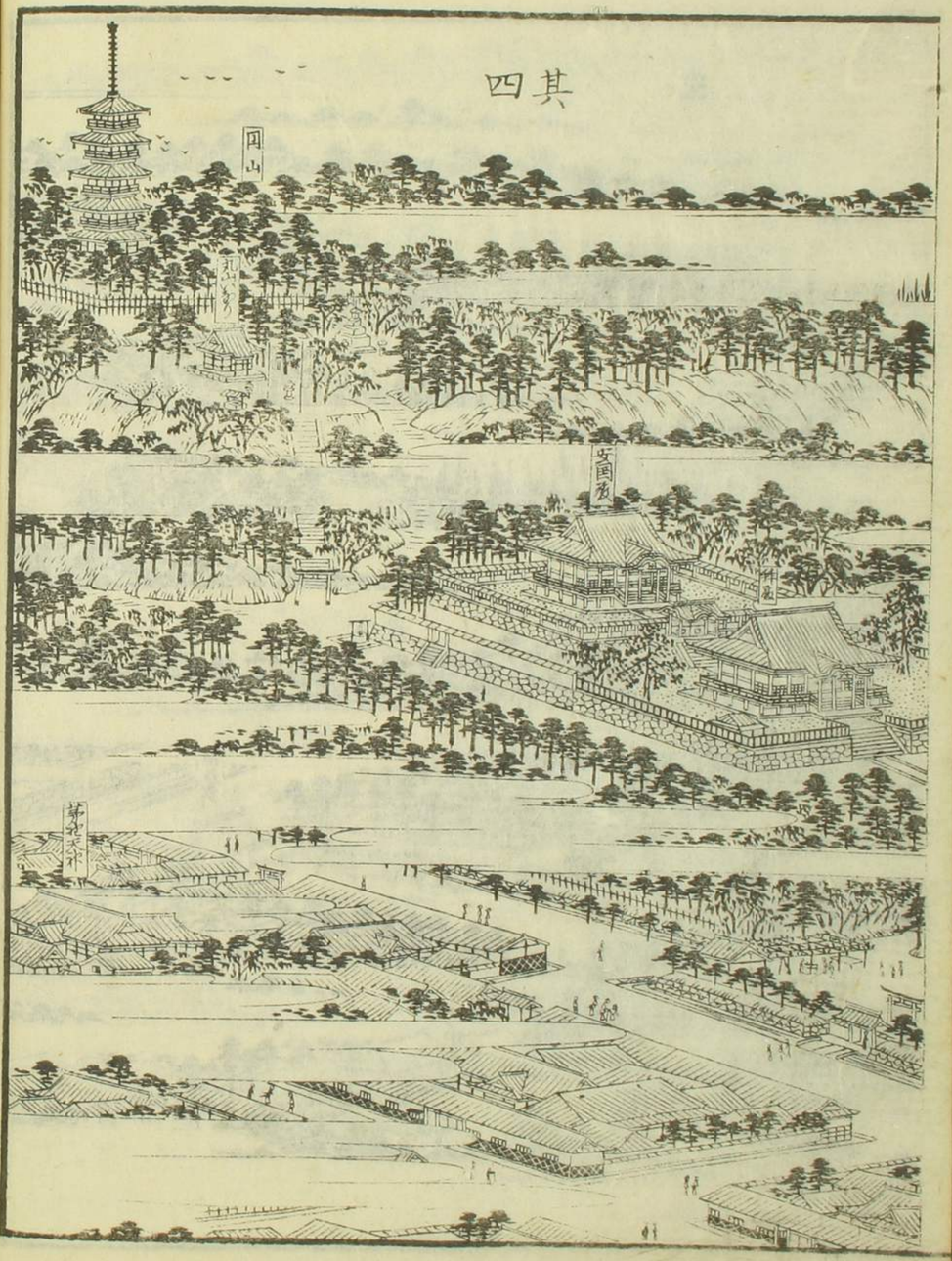

白金ノ多リ
山門
本堂
庭手代ノ


其二
方丈
阿弥陀堂

其三



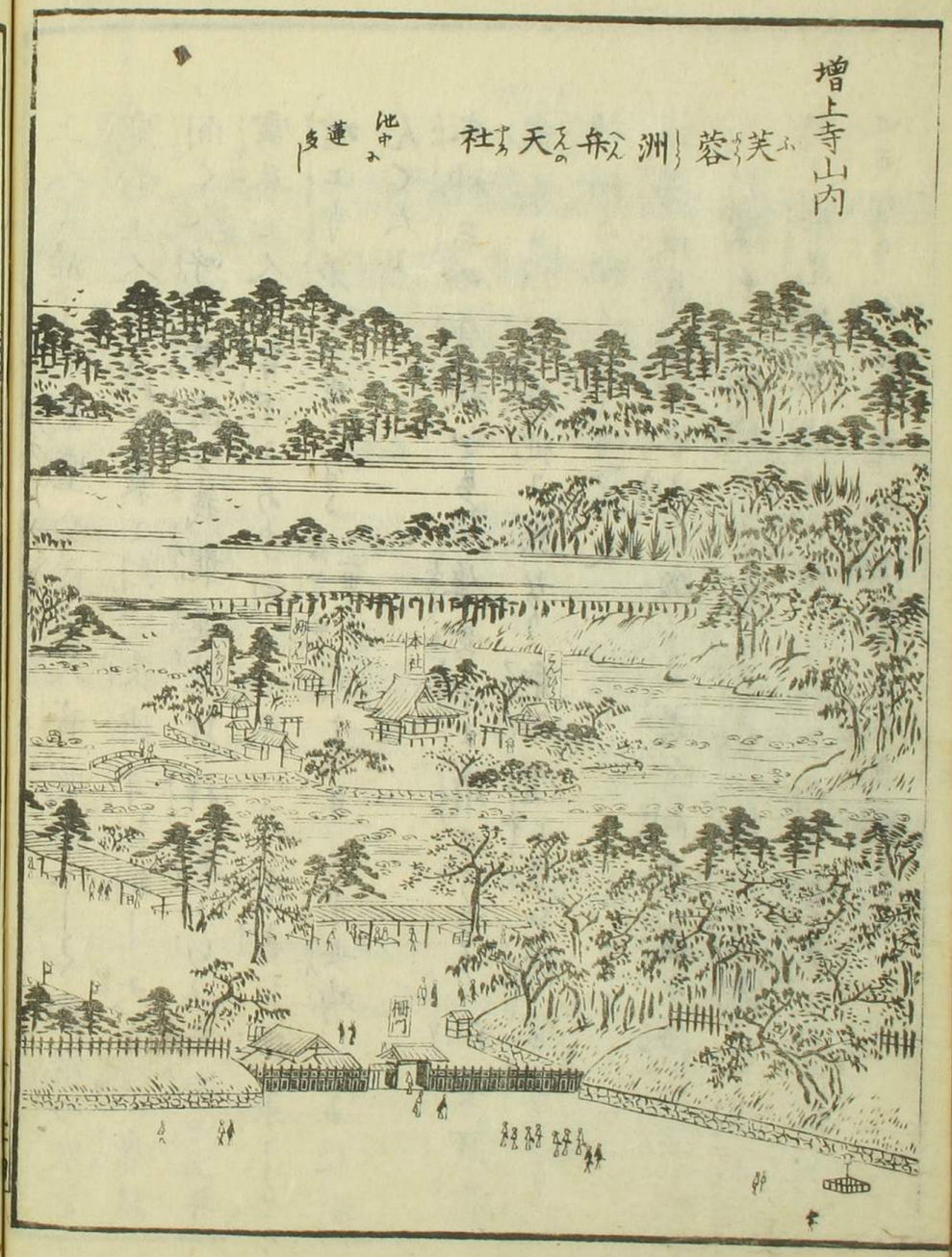


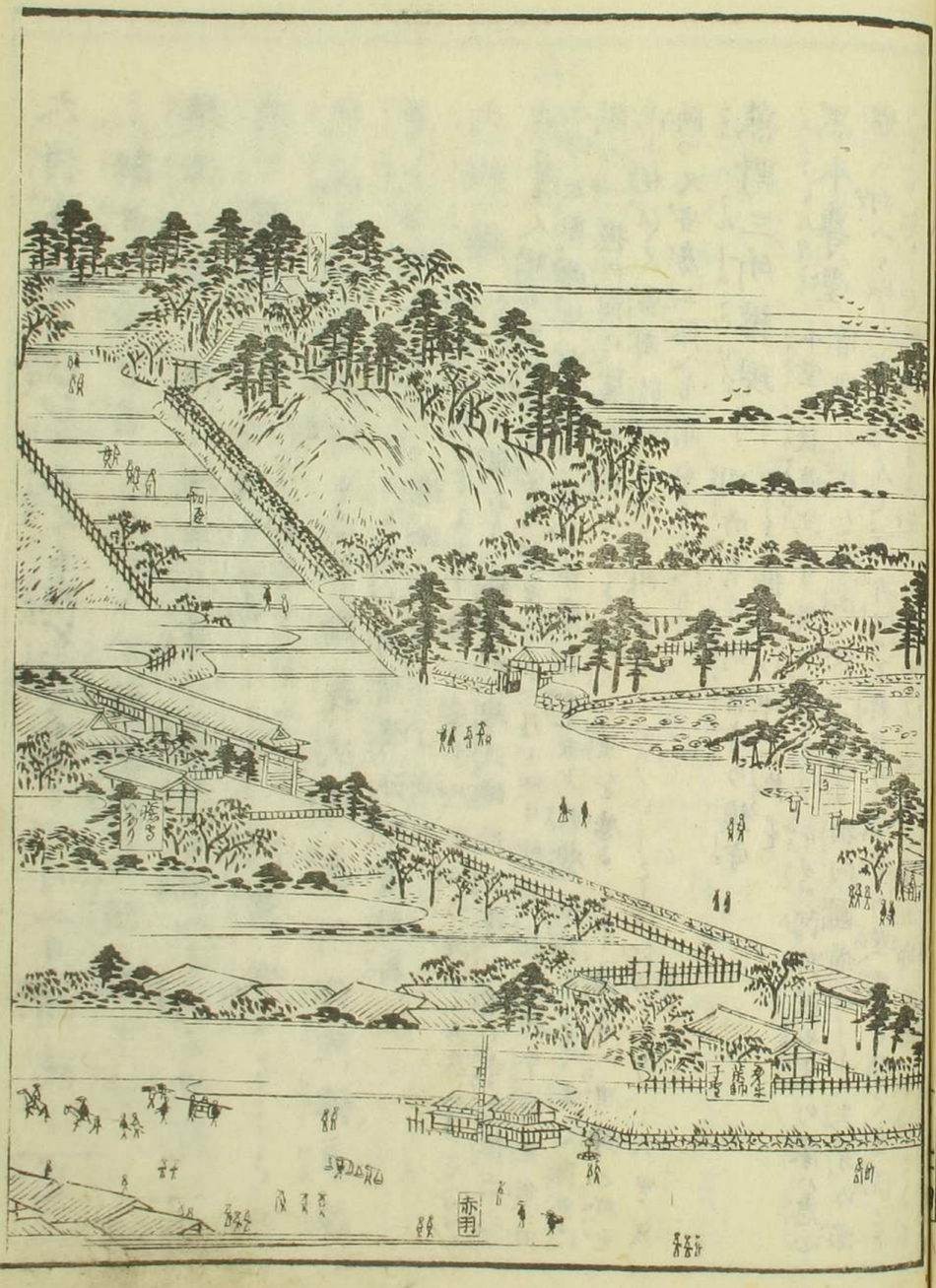


上人より帰りて登壇受戒せ天資聰悟ゆゑ顕密の教を究む上人没後上葉より到る長傳寺を創し大に法席を開く人呼て教海の義龍蓮苑の祥鳳といふ天正十三年雲誉上人の會下よりあり同十七年八月璽書を傳兼して増上寺第十二世となる（當寺第十二世）同十八年天下安靖なるに逮んで大に

大神君の眷顧をあひ屢営中に請せられて法要を聽受しあひ崇信他に異なり竟に増上寺を修営せ植福の地とせり又

後陽成帝師を宮内に徴して道を問ふ盛に浄教に深旨を陳せ叡感あり褒章を加へ新に宸翰を深あひ特に普光觀智國師の號を賜ふ時に慶長十五年七月十九日なり元和六年師微恙を示せ嗣君


増上寺山内
芙蓉洲
船弁天社
池中蓮多



大将軍親ら臨むて忝くも疾を問せ給ふ十一月二日諸徒に遺誡し辭世の偈を書しく曰く佛話提撕心頭塵未後一句但稱佛と筆を抛く端座合掌し佛号を唱へく化を世壽七十有七僧臘六十獲國篇世壽八十とあり門葉牲〻とし〻く学徒流に浴を撰述る不論義決擇集阿弥陀経直譚等大に世に行はる以上浄土高僧傳浄宗獲國篇

大銅鐘 本堂の右の方にあり鐘の厚さ八寸口の渡り五尺八寸丈この一丈程あり銘曰新鑄洪鐘掛三縁山増上寺之樓二十六世森誉上人歴天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源祇慰鑄工椎名伊豫吉寛云〻其聲洪大にして遠く百里に聞ゆ一撞の間の響き長く〻遠く響き一里鐘と称せ地に徒ひく當國熊谷の辺に聞ゆるこのへり隅つ又安房上総へも聞ゆるありかし〻も江戸より十六里殘

熊野三所權現祠 同所にあり則當寺の鎮守

黑本尊堂 本堂の後蓮池より奥の方にあり本尊阿弥陀如来の像八惠心僧都の作なり長二尺六寸相向圓備わり〻生身の佛體に向ひ合掌し世人呼んで黑仏と称せり多くの星霜を歴く金泥ことく変して黑色となる故に此称ありしも或ハ源九郎義経寺に拾ふる不調を以て寺に遺す寺産不充此靈像を始参州桑子の明眼寺にありしを其の邑の人の寺に迎へ宝帳玉扉構飾精巧と極むと以上浄宗獲國篇に載る毎歳四月十六日四月八日同十七日渚人〻参詣もとゆるさるを例とす

三門 元和九年癸亥御建立或云八年なりと楼上に釋迦文殊普賢の彼岸の中日又二月十五日四月八日に登楼をゆるさる

安國殿 本堂構の外南の方にあり四月十七日八所祭礼に参拝を許さる故に詣る人多し来由ハ其所あるを以て是に略す別當を安立院と号す

五層塔 同所御佛殿の地蒼林の中にあり涅槃石 同所にあり御影物師酒井雅樂矣の建立なりとの〻羅漢石 同所にあり後藤祐乗得来の鷹門 同所にあり吉岡豊前作なりと号く曼荼羅石 同所にあり後藤祐乗作なりと来迎石とも名つく

極樂橋 同所前の溝に架せる

宗廟 御當家御代の御霊屋なり

御常念佛堂 御別當寺院中にあり當寺を勢州常念佛堂涅槃別院と号す

条下に詳なり當院に上人真筆の涅槃像の印板あり有信の輩に授与他の図に異なり

性壽庵 方丈の後の方にあり尾州清須城主松平薩摩守忠吉の霊牌を置故に俗に薩摩堂とよべり側に小笠原監物を始とし〻く殉死

五人の石塔あり 柳の井といふも同所
南の坂通りよりある名泉なり 昔飯倉の神明も此地よりあり 當山の地主神なり
飯倉天満宮 天神谷よりあり 社地に梅樹を多く栽く二月の頃一時の莊觀なり
宝松院 別當也 茅野天満宮 同所南の方松林院よりあり 圓光東漸大師
神像八菅神の直作なり 是も當山の別院なり 明定院前大僧正定月
舊跡 山下谷明定院よりあり 大和尚明和七年より建立せる六間四面の堂なり 戒檀造なり
圓座松 同所よ 圓山 同所 辨財天祠 赤羽門の内蓮池の中島よりあり
右大将頼朝卿絶会の法花堂を安置あり 星霜を経て後観智國師感得あり 當寺宝庫に納めあり 宝珠院別當なり 中島を芙蓉洲と号く
建久一山の綸守とあり 貞享二年生誉豊玄上人此所に一宇を
此所門より外ハ赤羽中しく品川への往道なり
子聖権現社 清林院別當 産千代稲荷 観智院よりあり 昔ハ普光院と号きもあり 當寺ハ合蓮社
明誉檀通上人の旧跡なりとなり 阿加牟堂 東の大門の通り常照院よりあり 常念佛の道場なり
大門 東より向ふ當山の總門なり 御成門 北の方馬場に相對す 此所
外に下馬札を建らる 下馬札あり
涅槃門 切通の上よりあり 惠照院よ 柵門 山下谷より赤羽へ出る所
涅槃像あるなり 赤羽門ともいへり
當寺旧古を見塚の地よりあり 光明寺と號せし 真言
瑜伽の密場なり 後小松院の御願に依て草創あり

古刹なるに至 德二年酉誉上人移て住せるの後竟に誉
上人 傳通院三ケ月の德化に歸し寺を改め三縁山増上寺と
號し宗風を轉じ浄刹とす 事跡合考に出せる三縁山歴代系譜に云く當寺草創之地者貝塚
今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長初移于芝云云 日比谷より芝へ
天正十八年辛卯平川口へ移 武德編年集成に慶長三年戊戌去る
移てしハ慶長三年戊戌八月なり
比谷古へ地を接せ混し 増上寺を芝の地へうつせり 平川口
東照大神君 天正十八年始て江戸の大城に入らせ給ふ 州民
鼓腹し老幼相携て道路に拜迎し奉る幸に寺門の前路を
通御あるあり 観智國師も是を拜せんとし出て寺前に
あるを 是則比丘谷の時に師の道貌雄毅尋常なるを見
て其名を問せ給ふ 乃寺に入て憩ひ其後當
寺を以て植福の地となし永く師檀の御契約あり
御崇敬あつく屢師を當中に清せ法要を聽受なり 待遇
恩を謝し是を親王に比せ師を〻来輿〻殿階に昇るを
得せしむ 以て永式とす 今に至て 時に寺境隘狹ゆへ
歴代の住持成この栄を

大城ゟ接近セ（是乃比ヶ谷ゟ谷ゟ）依く今の地ゟ移さるゝ大ゟ資財を
喜捨し殿堂房室ゟ至るまて悉く營建しまひ最宏壯の大梵
刹となる事跡合考ゟ慶長十年乙巳本堂（田廊等造營あり）於是浄家の宗教一時ゟ
勃興し念佛の聲天下ゟ洋々たり（大伽藍と云）（上浄宗護國篇出う慶長十年一朝門前の老翁師ゟ渭て云く）
今夜祥夢を感セ師微笑しく（你其夢を驚け吾買んとく有銅二十
疋を解ふ賜わて翁云く増上寺軒端の釘木繋るゝん師曰く吉徴なり慎て
人ゟ絶ることなくと果しく翌日伽藍營後の余あり竟ゟ宏構鉅材天下ゟ
壯觀となる由浄土高僧傳ゟ）
抑當山ハ関東浄刹の冠首ゆく龍象の聚るゝ實ゟ靈山
會上布金紺園ゟと比もくん數百戸の学寮ハ畳くせくく
軒端を輾て支院ハ三十餘宇靡くとく覺を連くる三千
餘の大衆ハ常にゆゝ集る中ゆも能化ハ一代の法蔵を胸間ゟ
貯へ所化ハ十二の教文を眼裡ゟ晒せて三心即一の窓の前
ゟ五念四修の月を弄ひ事理俱頓の林下中ゟ実報受
用の花を詠す佛閣の莊麗くる七宝莊嚴の浄土も又此を
去る事遠くすとを思ふ

御忌參　正月廿五日涅槃會　二月十五日誕生會　四月八日開山忌　清十八日ゟ修学一山悉出仕　近在の末寺ゟ出て大法會を修す

十夜法會　十月六日ゟ同十五日迄修行す

飯倉神明宮　同東の方神明町ゟあり（江戸名所記等ゟ日比谷神明と称す）
其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社地なりと或云赤羽の南小
山神明宮の地なりと社司ハ西東氏（名所記ゟ往古當社の神
足柄郡ゟ鎌倉氏なる宜あり）相州
人を招く神主とすと云別當ハ金剛院と号ス其餘社家巫女ゟあり

神鳳抄云　武蔵國飯倉御厨
同書又曰　飯倉御厨　長日　御幣五十丁
東鑑曰　壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉
寄門両村於二所大神宮去永暦元年二月御出
京之刻感霊夢之後當宮事御信仰興他社然者
平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之
時者縱雖為凶賊入神明御鎮座砌之旨度々所被
無左右不可亂入仰含也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御厨
被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分

本社
拝殿
春日
天王
大こく
茶
別当

飯倉神明宮
世わ芝の神明宮
とゝ
茶

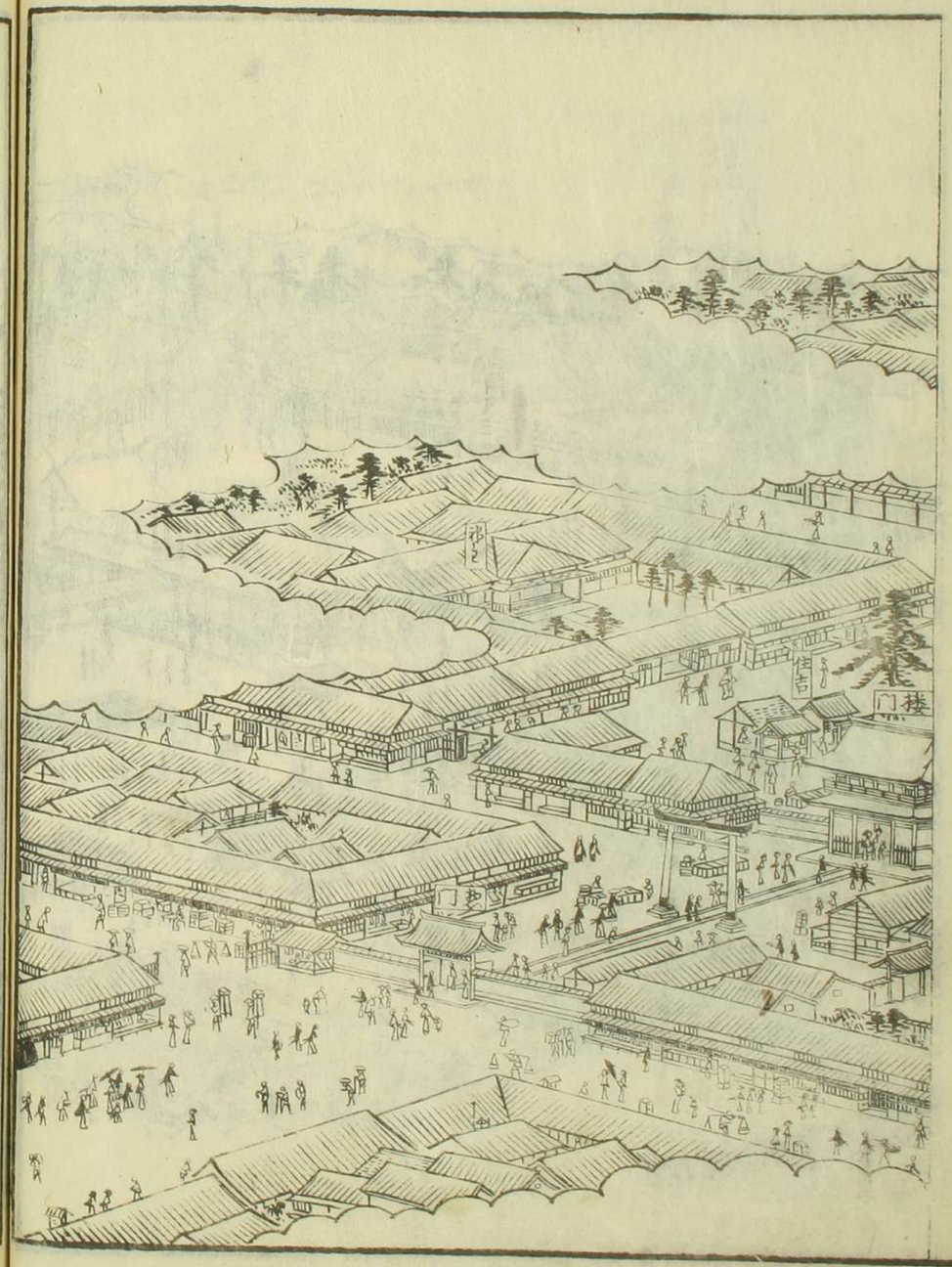
安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進狀下畧

寄進　伊勢皇太神宮御厨壹處
　　在武藏國飯倉
右志者奉爲　朝家安　鳥威就私願殊抽忠丹
寄進狀如件

壽永三年五月三日　正四位下前右兵衛佐源朝臣

按ニ當社を飯倉神明宮と稱し八旧飯倉の地より新
に移り其地ハ四ツ三塚山今の飯倉天滿宮の社辺なり飯倉と云ハ往古
此地ニ伊勢太神宮の御厨あり地名と飯倉と唱へ又伊勢社
御神を齊ひ奉る人猶飯倉の条下に詳なり又東鑑に同年四月
武藏國大河土の御厨を豊受太神宮の御領に寄附のよし有れハ二國の
内にあるべしなるべし

社記云人皇六十六代一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
伊勢皇太神宮を鎮座奉る其時神帯と大元一枚此地に
天降る又此地の童女に神宛
あり彼二種の寶を此地に留
とめ奉り依て當社を營まる
其後建久四年癸丑右大將
頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劍

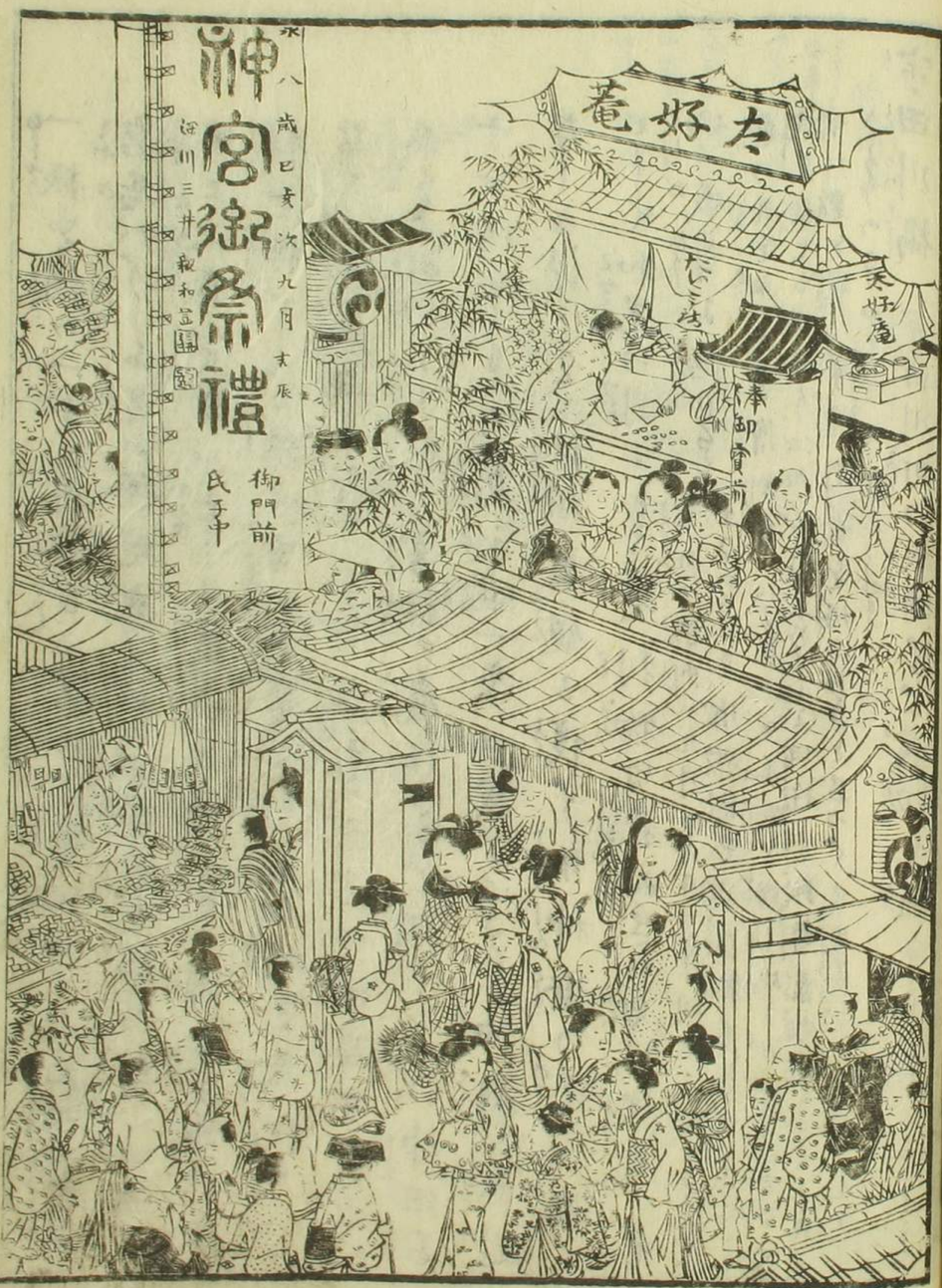


九月十六日
飯倉神明宮祭礼

十日仕廿日迄
毎日繁昌

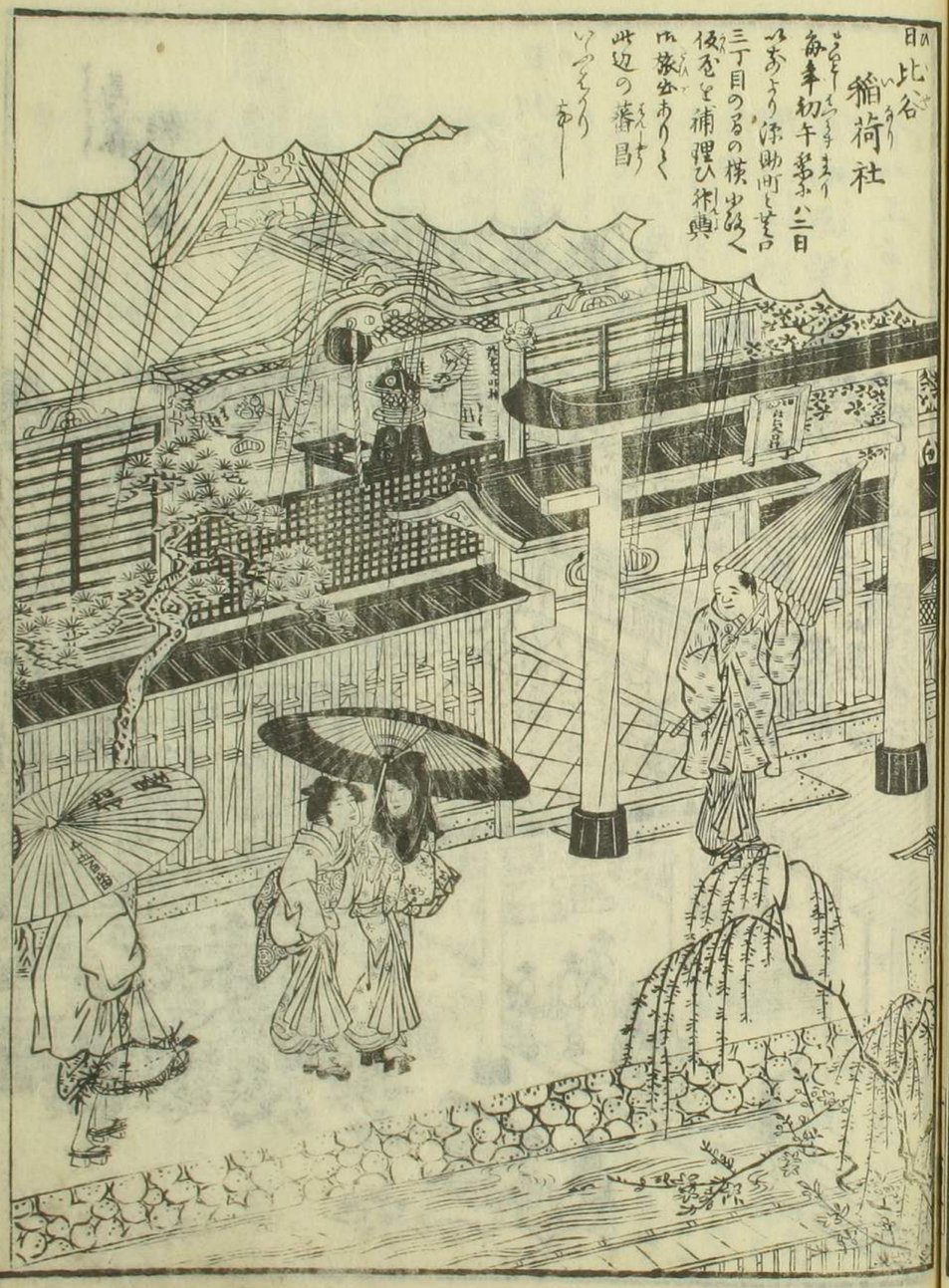
御門前
民子中

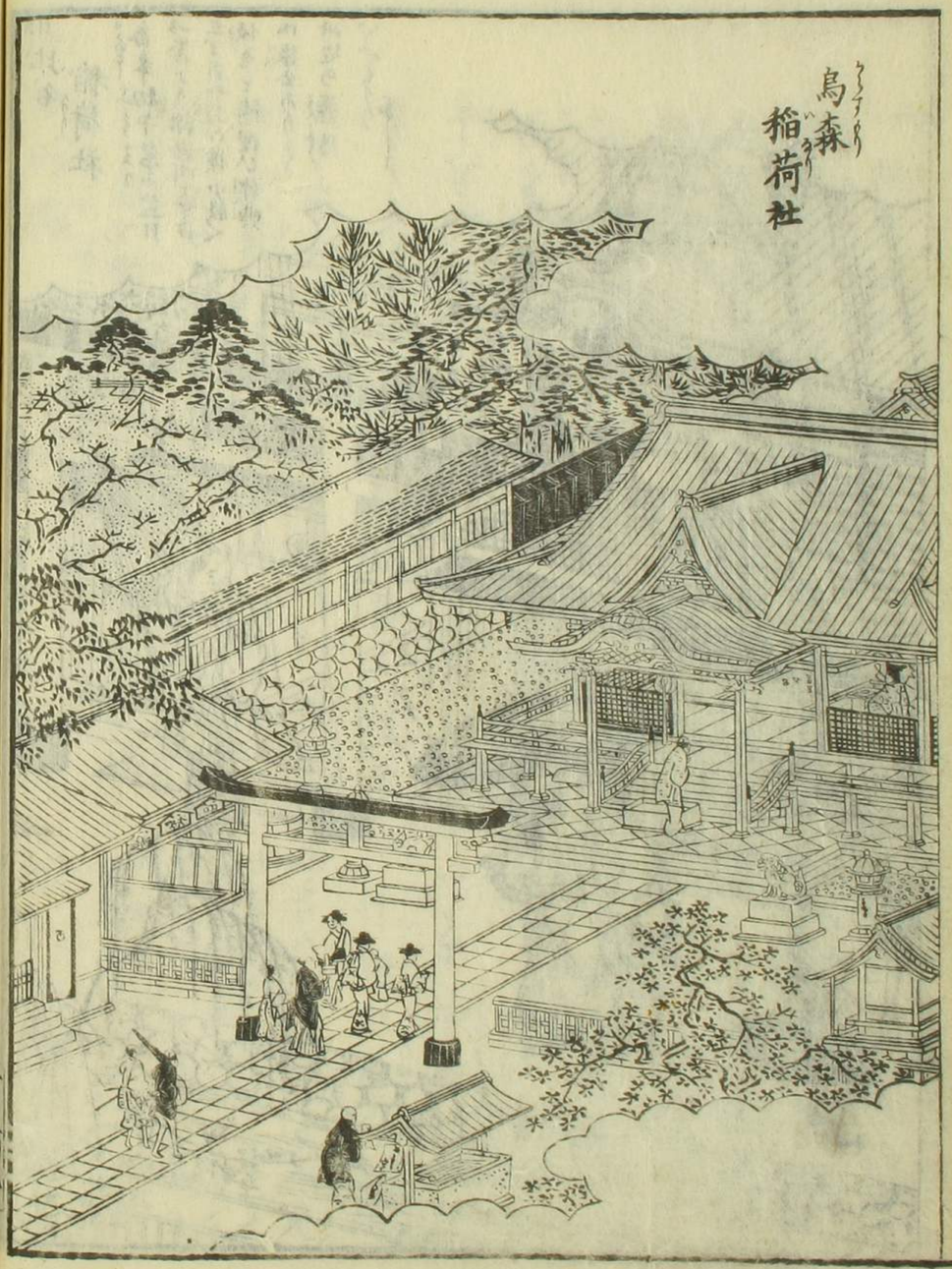
屋
千客
萬来



一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附あるゝ其頃繁昌の宮居たるゝふ遥ふ後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北城主大森實頼を亡しゝて後威を逞うせゝ頃是う為に神領を掠せゝる依く宮社ハ霧ふ朽風ふ破毛奉祀の人も なく大ふ荒廢しゝを天正ふ至ゝ四海昌平の御世 添ふも台命ふよりく當社の廢れゝるを與しゝ神領若干を附せゝ又寛永十一年甲戌ふいゝゝ神殿を修造 なゝ ふよゝ社頭舊觀ふ復す依神燈の光ゝハ赫赫 とゝ和光の月ふあゝへ利物の花ぬさハ白ひ深くゝて 神威背ふ倍せゝ當社の祭例ハ九月十六日ふ同ゝ十一日ふ至るのゝ參詣集を商ひ物多きゝ中ゝ 鬱の花を画きゝる檜割竜ゝ 生姜祭とも唱へゝ江戸名所ハ土生姜祭ふ似し故ふ世俗生姜市又 ハ題を鬱す檜割竜を俗ふちきゝと名ゝ又生姜を賣るハ尤ゝ きゝのゝすゝく拵割竜を 杵木鉢新菓物多しとあれゝ

宇田川橋 宇田川町の大通ゝを横切ゝ流ゝゝ小溝ふ架せり





烏森稲荷社

今ハ上ハ土を覆ふ為ふ橋の形を失ひ宇田或ハ宇多ハ作る小田原北條家の臣宇多川和泉守と云る人架せしと云伝ふ小田原ハ天文四年上杉修理亮朝倉北条氏綱ハ責られ品川表ハ戦を云条下ハ氏綱朝倉を亡し首を実験ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともふ中つけ普請ハ浅ん ろろハ必決せとあり東海道驛路鈴ハ長福元年丁丑四月八日大田道灌江戸ハ うる其後宇多川和泉守長清ハ品川の舘ハ住とあり又元禄開板の江戸鹿子と いへる草紙ハ昔此所ハ宇田と云ふ力を墮しろふ此名ありとのべり 澄ともふ

日比谷稲荷祠 芝口三丁目西の裏通ふあり

本山方比修験寂静院別當ハ萬治の頃藍屋五兵衛と

いへる者託宣ハ依く花洛藤森の稲荷を勧請なせしや

日比谷昔ハ比く谷ハ作る小田原北条家の所領役帳ハ比く谷ハ作る此地を大明宮内少輔所領の中に加入

此所町巾至く狭く人ハ蔭町と字す

烏森稲荷社 幸橋より二丁斗南の方酒井下野侯邸の北北

横通ふあり往古よりの鎮座といへとも年歴来由共ハ詳

なしハ 元禄開板の江戸鹿子と云る草紙ハ天慶年間藤原秀卿将門逆治の時の勧請なりとも信しかたし 又如何

ある方あらんや 當社の神宝ハ古き鰐口一口を納む 表ハ元暦元甲辰年

正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所ふ日比谷稲荷の条下に云く此の宮地ハ借地なりしかるに既に断絶なるべき頃稲荷の神宮守より告て古来ありし鏡拠なりとて鏡ハ宮守公へ預へ此燈ハ宮居つくりとあるハ当社のすを誤りしなるべし或人云く明暦の田禄より奇瑞ありしハ其後社の辺除地と社司山田氏も柳営御連歌の御連衆より別当ハ快長院と号し水山方の修験なり祭礼毎年二月初午ハ執行ハ幸橋御門ハ假屋を補理て神輿を移ハ糸詰群集して賑ハ

古河御所

足利成氏願書一通当社ハ蔵す

稲荷大明神願書事

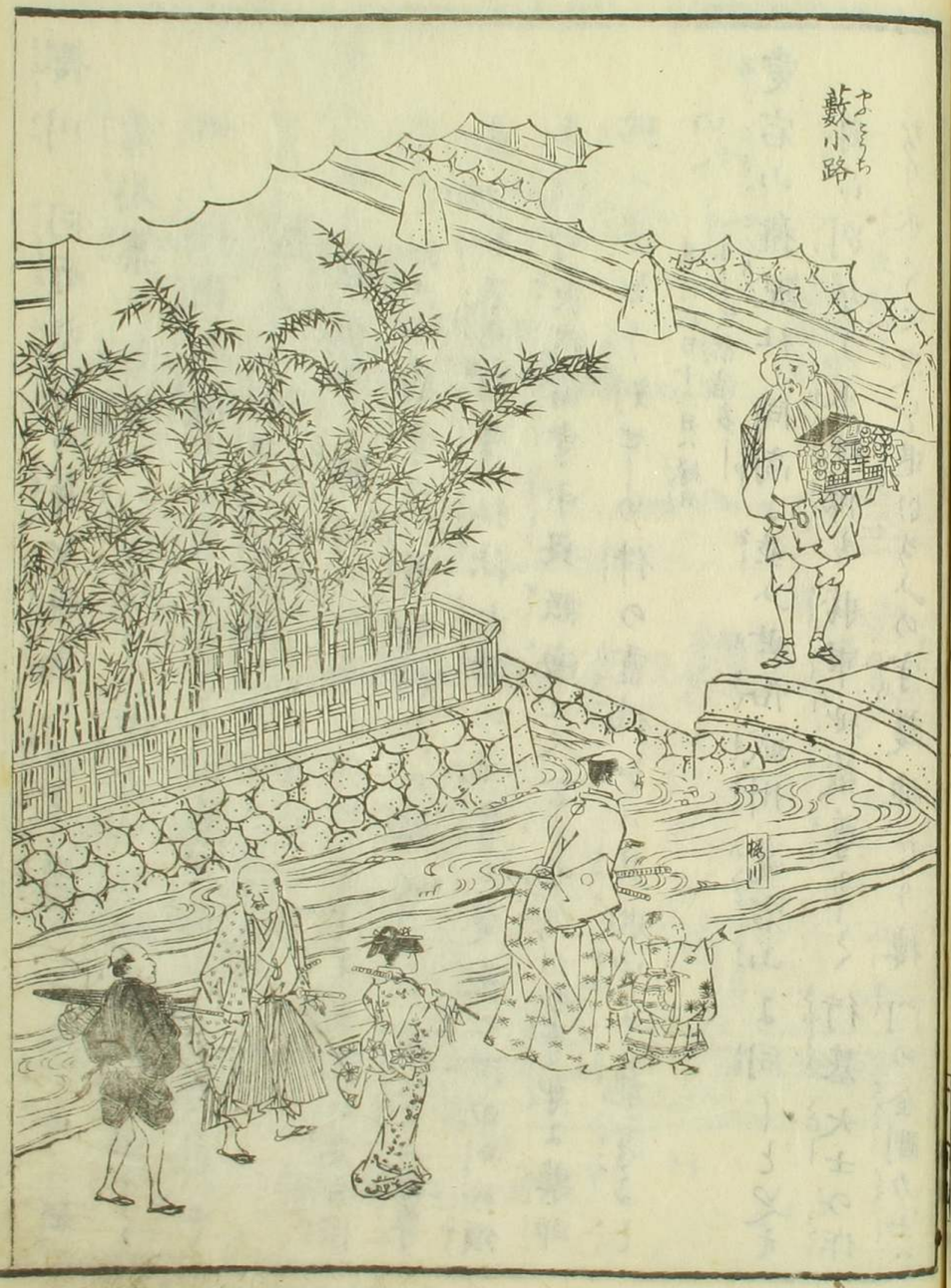
今度發向所願悉於成就者当社可遂修造願書之状如件

左兵衛督源朝臣

享徳四年正月五日　成氏判

藪小路

愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通りを云同所民の隈裏門の傍ハ少しくの竹叢あるも故ハ もつぱらとされと其来由詳なるす傳説あれとも燈とあるを三斎公此地ハ住せしとその庭中の小池を三斎堀と弱くとりの慶長より寛永の頃ハ至る細川



櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流る溝川を名く新著聞集に昔虎の門の辺より愛宕の辺迫悉く田畑なり畔に櫻樹幾株ともなくあるし其中を流る故櫻川也

いとゝとあり　下流は宇田川（渇の方へ流れ又三縁山に傍る）金杯の川へも落る

摩尼珠山真福寺　櫻川の西岸に傍ひくあるも新義の真言宗

江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり　當寺本尊

藥師如来の靈像は弘法大師の作なり慶長の頃甲州の領主浅野長政當寺中興照海上人をして自らの等身に藥師佛の像を手刻せしめ件の靈佛を其胎中に籠るとい

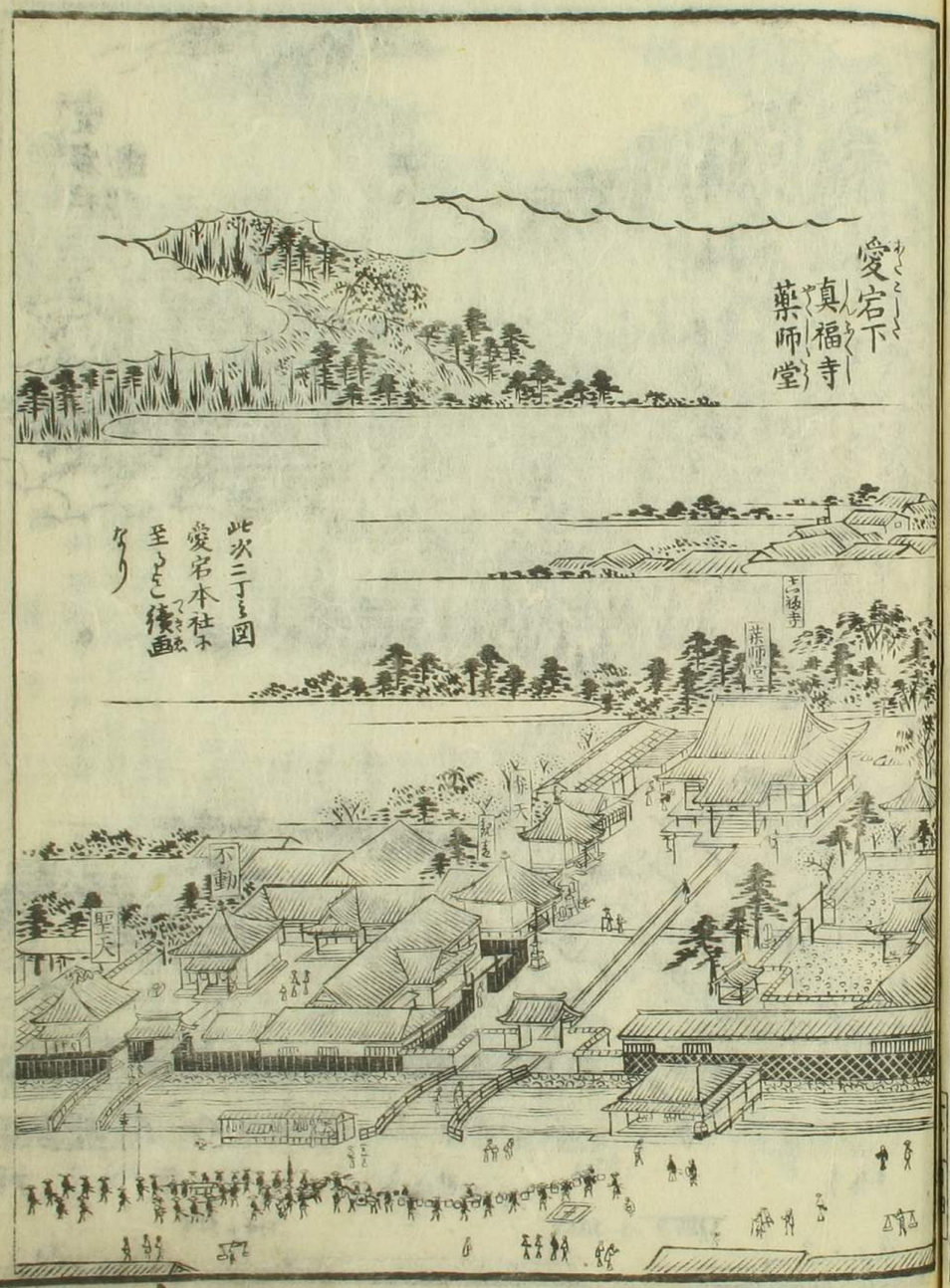
毎月八日十二日八縁日

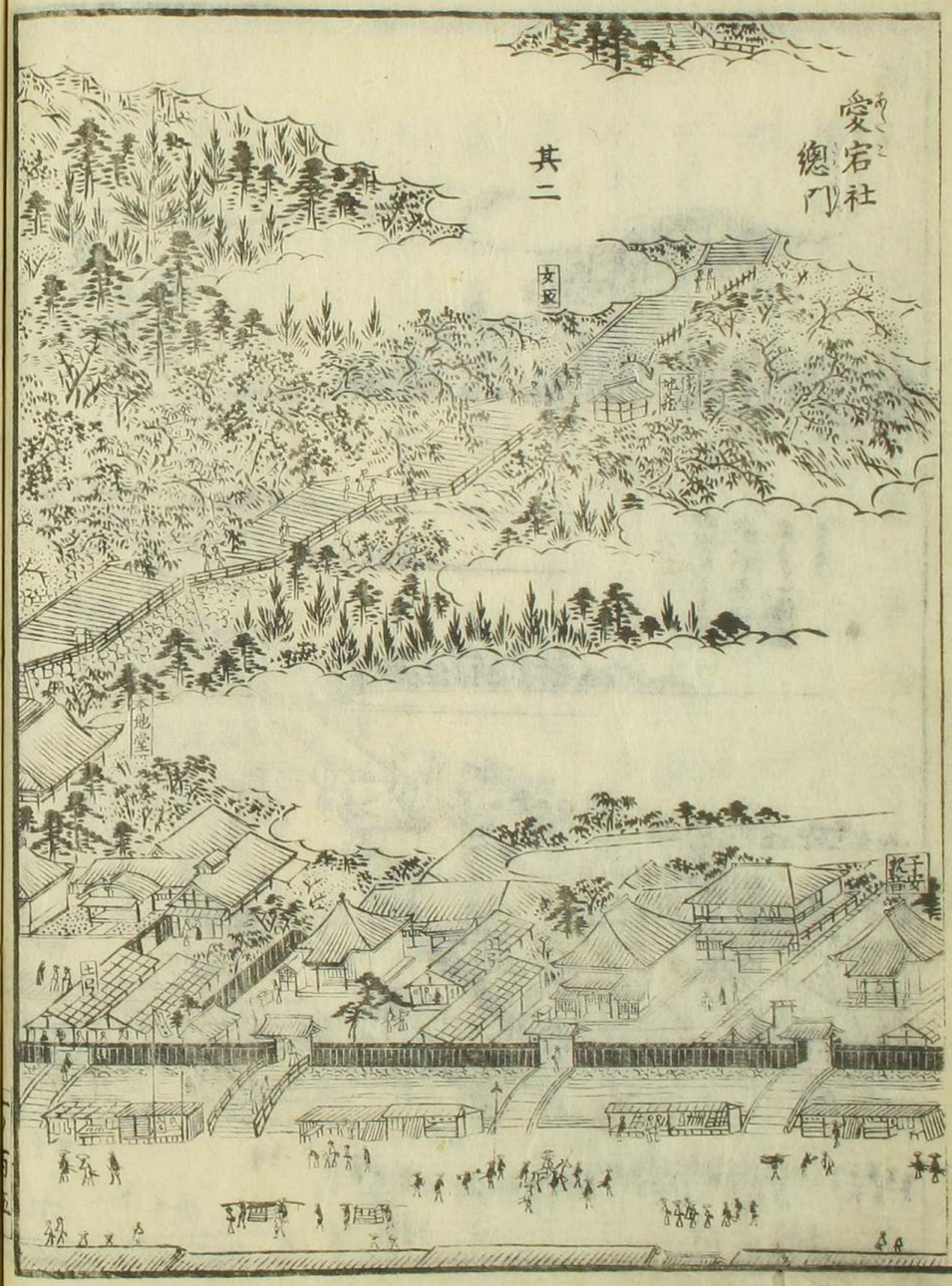
て参詣多し

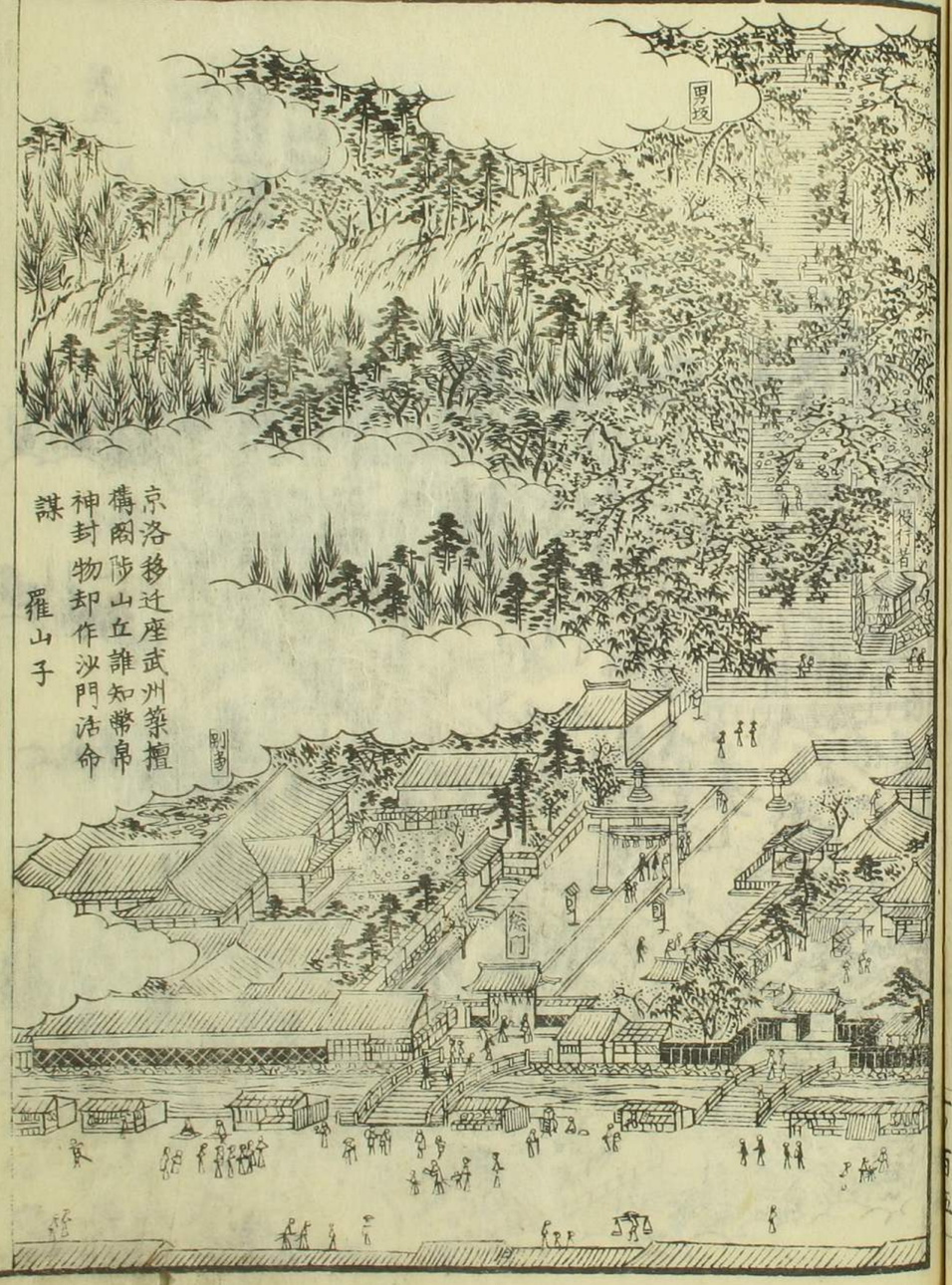
愛宕山權現社　同南に並ぶ世俗城州愛宕山に同しとい

自ら別なり本地佛は勝軍地蔵尊なり　行基大士の作

なり永く火災を退いるの守護神なり　樓門の金剛力士は

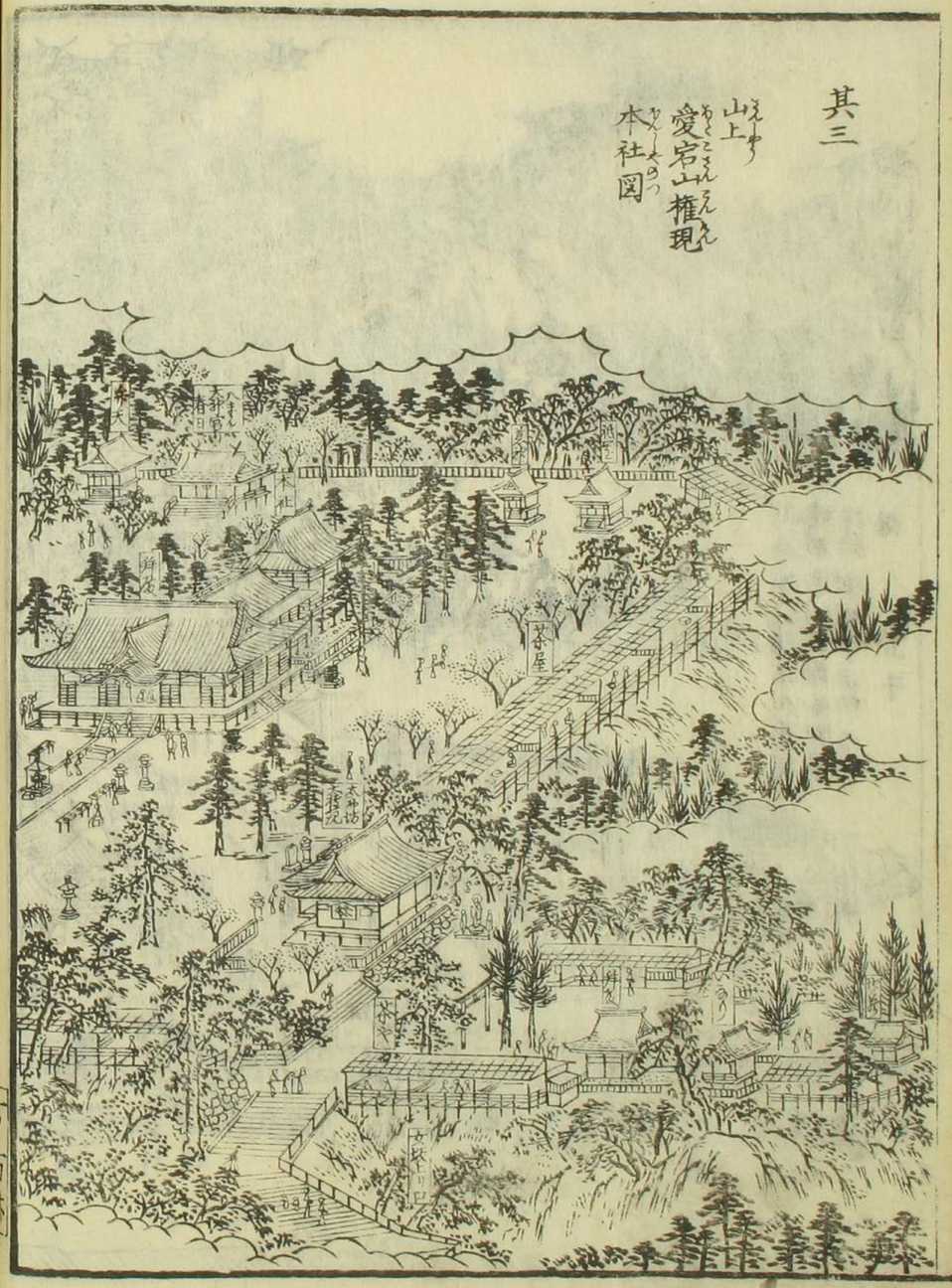



愛宕社總門
其二
女坂
地蔵堂


男坂
京洛移迁座武州築擅
構閣陟山丘誰知帶帛
神封物却作沙門活命
謀
羅山子

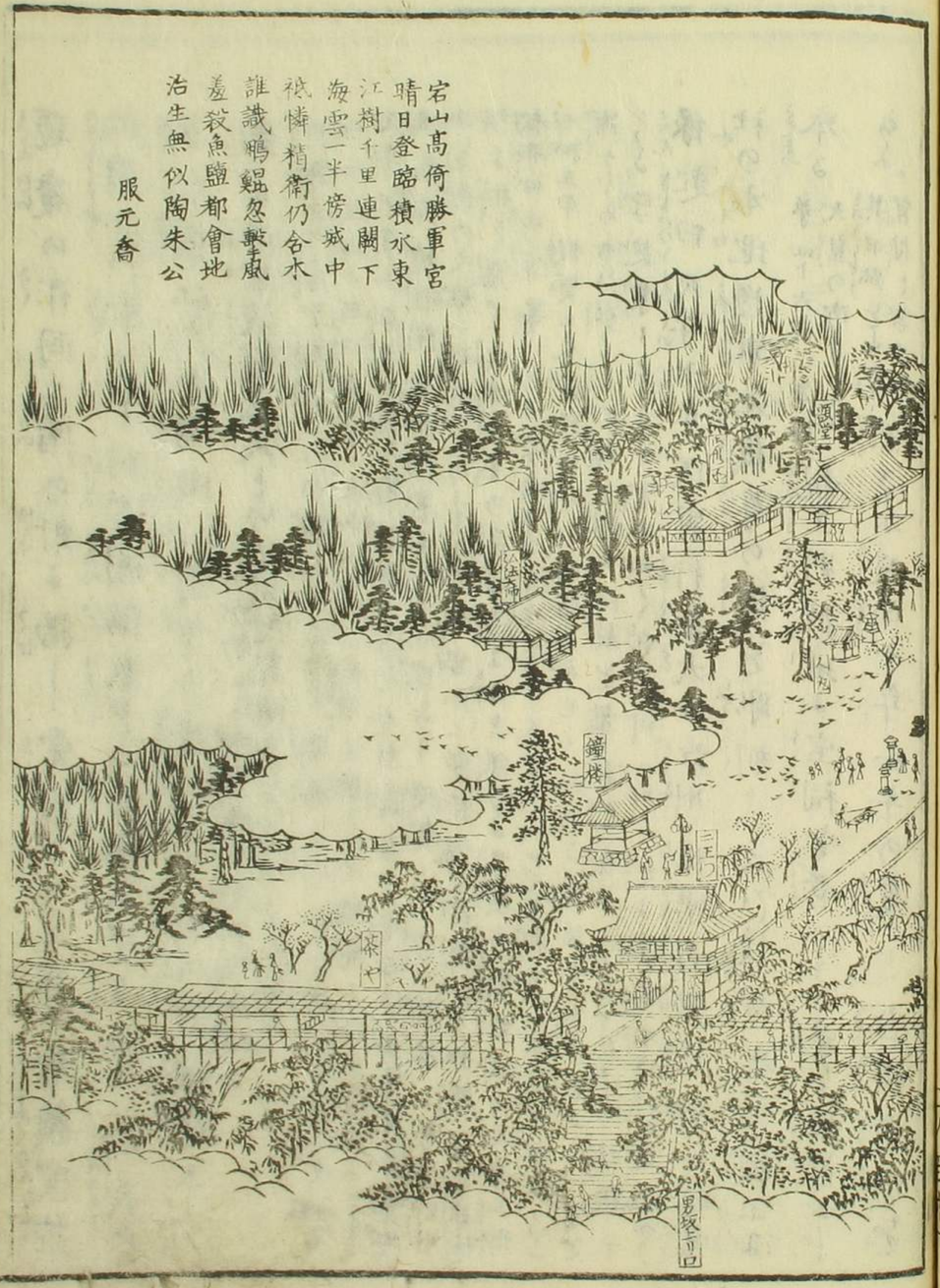
其三

山上
愛宕山権現
本社図



宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連闕下
海雲一半傍城中
褫憐精衛仍含木
誰識鴨鷗忽擊風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公

服元喬



運慶の作同二階の軒より掲し愛宕山の三字ハ智積院攉
大僧正の筆なり別當圓福教寺ハ石階の下にあり新義の
真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と
號し二世俊賀上人とす四箇寺ハ湯島根生院本所弥勒寺
當所真福寺並に當寺をいへ

神證上人字を春音といひ後春香と号し下野の人にして姓ハ
塩谷氏母ハ皆川氏なり元和五年釣命に依て金剛院に退居をゆる
天年を終に春音の坊ハ遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院
満蔵院鏡照院壽挂院等を六院あり後賀上人字ハ圓精と号し野州
西方邑の人姓ハ越路氏あり宇都宮弥三郎頼綱の後裔父ハ伊勢守近律神
祠に祈て産す其始下妻の圓福寺に住せ然るに其頃下総結城の元寿上州
松井田秀等等一世の豪俊にして俊賀上人を敬ハせ共に新義の三像と称せる
元和五年俊賀上人愛宕権現の別當に命せられ圓福寺の号を改て一宇を
開うめ永く大法鼓を撃夏冬癈ることなし一宇を檀林職と
学徒繁く雲の如く也て川のほとり起る実に江城擅林の権輿なり
縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺に化の時當
社の本地將軍地蔵尊の像を彫刻しまひし後安部内親王に
奉る第四十六代孝謙天皇の御宇なり親王則彼地に宝祠を營み是を安置かし
其日跡を今宮持と名つく然るに天正十年壬午の夏台祺泉州を
發しめ大和路より宇治を経て江州信樂に入せ賜ふ此時
多羅尾四郎右衛門といへる者の宅に舍らせられる頃あり
此像を齎す多羅尾家譜に左京進光俊初て多羅尾と号し其子常陸介綱和三好若江の三人衆といへり其子四郎兵衛
光綱江州信樂を領し云く多羅尾八郎左衛門
あり四郎兵衛光綱入道道賀のすなはち其節同國磯尾村の
沙門神澄なるものを供せしに此靈像を持して東國に赴ける
爾より御出陣毎に神澄を召し此勝軍地蔵を祈念
せしめる遂に慶長八年癸卯の夏台命により同庚
子年石川六郎左衛門尉當山を開き假に堂宇を造建し
其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立ある元和三年
丁巳同國豊島郡王子邑に於て百石の社領を附しめ
惣鹿子といふ冊子に此地ハ元櫻田の村民内藤六郎といふ人の
宅地なりしを沙門春音慶長庚子の御出陣に勝軍の法を
修せし地なり此徒れ征伐あり慶長八年九月廿四日貴賤の奈詣を
當社と御建立あり又同書に
始山城の愛宕を遠州鳴子坂に勧請
又爰に安置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といへる人の勧請
駿州宇津屋殺後

愛宕山田福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
三日ゟ修行ゟ女坂の上愛宕やとゝ
若肆のあるゝ日例ゟそれを勤む
この日寺主を始とゝ支院ゟも
出頭して其次第ゟゟ座を儲け
強飯を餐ゝ半ゟ至る頃此毘沙門
の使と称する者麻上下を着し
長き太刀を佩雷槌を差添又
大なる飯らゝを杖ゟ突初春の
飾り物ゟて兜を造り是を冠る
相随ふりの三人共ゟ本殿ゟり
ゟ入て此席ゟ至り田福寺
男坂を下り
組机ゟゟりて行
飯らゝをゟて三度
魚板をつきゟ
しゝて曰
まゝり出ゝる
者ハ毘沙門天の
使院家役者
をゝしゝや寺中の
面ゝ長屋の
所化ゝ勝手の

諸役人ゟ
至る迄
新糸ハ
九杯古
糸ハ七杯
飯ハ
ゟ
ゟ
ゟ

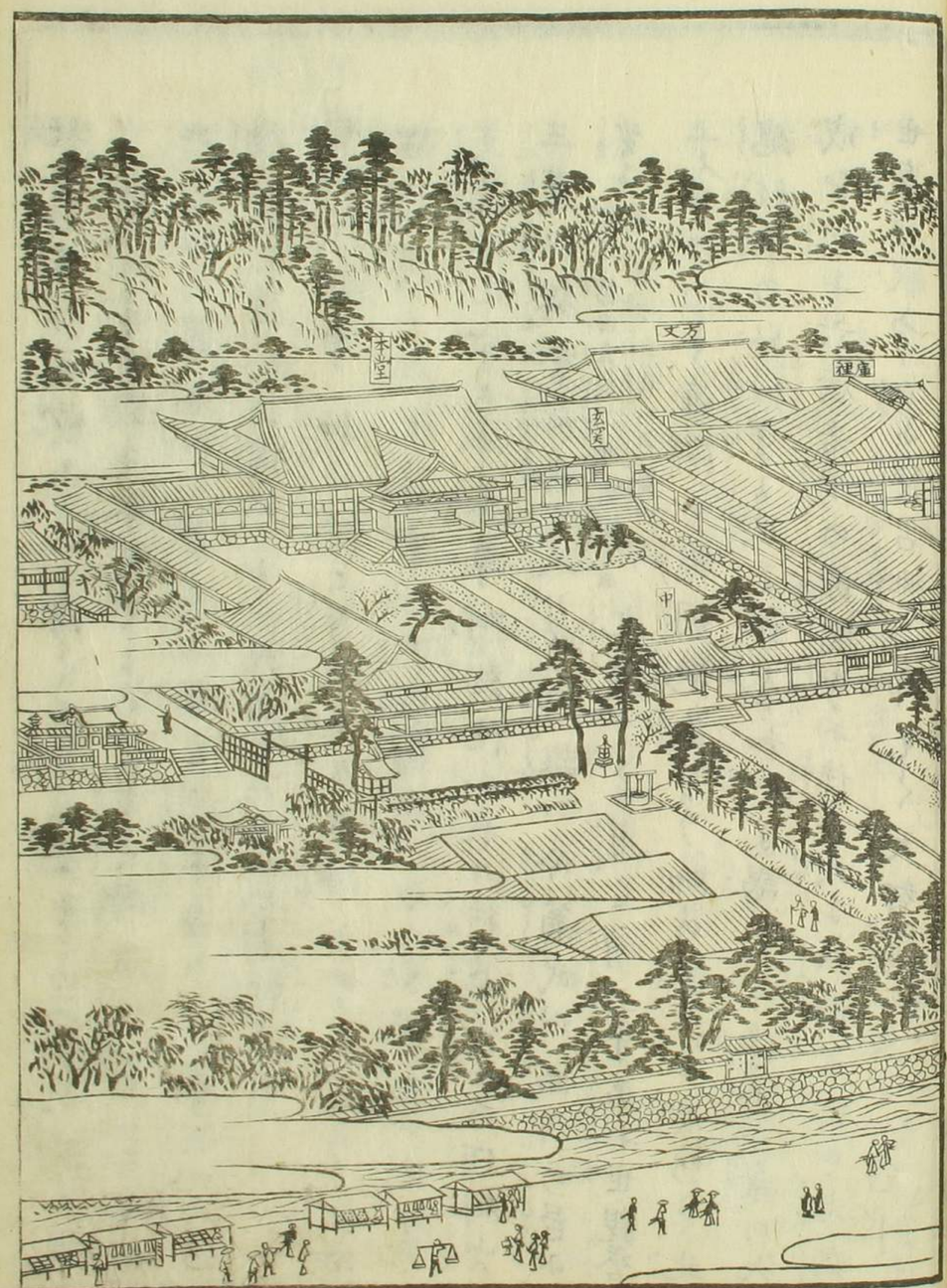
あり此説圓福寺に云ふ澄とも云ふ按ずるに此山の地主神ハ毘沙門天なり
父を祝社の相殿に安置せ毎歳正月三日毘沙門の使と称する舊祀の式あり其式畫上に詳
日光の古式に准ずして當寺に行ふのも恐らくハ俊賀上人より始るなん欤
按ずに當寺開山俊賀師ハ始野州なり野州辺にくゝの強飯の式ありて世に所謂

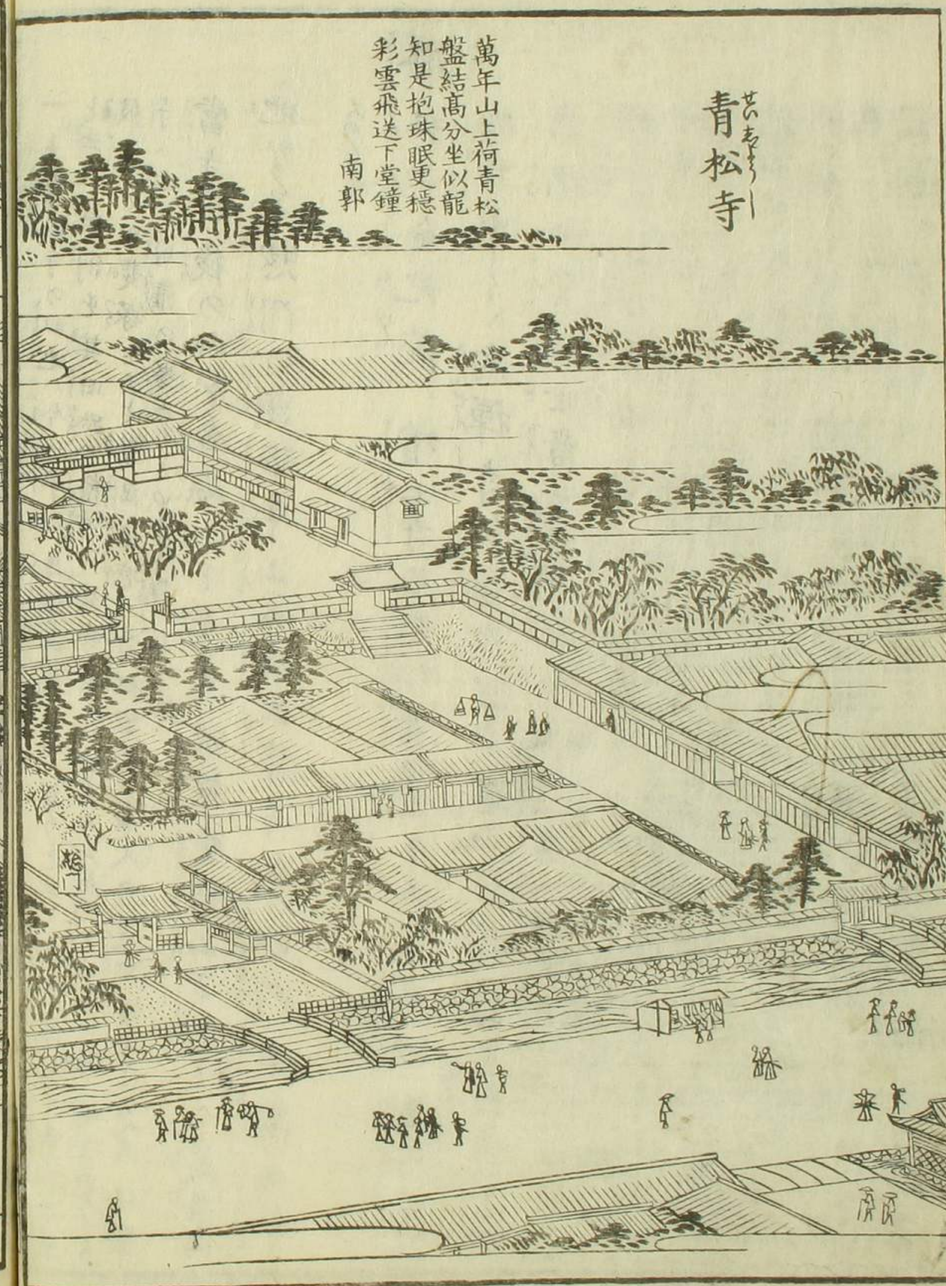
抑當山ハ懸岸壁立しく空を凌き六十八級の石階ハ畳こと雲を挿ぐめく聳然たり山頂ハ松柏鬱茂し夏日といへとも
ちゝに登るに涼風凛こゝ炎暑を忘る見落せ
三條九陌の万戸千門ハ霞をつゝ行く所せく海水ハ渺焉と
のゝけく千里の風光を貯へ尤美景の地なり月こそ廿四日ハ
縁日と称しく参詣多くなり廿四日ハ六月廿日縁日と号
けく貴賤の群参稲麻の如し（縁日植木の市立く四時此花木をうゝふ世俗此親なり）

萬年山青松寺　同南に隣る曹洞の禅刹ゆゝく江戸
三箇寺の一員なるハ釋迦如来閑山を雲崗俊徳大
和尚といふ文明年間太田左衛門佐持資草創を初め貝
塚の地にありしを後（或云天正又慶長）此地に迁さる故に今も俗に貝塚
青松寺と称せり

一に青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云ふ南向亭云く青松甲斐
と云人草創を其旧跡ハ糀町の貝塚當時玉虫八左衛門といふる屋舗にありく
彼墓を甲斐塚と云と菊岡沾涼ハ青松宮内と云人の建立なりといふ又當
寺に太田道灌の塚ありとのべた詳なり
當寺の後の山を含海山と号く眺望愛宕山に等しく美景の
地なり惣門の額万年山の三大字を閩沙門道霈の筆
なり

勝林山金地院　増上寺の西切通の上にあり京師南禅寺の
塔頭ゆゝく南禅寺に宿寺なり五山の僧録と称せ
唐佛の聖観世音菩薩なり（或人云宋人陳和卿作なりとの説毎月十八日観音戯法修行す）
閑山を大業和尚と云其頃碩学なりしかハ五山の僧録司に余せ
（都留の毛衣と云草紙に古ハ寺社裁許の事ハ寺社の所へ決断せしむ寛永中より武家の職となる云く）
称する古木あり今ハ焼亡ひく境内に青葉楓と
頃の物なり後此地へ閻魔王ゆ石像ハ塔中二玄庵の前にあり
栽るとい宝永の頃南部の領主霊仏に依く彼地より麻布の別荘に


方丈
庫裏
玄関
中門


青松寺
萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭

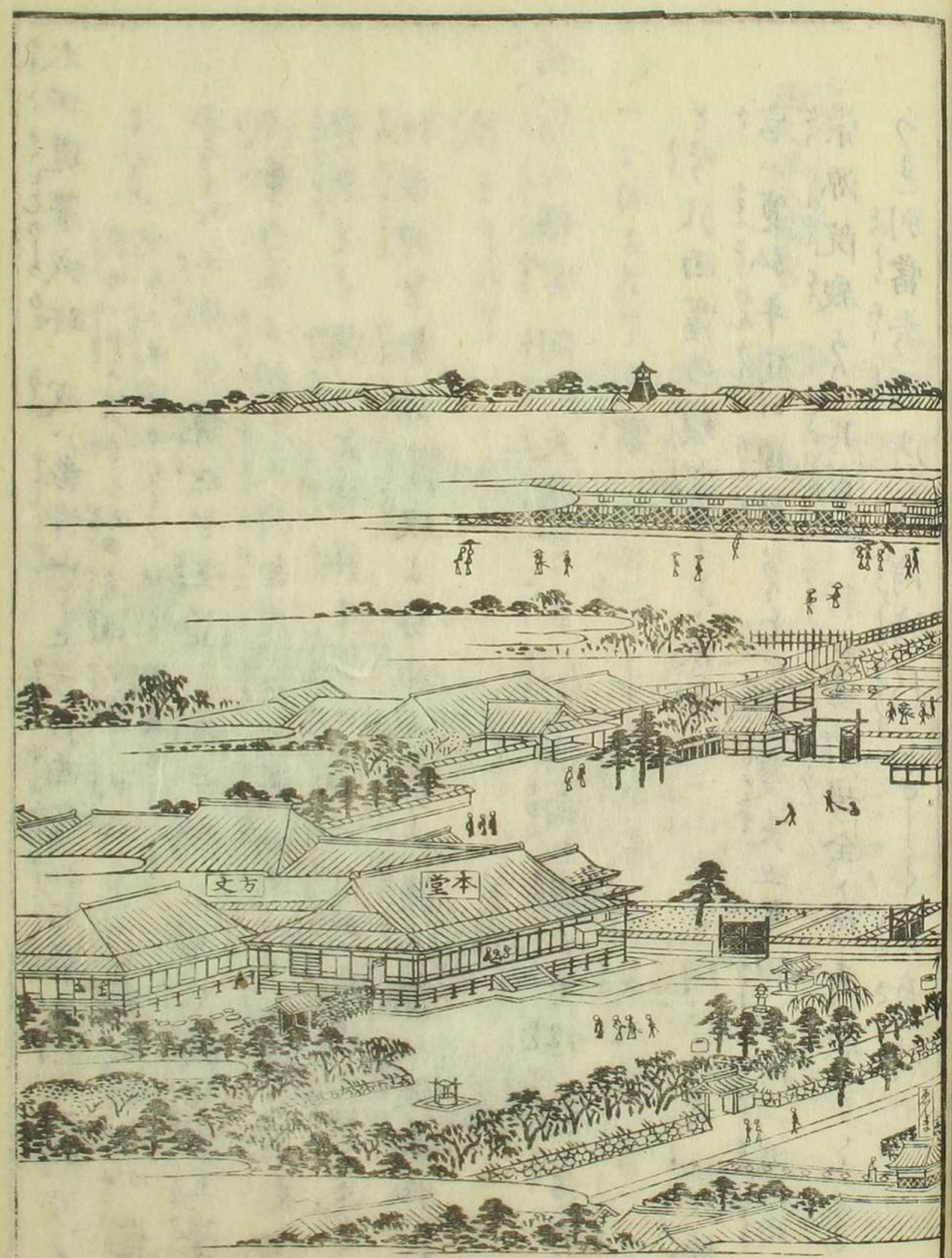
迄されて再び威霊あるふよりくゝ又こゝふ安をゝゝゝ金地院と書せ〳〵三大字の額も水雲寫とあるも方丈同淳溟筆薦福殿岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の像ハ大の月三月續くる中の月の十八日ふハ開帳あり

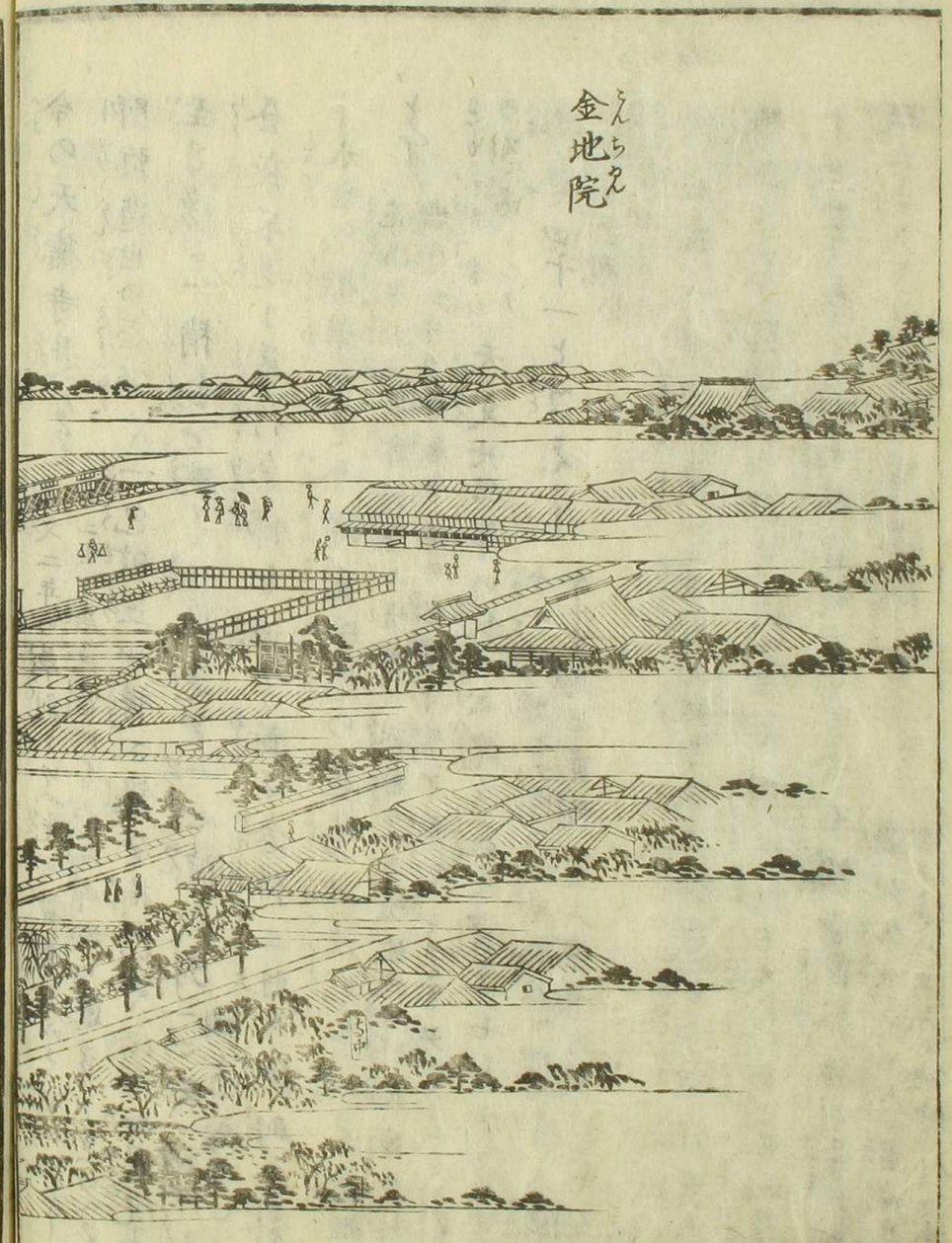
光明山天徳寺　和合院と号ハ西久保神谷町にあり花洛智恩院に属せ浄家江戸四箇の一ゆゝく紫衣の地なるも支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑ふ生る父を藤田左衛門尉道昭と云母ハ富永氏或ハ云冨田氏九歳にして甫て増上寺第七世親誉上人に従つゝく雑染を聰明絶倫なり師の遷化に及ひゝく北總飯沼の弘経寺に至て鎮誉和尚に謁しゝく浄土一乗の大戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉せ志猶世塵を厭ふゝ而ふ後古郷に帰ゝく天智庵（知或ハ又地に作る）を草創せ

今の天徳寺是なり（天文二年の草創とす先師親誉を以て開山祖とし自二世に居る舊地を西丸帯城の邊師弥道世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひゝく洛の知恩院に至て傍に一精舎を建ゝく住ハ是を一心院と号（一心院ハ念佛三昧の一本寺）昼夜不退に常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製し永世の標準とせ今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩とす（花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院挂の極楽寺田井の倉念寺淀の念佛寺を草創す必ずしも不断念仏の場）

天文九三年の秋一心院に寂せ実に七月十九日なり化壽四十一と云へり（今世間用ふる所の二連数珠も師の製なり佛号を唱ふるの徒此念珠を用ひ）

城山　西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の城跡といひ伝へるも誤なるへし背熊谷氏の人ハ居宅抔を一地なるゝ同所神谷町にあるふの石橋を熊谷橋と号るも故あるへきれと今傳説詳なるす（菊岡沾凉云此所ハ背麻布殿とゝの出丸の地なりしと云

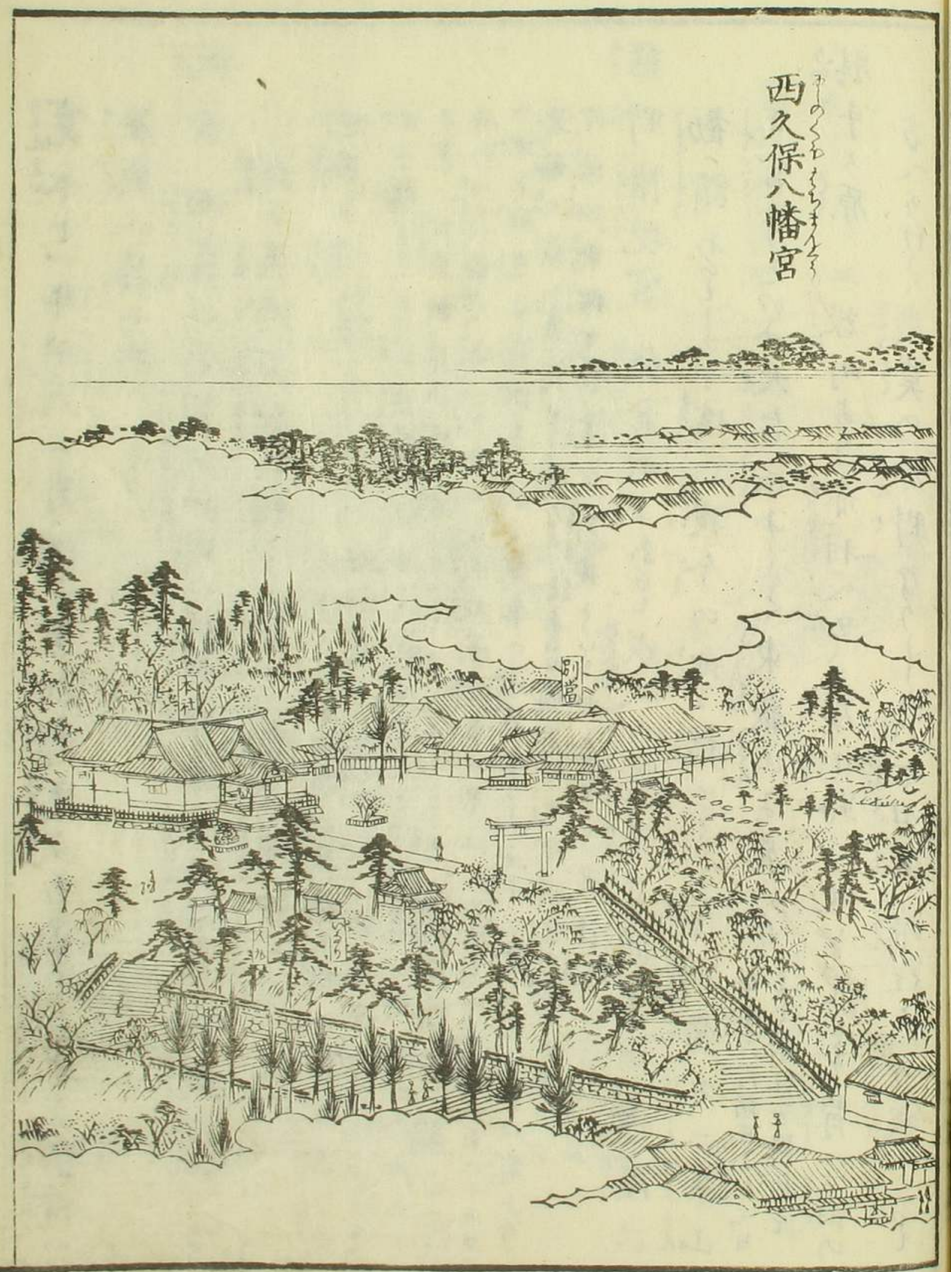

文方
堂本


金地院

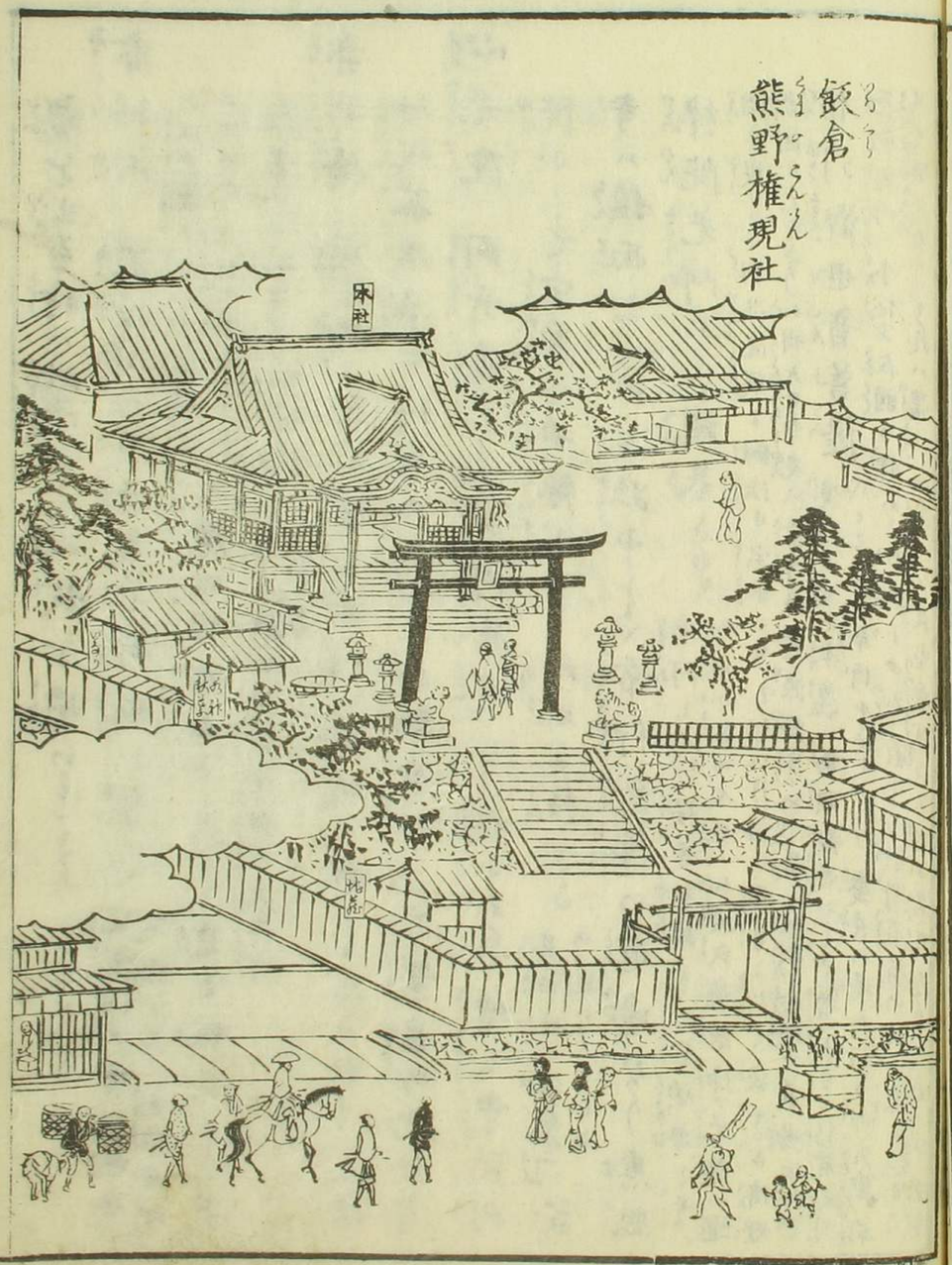
太田道灌城跡　或ハ番神山と号し西窪仙石家弟宅の地なり
（紫の一本よりも太田道灌取立ル城地なり　今も土取場なり　堀崩せしと云く）　又昔此地ハ小堂
ありしく土佛の釋迦を安置し法華堂と号く後豆州玉澤
法華寺の日朗上人持念する所の墨画の三十番神の画影を
携来りし堵人を結縁せ然る小田原北条氏後ハ社を建く
彼番神を勧請す故ニ番神山と云ふ其画像ハ後京師に
移せりとあり

西窪八幡宮　同所天德寺裏門より南の方三町程飯倉町
一丁目よりあり別當ハ天台宗中ゝく東叡山の末八幡山普門院
と号し西窪の鎮守ゝく旅所ハ小山あり相傳ふ當社八幡
宮ハ寛弘年間の鎮座なりと又慶長五年関原御一戦の時
崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書をあ
らせ別當秀圓御祈禱修行せしく其奇特ありしハ

西久保八幡宮



寛永十一年甲戌二月終ゟ宮社御建立あるゝとゝゝり祭禮ハ
毎歳八月十五日なり
飯倉　西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地なる
故ゟ其御饌料の稲を扱めゝ倉を飯倉と唱へいゝ
地名ゟ呼るなるゝゝ
地を領せしゝ北条家の所領（永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫飯倉彈正忠太田新六郎島津孫四郎等此役帳ゟ）
あるとハ往古飯倉の地の廣同書ゟ飯倉の内撰田と
所の北条家人遠山左衛門大夫政景元亀二年江戸ゟ五十五貫六百八十五文
の地を彼寺ゟ寄附もるゝゝゟ飯倉の地名あるゝゝ此中三貫三百文ハ前より
箕輪大蔵ゟ寄附せし地なり照合せるへし
神鳳抄東鑑等の書を引援あるゝ猶前の芝神明宮の条下ゟ
熊野権現宮　飯倉町ゟあるゝ或人云養老年間芝の海濱に
勧請あるもしを遥の後今の地ゟ移さるゝゝ別當ゟ三集山
正宮寺といゝ天台宗ゆゝく東叡山ゟ属せり　毎年六月朔日ゟ三日まて祭礼を修行も
勝手ゟ原　土器町ゟ赤羽へ出る廣小路の辺をいゝゝゝ背ハ三田の
方へうけく廣寞の原野なるゝゝゟハ太田道灌江戸の城ゟ



勢を出せ時ハ此所ゆく人数を揃らもしとなり

赤羽川　渋谷川の下流なり新堀と号く（延宝江戸図ニハ麻布新堀とあり元禄開校）是を堀らしめ

の江戸鹿子といふ冊紙ニハ元禄の始釣命ありて此河の上ハ赤羽の池と云あり江戸名勝志ニハ溝口信濃守伊達美作守

たるなりとの両説あり

赤羽橋　同し流ニ架せ按ニ赤羽ハ赤埴の轉したるなるへし欽

此辺茶店多く河原の北ハ毎朝青市立て繁昌の地あり

心光院　同所橋より北の河原道より右ニあり増上寺ニ別

院ハして宝暦の頃豫山より此地ニ移さる其旧地ハ涅槃門当の辺なりと云

寺ハ鎮西上人の古跡ハしく常行念佛の道場なり恵照

律院光阿上人開基（流ニ捉しく勅深流頻ニ綱法を宝永三年乙卯八月晦日当寺ニ光阿上人ハ横連社鎖誓心岩頑夢と号ク加州大日寺及ハ当寺并恵照院等ニ刑基し不動念佛の道場を勅ハ州小松の人姓ハ加波氏越前浄光院の聞

布引観世音菩薩（境内ニ安置ス木尊ハ馬頭観音ハ増上寺の別者文同代くに奉持するとい慶長の頃丹羽五郎九郎家

長重奥州二本松ニ在國の時ハ熊野道者の馬ニ乗て城下ニ来り長重乗試るニ実ニ名馬なりしかハ見名を

其馬駿正なりしかハ農人ニ与へ

道者と唱ハ後ニ大将軍家へ献せ駄を追せのふ布一端を後輪の塩手

両方ニ垂れ附のふ彼布一文字ニ翻る故ニ改く布引と命せしく愛し

ゆひしハ彼馬駿きるの後増上寺境内ニ埋めく石塔を建しる其後又

件の石塔を本尊として馬頭観音ニ崇むるとなり宝暦の頃寺と共ニ此地へ

引れしし

竹女水盤　新著聞集ニ云江戸大伝馬町佐久間勘解由ハ呂仕の下女たりハ

天性仁慈の志深く朝夕の飯米己れ分ハ乞丐人ニ施し其身ハ

水盤の角ニ網を置く洗ひ流しの飯をうけ其溜を自分の食料ニ

常ニ称名怠るなく後ニ大往生を遂しる彼竹女ハ常ニ網をあて置し

水盤ハ今増上寺念佛堂心光院の門の天井ニ掛きあり件の水盤ハ光

明を放ちしるハ当寺の縁起の中ニ詳なり

芝浦　本芝町の東の海濱をいふ芝口新橋より南田町の邊迄

惣名なり上古ハ芝を竹柴の郷といひしを後世上略して柴

とのみ呼来もしも又文字も芝ニ書改しとも

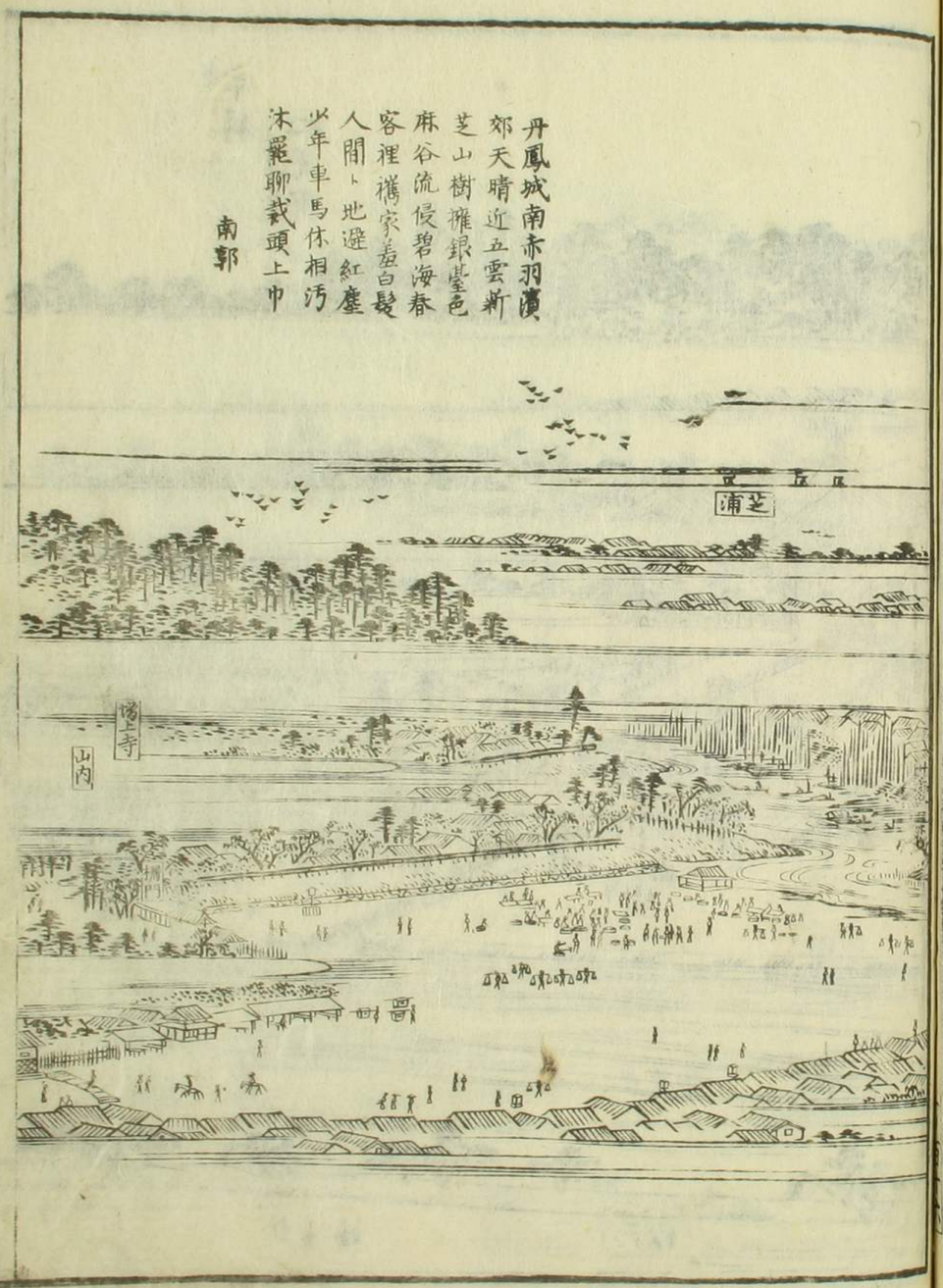
猶三田泉海寺の条下ニ詳なり南向亭云芝といハ彼地の古苑の説ニ海岸

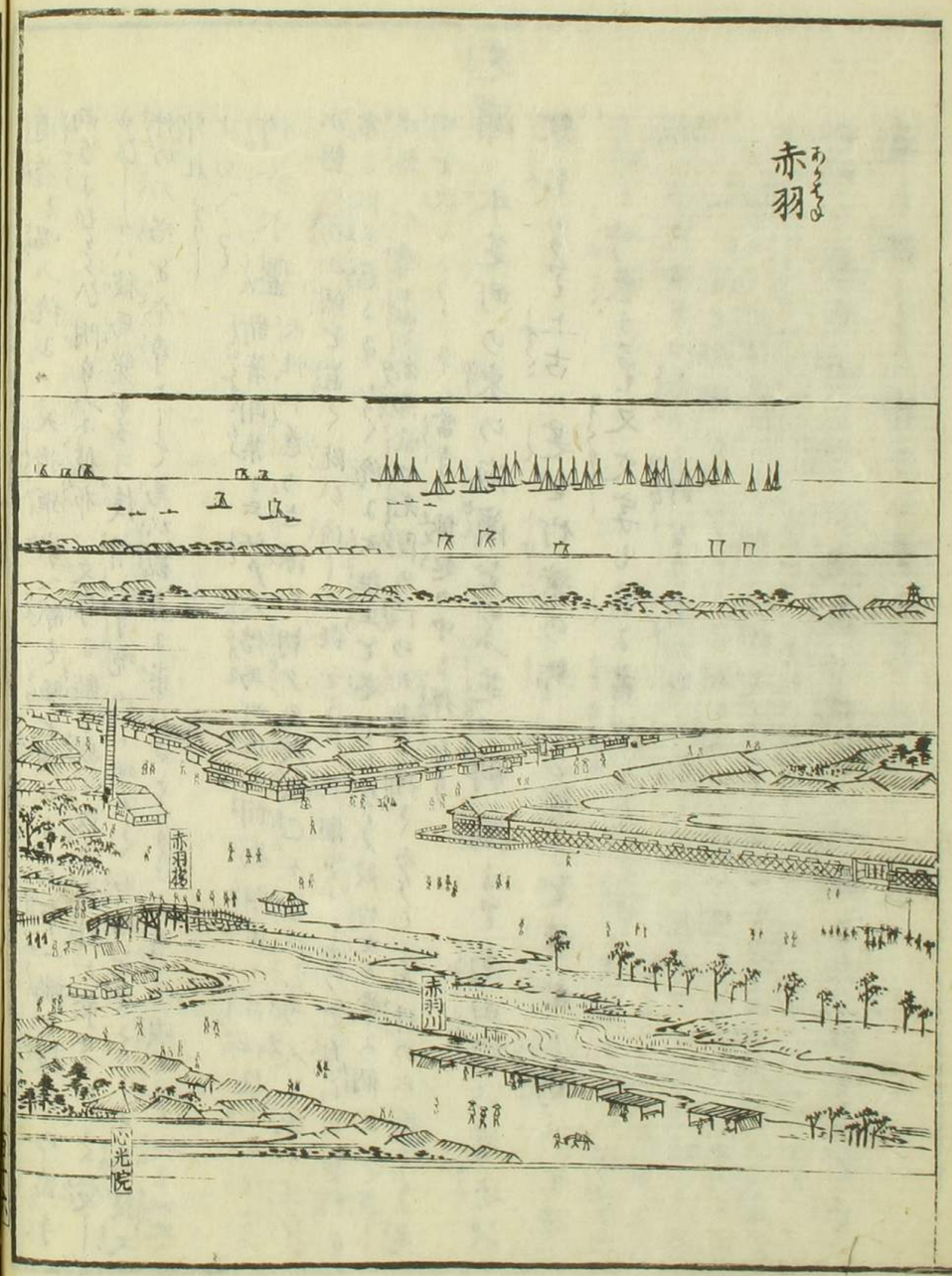
近き所ニ柴を建海苔の小枝を柴といふ地名ニよひ

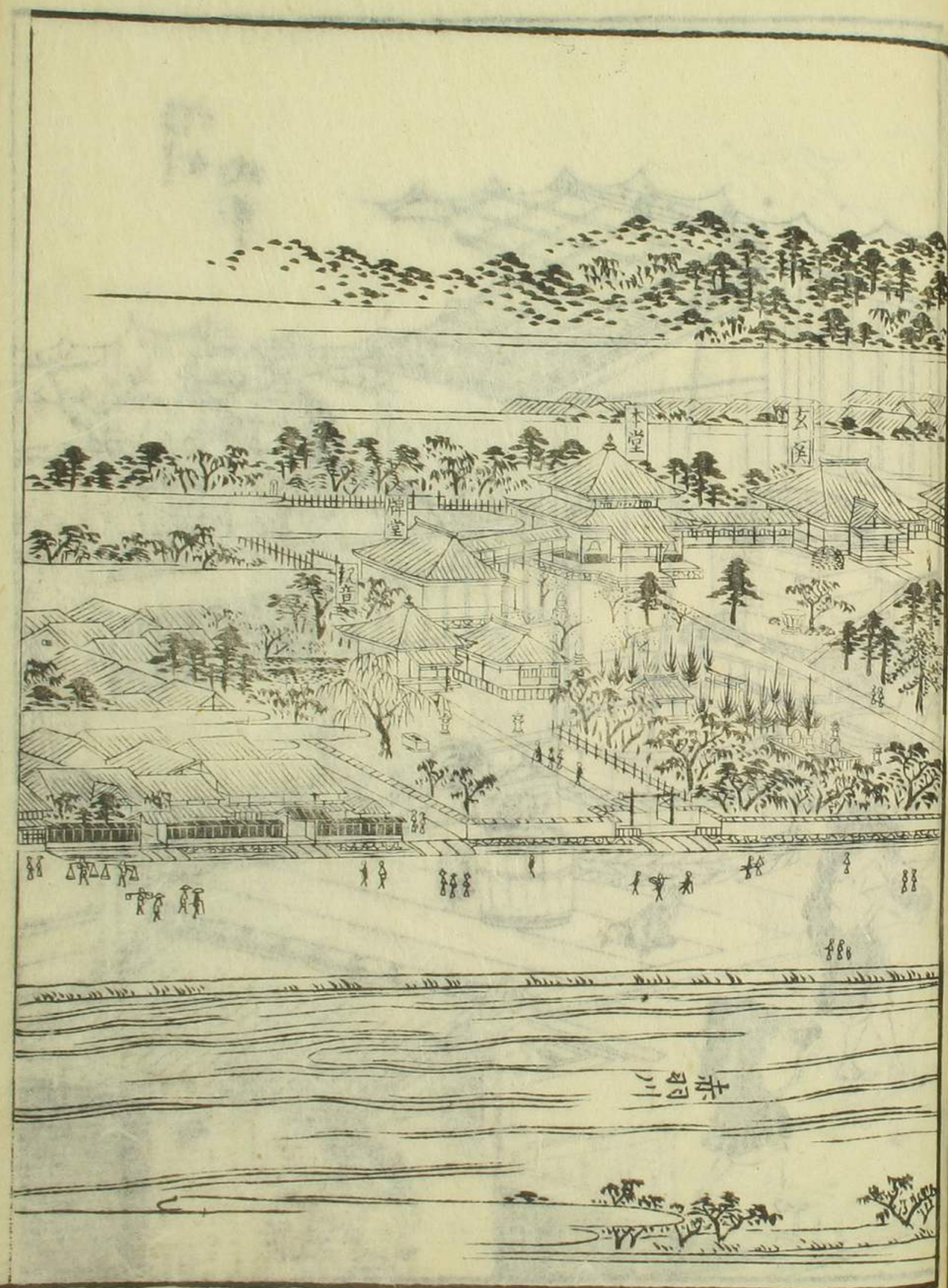
後芝ニ改作るとも云く按ニ此説是なり海苔をとるを元浅草の辺の

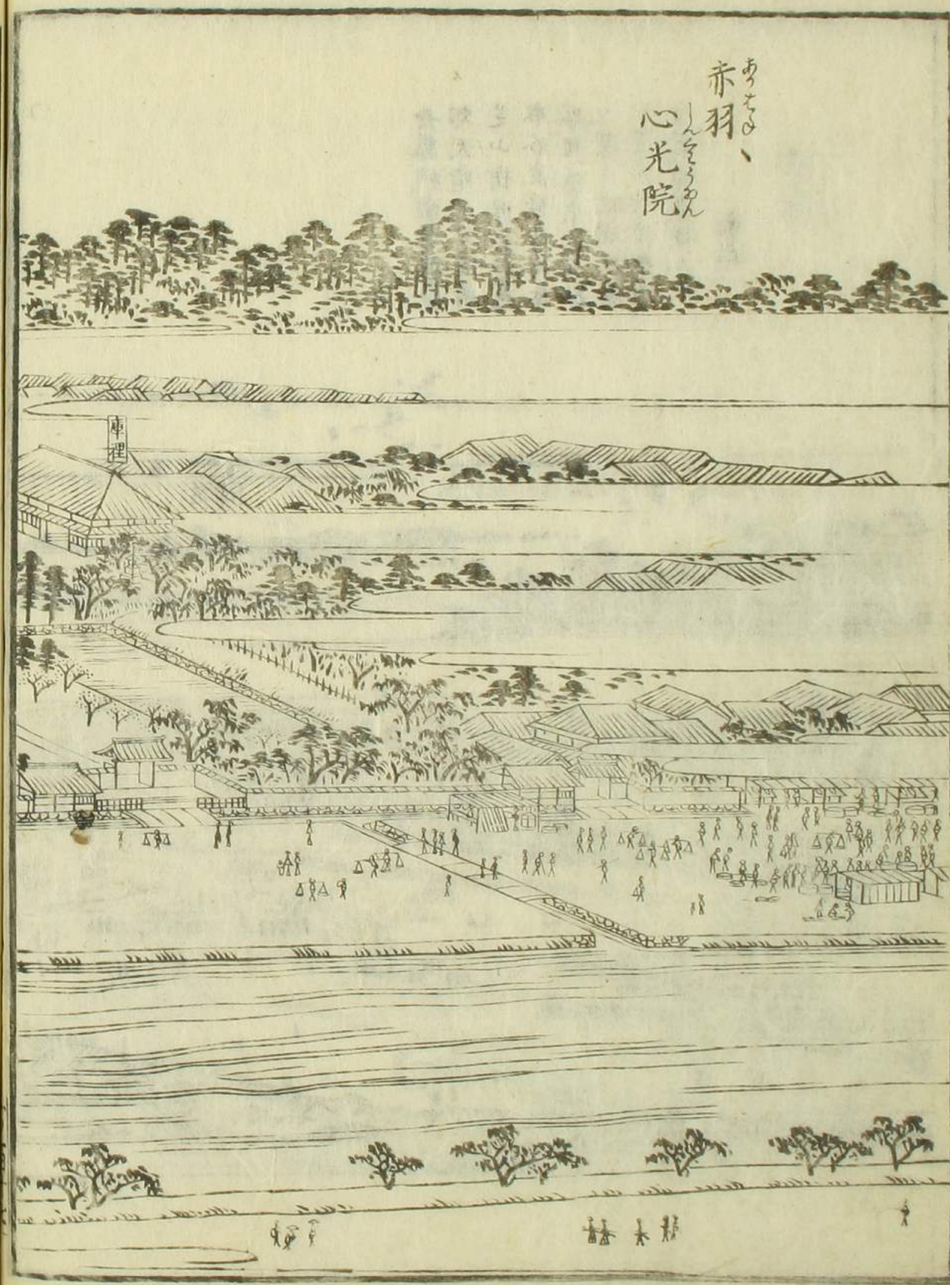
昔ハ今の品川ハ古へハ海苔なりしかハ此地を雑魚場と号け漁猟の地なり此海より産するを芝

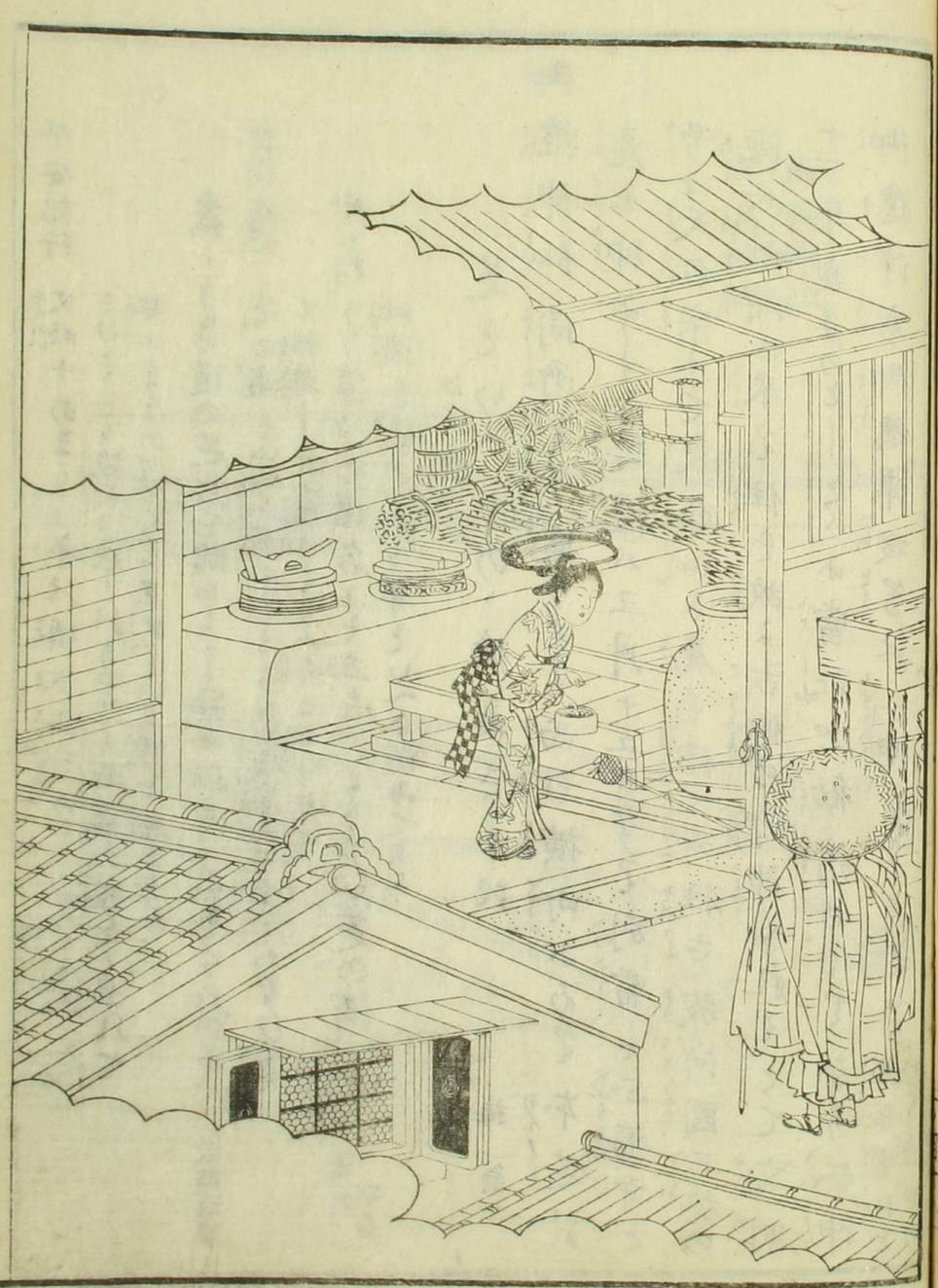
肴と称しく都下ニ賞せり

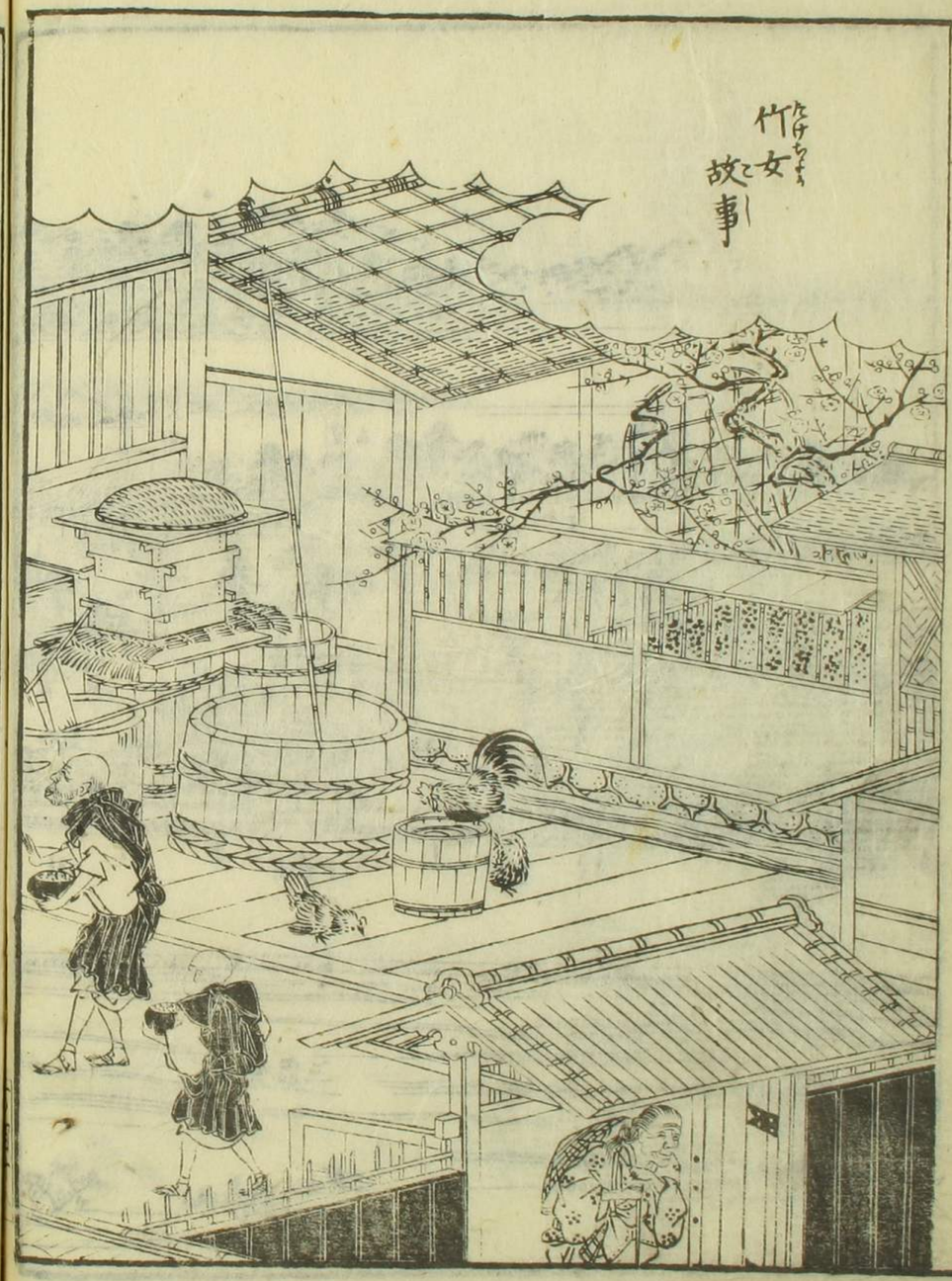

丹鳳城南赤羽濱
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡襟家姜白髮
人間ト地避紅塵
少年車馬休相汚
沐麗聊裁頭上巾
南郭
芝浦
山内
慈上寺


赤羽
赤羽橋
赤羽川
心光院


本堂
玄関
障堂
観音
三色桜


あかはね
赤羽
しんこうゐん
心光院
庫裡




竹女の故事

平安記行　文明十あまり二年より頃水無月のなかばつかた土さく
さけくとう旅人の心ちもりのせゝ避暑の床をもとめて
都ゐまうのほりね中暑芝といふ所を過るとて

太田道灌

露しゝき道の芝生を蹈ちらし駒ゐ任せるあきられの色

田園雑記　芝の浦といふる所ゐいにしへ塩屋のけぶりもなびき
て物淋しきふ塩木をこゝ舟にのりて見て

道奥准后

やうやうり藻汐の煙名ゐを立舟にこりつむ芝の浦人

此浦を過くゝ井といふる所ゐて云く

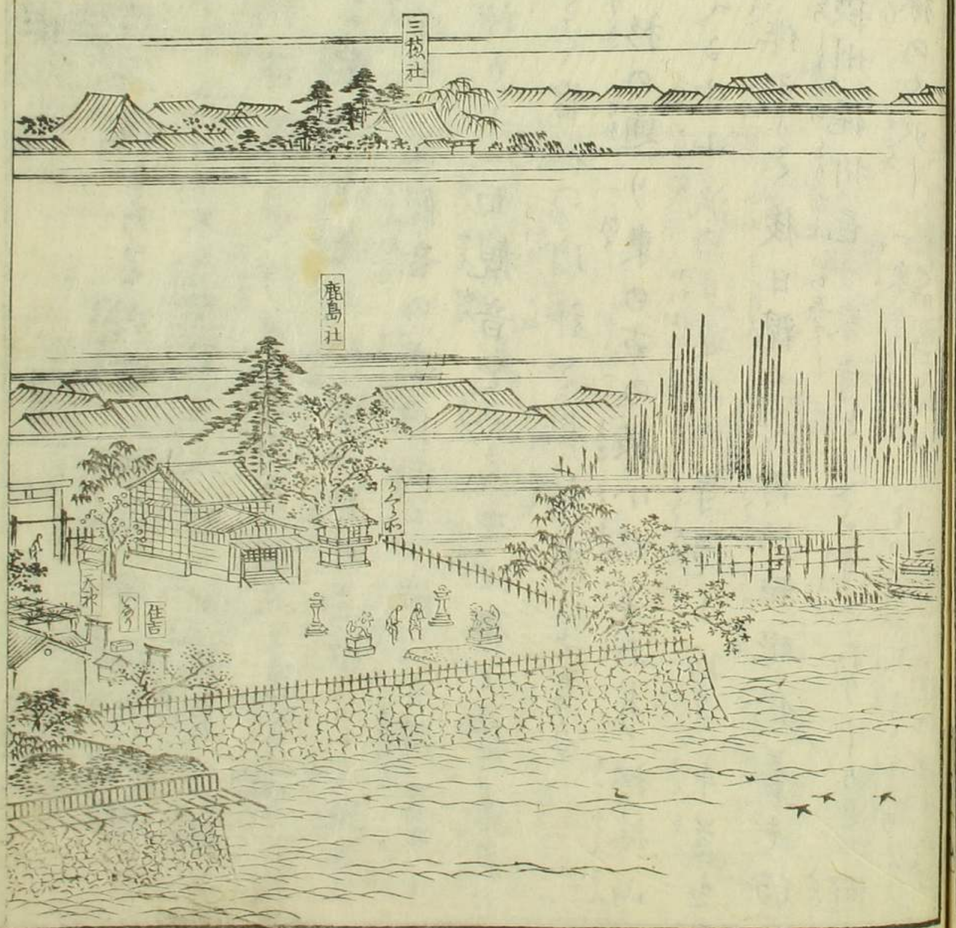
江戸ゐて

芝といふものゝ候夏さしにけ

梅翁

御穂神社　同所ゐ芝通りよりも西の横町ゐあるも本芝にて
産土神ゐ〻く祭禮ハ三月十五日なるも別當を正福寺と
号す天台宗すて東叡山ゐ属を侍へ云往古駿河國三穂の
海人此浦ゐ来る住を故ゐ古郷の御神あれをとて文明
十一年庚子のとしこゝゐ當社を勧請せしやなるゐ祭神
御穂津彦御穂津媛なりとゝもに二神なりとゝも土俗當社を
疫癘の

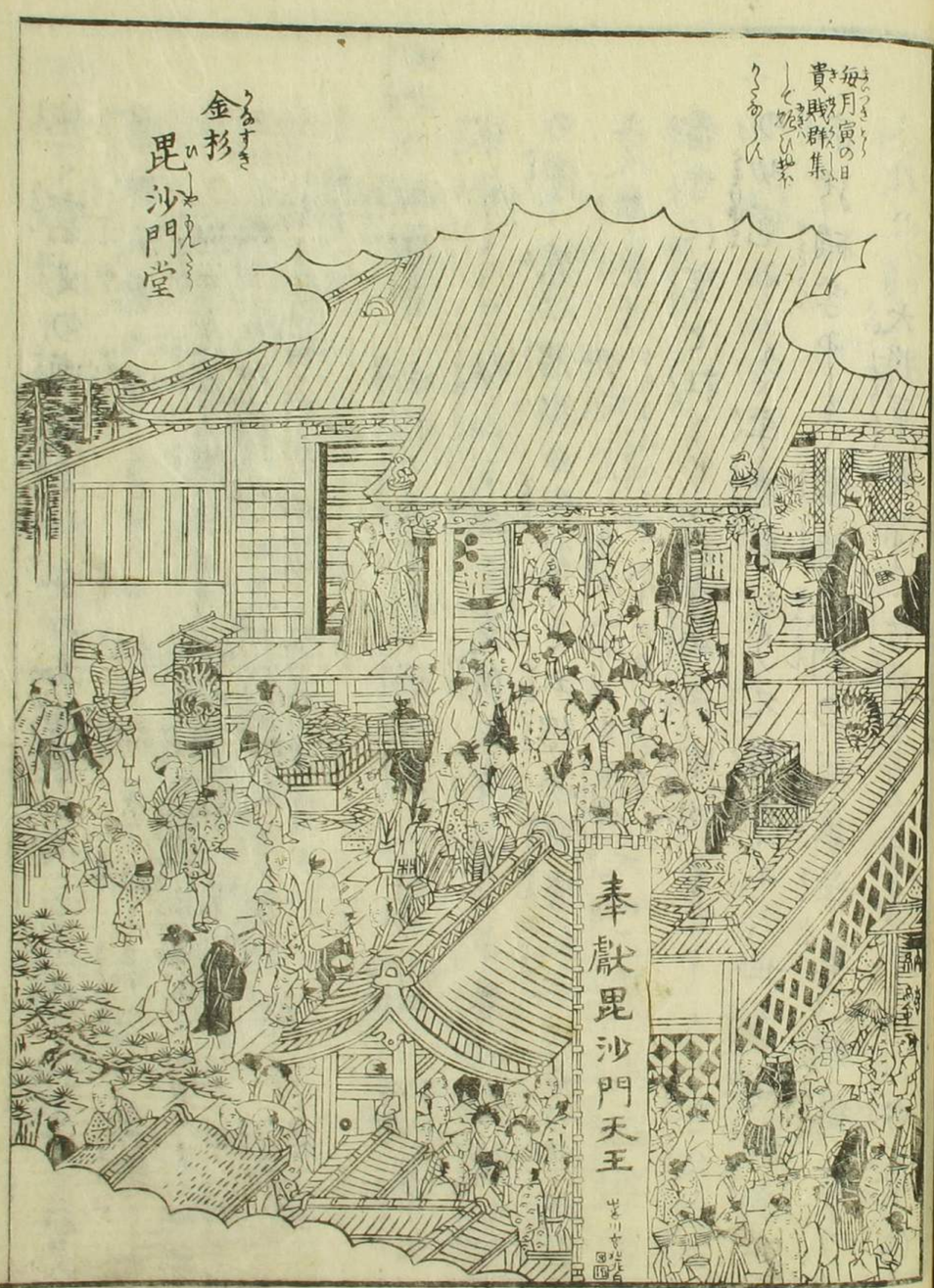
御穂神社
鹿嶋神社



守護神とし祈願

鹿島神社 同所海濱よりあるも別當ハ御穂神社に相同し祭禮も又同しく三月十五日なれども土人傳へ云寛永年間此浦より一の小祠漂流して汀より止るあり漁人ことゝ揚て其社所を尋るに常州鹿島大神宮の社地よりし小祠あり又其頃十一面観音の木像同し海汀より流よりもしうハ鹿島明神も十一面観音をいろく本地佛とせしあれハ是ゆゑとゝつきく當社の御神を勸請せしとなり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路にあり松林山正傳寺といへる中山汎の日蓮宗の寺境にひらく本尊を傳教大師の作やしく後日親上人再ひ點眼供養せしとそ往古ハ摂州梶折邑一乘寺といへる寺ゆありしかとも僻地やしく結縁の人少し（一乘寺ハ金仙寺といひし真言の密場なりを日親上人の弘教に帰して教化の宗に改む）



依て寛文の頃衆生化益の為日栄上人こゝに移し給ふと
霊験感應の著しきゝハ寺記に詳なり故に系詣の貴賤日くに
多く寅日を殊に群集せり　毎月初の寅日系詣の人大方ハ芝の神明宮の門前
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ毎月初の寅日詣る輩帰る輩あり遂石を買て家土産とす是も準ずべしと
霊験著し　日親堂　日親上人の像を安

田中山西應寺　金杉の通より西の裏にあり　門前を西應寺町と
宗門に三縁山に属す支院三宇あり　本尊阿弥陀如来
の像ハ慧心僧都の作なりと云伝ふ　應安紀元戊申の年明賢
上人草創を　明賢上人ハ應永五年戊寅黄鐘十日に迁化せ年八十六歳と云　天正の頃　大将軍家
当寺に駕を枉させられ寺領御寄附あるしかハ学徒朝夕
の助覓ゆゝしく学道盛なり　又当寺十六世存冏和尚一
宗に碩学ゆゝしく当時法門の龍象学道の麟鶴なり
されハ　大将軍家深く崇敬まします　台命に

依て一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧に宗風の法意を
示をすゝめ念佛三昧他力往生のをしへ日々に大に弘まり
三田或ハ御田及ひ箕多に作ると　古神領に寄らせ地を御田と書る由古老の説なり

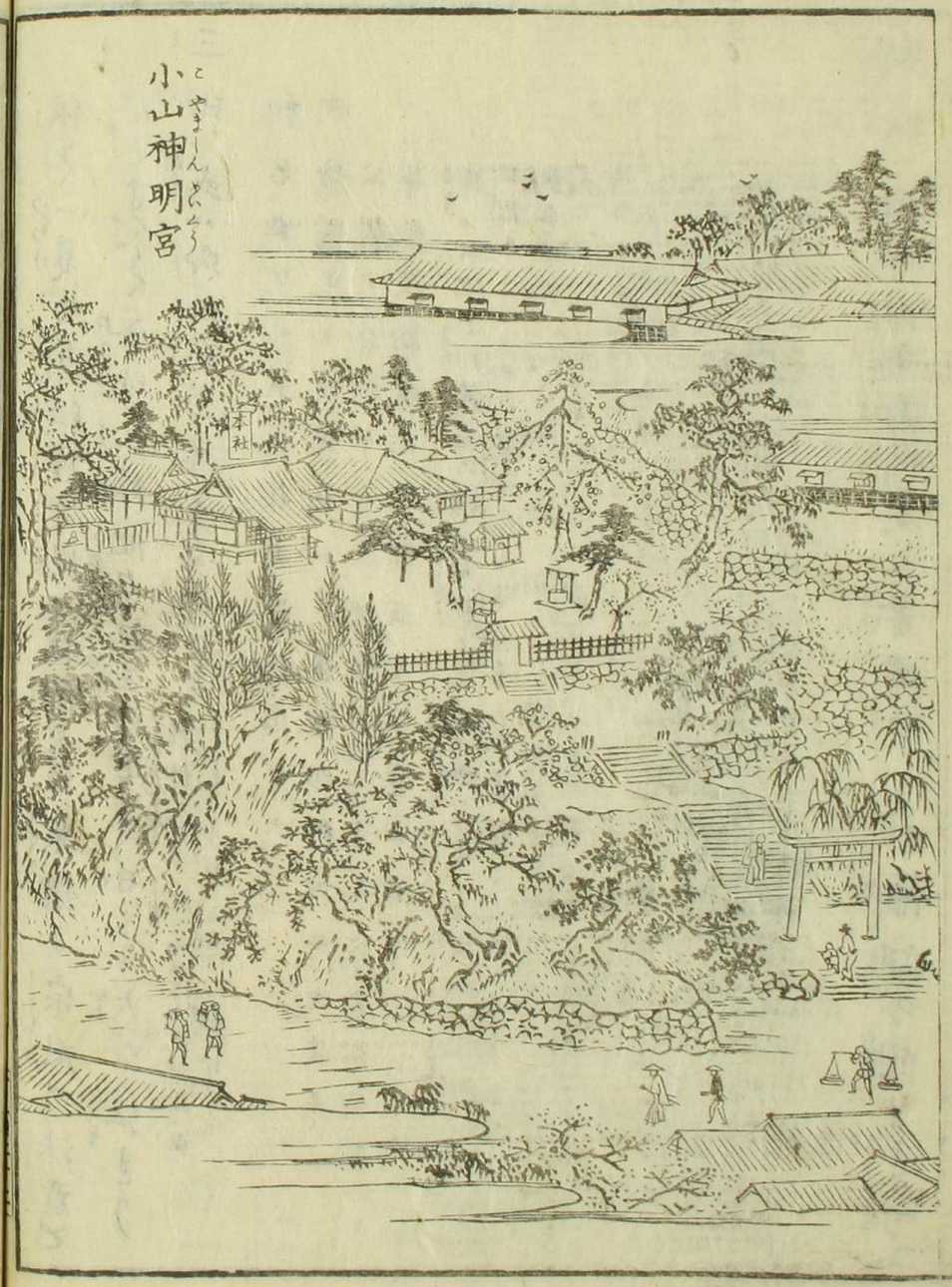
和名類聚鈔云　荏原郡御田云云
武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷或箕多
公穀三百六十七束　假粟百三十九丸貢松竹蔵□
等亦有諸禽允大膳或木工寮云云

按に此地を渡辺の綱の旧跡と云誤なり　或人云此地ハ三田家の
田領ゆゝ三田氏累世こゝに居住せ三田家譜に三田三河守其子駿河守
綱勝武州三田に住せ代々綱字を名とす依て後人渡辺の綱と
混し交へて誤まる歟と云　渡辺系図に云源次充武蔵國足立郡箕田
御に酌せらるゝ三田と云なり　三田箕田同訓なる故に混雑し
てかゝる附會の説をハまうけ　鶯峯文集に箕田園の
記と号るものあり此地を渡辺綱旧跡と云其文ハこゝに略す
永禄二年小田原北条家の所領役帳に大田新六郎知行の内に三田内寺
梁寺分同箕輪寺屋又島津弥七郎知行三田坂間分及中村平次左衛門
知行三田高福寺分本住坊寺領に同所惣領の地等を配せ見

綱坂

同所松平隠岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

小山神明宮



下る坂を号く惣鹿子は渡辺坂とあり菊岡沾凉云又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱ろ引坂と号く綱ろ産湯水と云ハ同所肥後侯の園中綱ろ駒繋松と称するハ隠岐侯の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあるなり

按ふ窪三田ハ綱生山當光寺といふる一向派の寺あり渡辺の綱ろ守護神なりとて此辺綱ハ縁あるものゝ多し又三田八幡宮の神躰なるも渡辺の綱ろ出生の地なりとて此所ハ其田武蔵守の居城跡なりと

其畧ふ云く武蔵國荏原郡渋谷荘箕田邑ハ源綱ろ陳跡なり

塚上の松と懐古松と号ける老樹ハ箕田園の記と作ろ

仕と云へし此所ふ移る之ハ已来数百の星霜を歴といへとも其塚ハ存せ塚上ふ松を栽く遺跡を標せ則是壮氣散ぜ千歳の餘情あるとのろ明暦四戊戌の夏會津源公此地を賜ひ別荘とし給ふ其塚を祓せるハ蓋その勇を取り古の士を尚ふ俄と云かくの如く紀されしと此地ハ箕田ふあるハ前の三田の条下ふ詳照合せくへし

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号ける此所を飯倉神明宮の舊地とするハ誤なるも

三田
春日明神社

春日明神社　三田一丁目にあり別當を三笠山神宮寺と号す和州三笠山春日四所の御神を鎮座なし奉る

三田の産土神ゆゑ例祭ハ毎年九月九日に修行を行へ

云當社ハ村上天皇天德年間武藏國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟なるゆゑ此御神を此地に勸請せしむるとなり其後文明の頃法印慶賢中興せ本地佛を十一面觀世音ゆゑ弘法大師の彫造なりといふ慶賢瑞夢によりて感得の靈佛なりといひ傳へ

月波樓　同所松平主殿矢別莊の看樓の号なり此地北眺望實に同庭の風景を縮ゆゑ岳陽の大觀を模に似ゆゑ依て城南の勝地なり羅山先生の東明集に詳し

三田八幡宮　芝田町七丁目にあり三田の惣鎮守ゆゑ祭禮山城男山八幡宮と同くゆゑ後一条帝寛仁年間草創

三田八幡宮

海辺

聖坂

済海寺

功運寺

もとゝひ傳ふ旧地ハ窪三田ヨあり（土人云當社ハ延喜式の神名記及ひ武蔵風土記等の書ふ載る所の稗田神社是なり今も其旧地ヨ一社あり窪三田八幡宮と称す）正保年間今の地へ移し奉るといへり

此地後ハ山林ゆゑ前ハ東海ヨ臨む九ふ風光秀美なり

別當ハ天台宗ゆゑ眺海山無量院と号し祭禮ハ隔年八月十五日ヨ修行也放生會ゆゑ

延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷

稗田八幡

武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷稗田八幡

圭田五十八東三字田

所祭應神天皇也武内宿祢荒木田襲津彦等也和銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺　同所聖坂ヨあり（聖坂とハむゝ此地ヨ高野聖多く住く開きゝし坂なれハかく云とそ）

曹洞派の禪窟ゆゑ三州龍門寺ヨ属也閑山也默室天周和尚とゝのふ支院三ヶ寺あり當寺ハ定會地ふゝく所化寮あり當寺境内ヨ綱塚と称するものあり（綱ハ前の三田及ひ細坂の条下ヨ詳なり）

周光山濟海寺　聖坂の上道ヨ左側ヨひゝる浄土宗にゝく京師智恩院ふ属也上古ハ竹柴寺と号して巍ゝたる真言の古刹なりしゝ中古荒廢ヨ逮ふ依く法誉上人念無和尚中興也（その庭海岸ヨ臨ミ沖より目當の燈籠あり）

當寺庭中の眺望ハ實ヨ絶景なり房總の群山眼下ヨあり

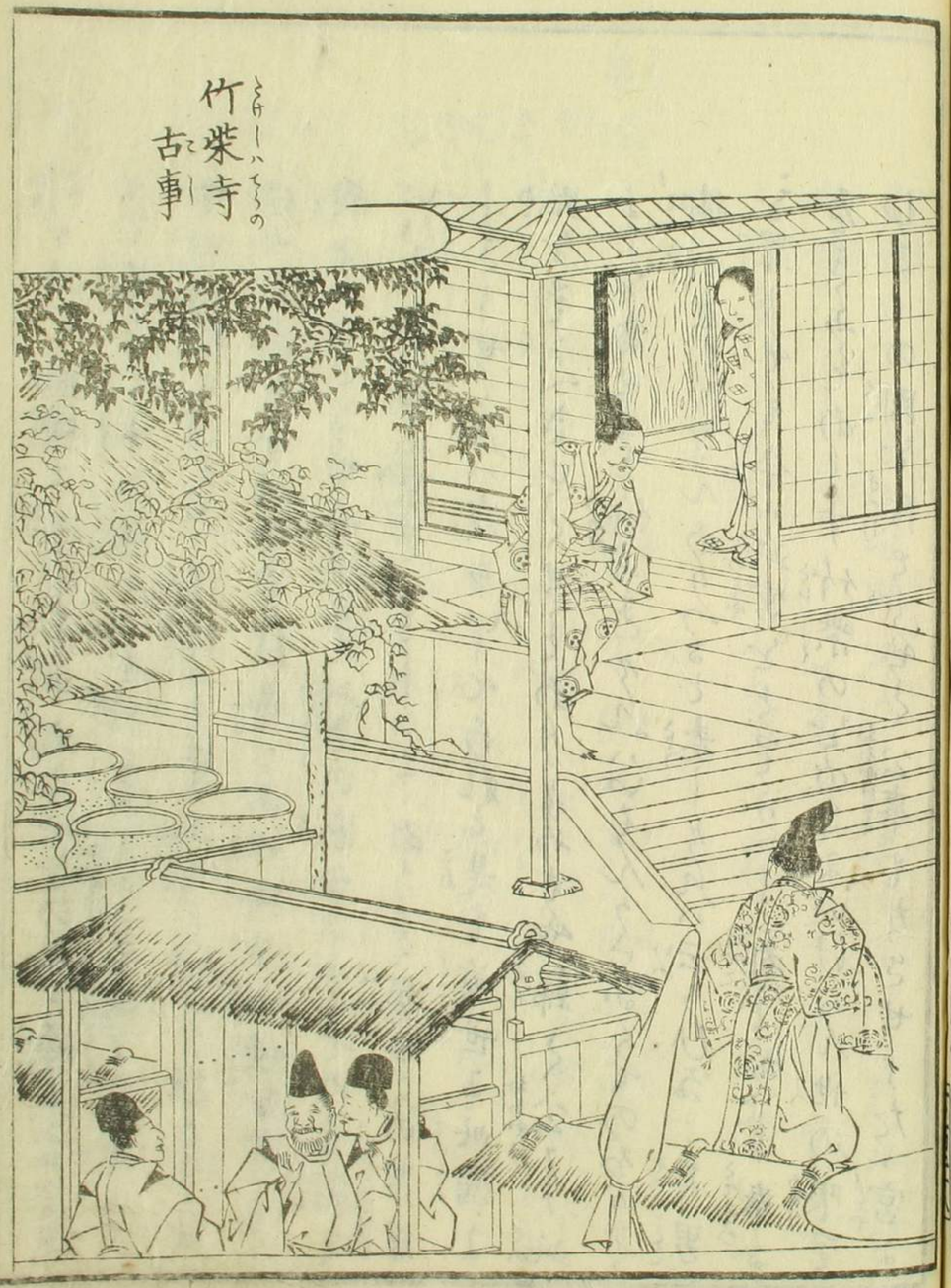
く雅趣もくゝ朝夕ヨ漂ふ釣舟ハ沖ヨ小く暮て數點の漁火波ヨ焼くゝ疑くる羣芳發して緑陰深く風露爽ふゝく氷霜潔し四時ヨ觀をあくゝ風人の眼を凝しむる一勝地なり月の岬とゝも此辺の惣名なり

竹柴寺舊址　濟海寺と同隣の土岐侯の邸ヨ地其舊跡あり

といひ傳ふ（山岡明阿云按ヨ今の地ハ海辺ふく寄ると岡の上なれハ更級日記ヨ浦ふこの西へうつせしなるへしと云ハ若いふく此寺ふくあるハ昔ハ外ヨありしを更級日記云今ハ武蔵國ヨなりぬ殊ヨをゝしきあもえなす濱も砂ゝ

白く波もなくこひちの様ふく紫生と聞野も蘆荻のそ
高く生て馬ふ乗さく弓をそる末見えぬと高く生茂りて
中を分行ふ竹柴といふ寺あるを遥ふいさろうやいふ
所ふ樓の跡礎なとあるいうやる所そと問ハ是をいふ〳〵
竹柴といふさうなり國の人ふありるを火焚家乃火
焚衛士ふさし奉りたるるに御前の庭を掃とく
あるやや苦しきめをみるる舞我國ふ七川三つ造り
居る酒壺ふ渡しふ波えの瓢の南風吹ハ
北ふ靡き北風吹ハ南ふなひき西吹ハ東ふ靡き東
吹ハ西ふあひくを見くくあるふと獨こちつふやき
るほを其時の帝ふ御むを見いみしうかしたるを
そまふ只獨り御簾の際ふ立出ぬひく柱ふ寄かく
てくく御覽ちるふこちをのこかく獨こりて泣いを

哀ふいうなる瓢のいうふ靡なんといみしう床しく
おほされるまふ御簾を押明くあのをのこあちらんと
めしくれハかしこまりく高欄のつらふ叅りたるを見ハ
云つる事今えとかくて我ふいひく聞せと仰られんハ
酒壺の夏今えとうへり申れハ我ふいきて見せよ
さいふやうありと仰られるをハかしこく恐しく思ひ
れとさるへきふやたのをれんおひあてまつりく下るふ
便なく人追來らんと思ひく其夜勢多の橋ふりと
よ此宮を居てまつりて瀬田の橋をひきまたうも
こほちく夫を飛越く此宮ふかきおひ奉りて七日
七夜といふ武藏國ふいきりきるり帝后御子
うせぬひぬとおほしまとひをあつまむさしふ
國の衛士のをのこなんいをかうそしきりのを首ふ

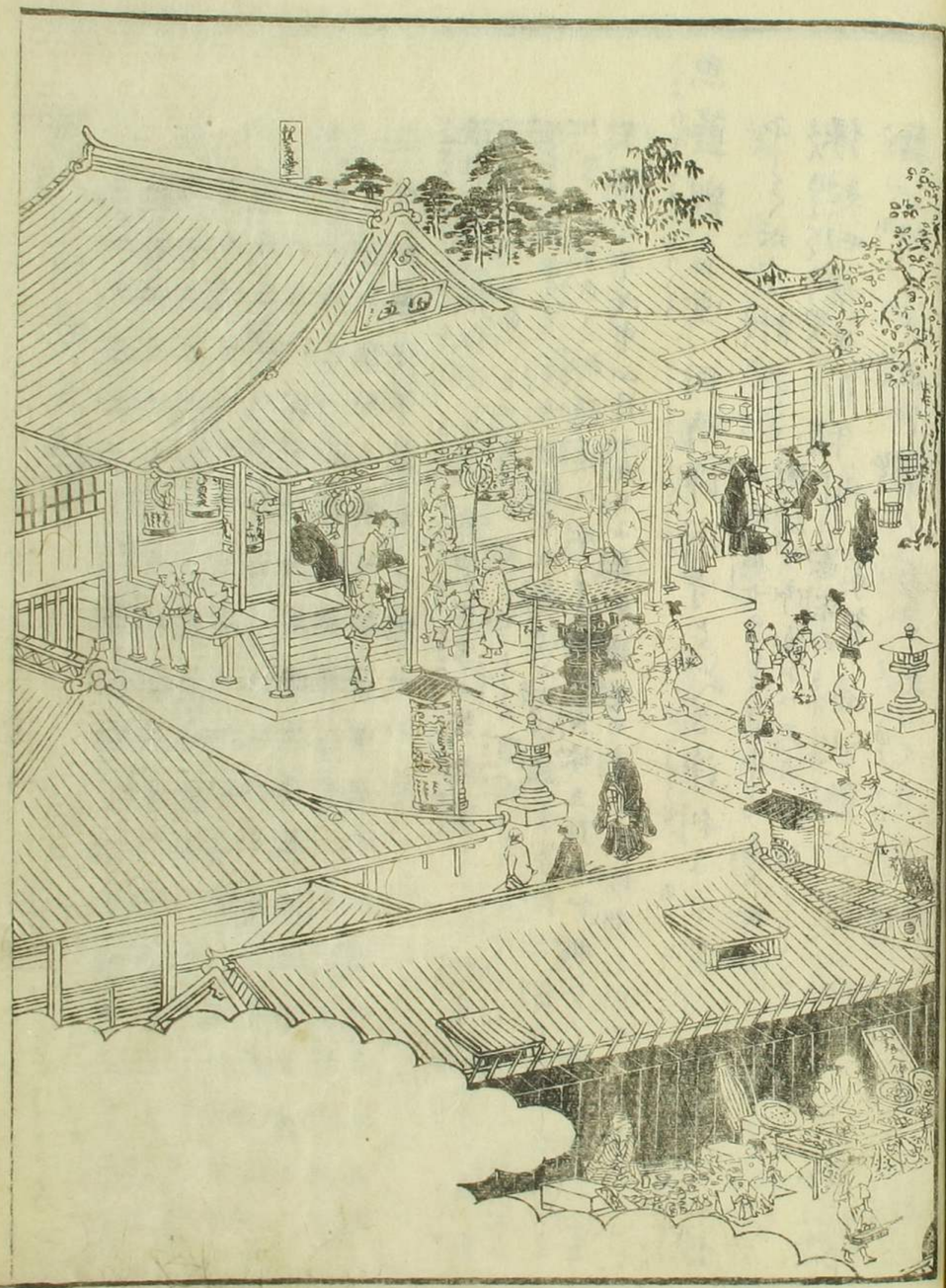

竹柴寺
古事

引うけく飛様ニ逃るると申出く此をのこを尋るふなうを
くを論なく本の國ふこを行らあと公をを使下りて追ふふ
勢田の橋こはまをく得行ゆ〻す三月といふまもさ〻ふ
國ふいきつきて此をのこを尋るふ此御子公使をめ〻く
我さるへきふやありくん此男の家ゆう〻てゆく行と
いひ〻うゆく來ゐいく〻こあうゆく覺ゆこの男罪
しきうせくんハ我をいうてあれと是も前世ニ此國ニ
跡をきるへききくせとありくあをや歸く公り此
うを奏せよと仰らまくんハいちんうあくそのありく
御門ニかくなんありつると奏〻くんハ云うひる〻其男
を罪しても今ハ此宮をとをこへ〻都ニかへ〻奉る
ゐきふをあらす竹柴のをのこよいけらん世の限を
むさ〻の國を預さくせく公事もなさせ〻たく宮ニ

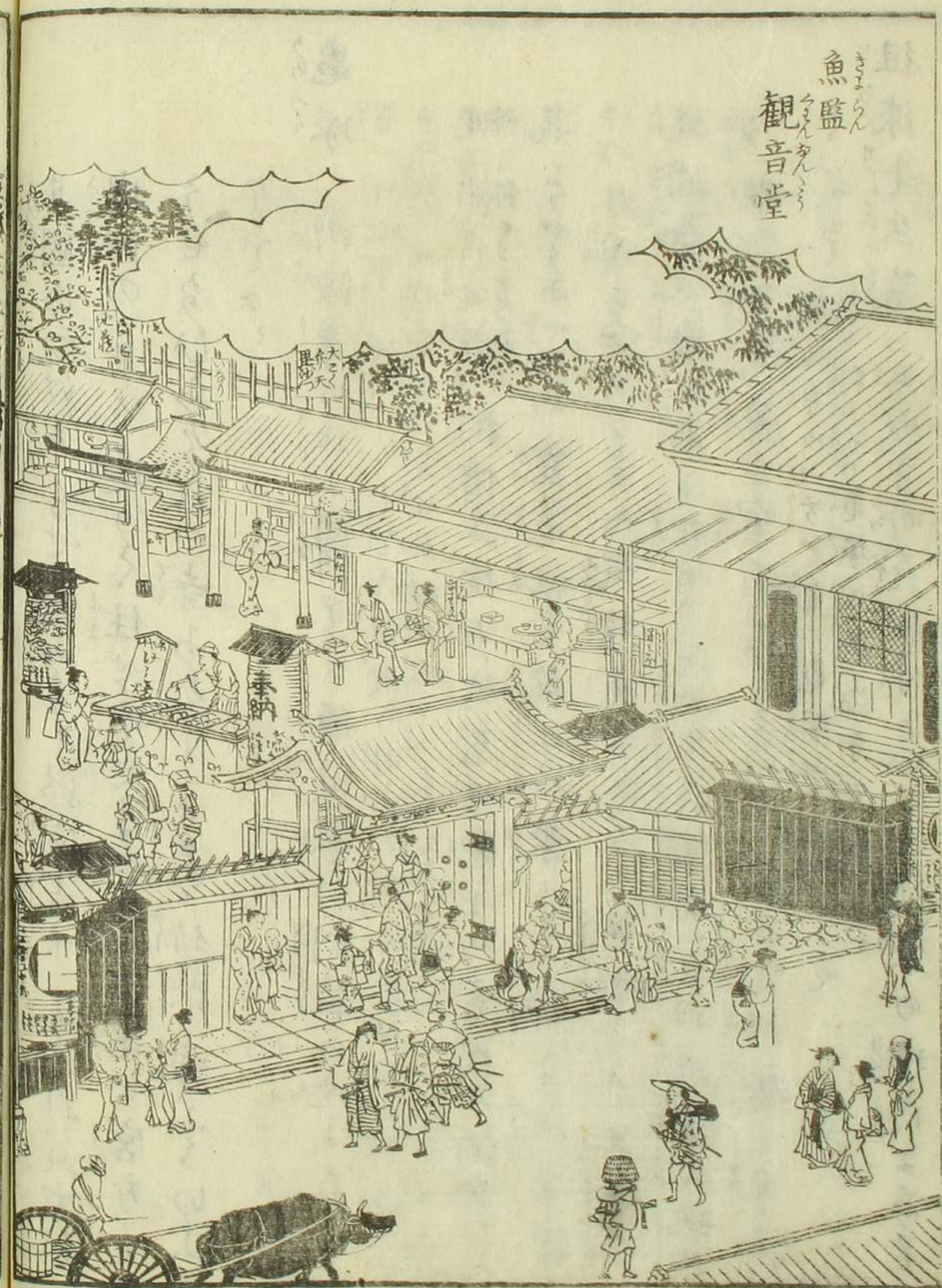
其國あつけ奉らせ賜ふ〻ふ宣旨下ゐくんハ此家ハ
内裡のことく造りく住せまてまつりる家を宮なと
うせをひふくんハ寺ふなを〻うを竹柴寺ゆ〻い
なをを云〻

亀塚

済海寺の北ニ隣ニ隱岐家の別莊の地ニあり
昔ハ竹柴寺の境内なりしを清國の項地を割く隱岐家の別莊
をつくりしを此時亀塚ハ隱岐家の内ニ入りしを其家の
建られる亀塚の相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地ニ酒壺なり
碑と称するあり其主の
其くをふ一つの靈亀栖ゐ後土人崇めく神ニ祀まつり
いつの頃ニあるくん或時夜ををを〻風雨あり其翌日
彼酒壺一堆の石ニ化せりと云又文明中大田道灌此地ふ
斥候を置其亀の靈あるを〻〻〻〻〻〻〻〻河圖と号済
といへる
祖徠先生墓　三田寺町長松寺といへる浄家の境内ニあを
（済海寺の山号を昔ハ亀塚山と唱へしを土人ハ亀塚の済海寺と唱へしを）



魚監
観音堂



碑文ハ猗蘭侯撰ス

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道鄒魯博究物理立言猶辭德崇名卑不朽莫大焉嗚呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦焉嗚呼實出先生天意可知也其爲人其行狀弟子識矣享保戊申四月十九日六十有三卒姓物部茂卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人云受乃化乃弘徽猷維厚大業已成日新富有瑕其不壽天奪斯人匪天維奪有司列辰嘻我小信瑕能享神盛德不朽永于牖民

先生ハ荻生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字ハ行一号ハ護園通称ハ惣右衛門と云父ハ方庵と号し官医ハ先生父ハ後南郷ハ住ス五歳ハ文字を識十五歳ハ文を属ス家極貧東都ハ出ク力学ハ業成ク柳澤侯の挙ニ遇ヒ食禄五百石を賜リ徧徠惣裁と称ス享保十三年戊申四月十九日ハ卒ス著述の書八十餘部ト云フ

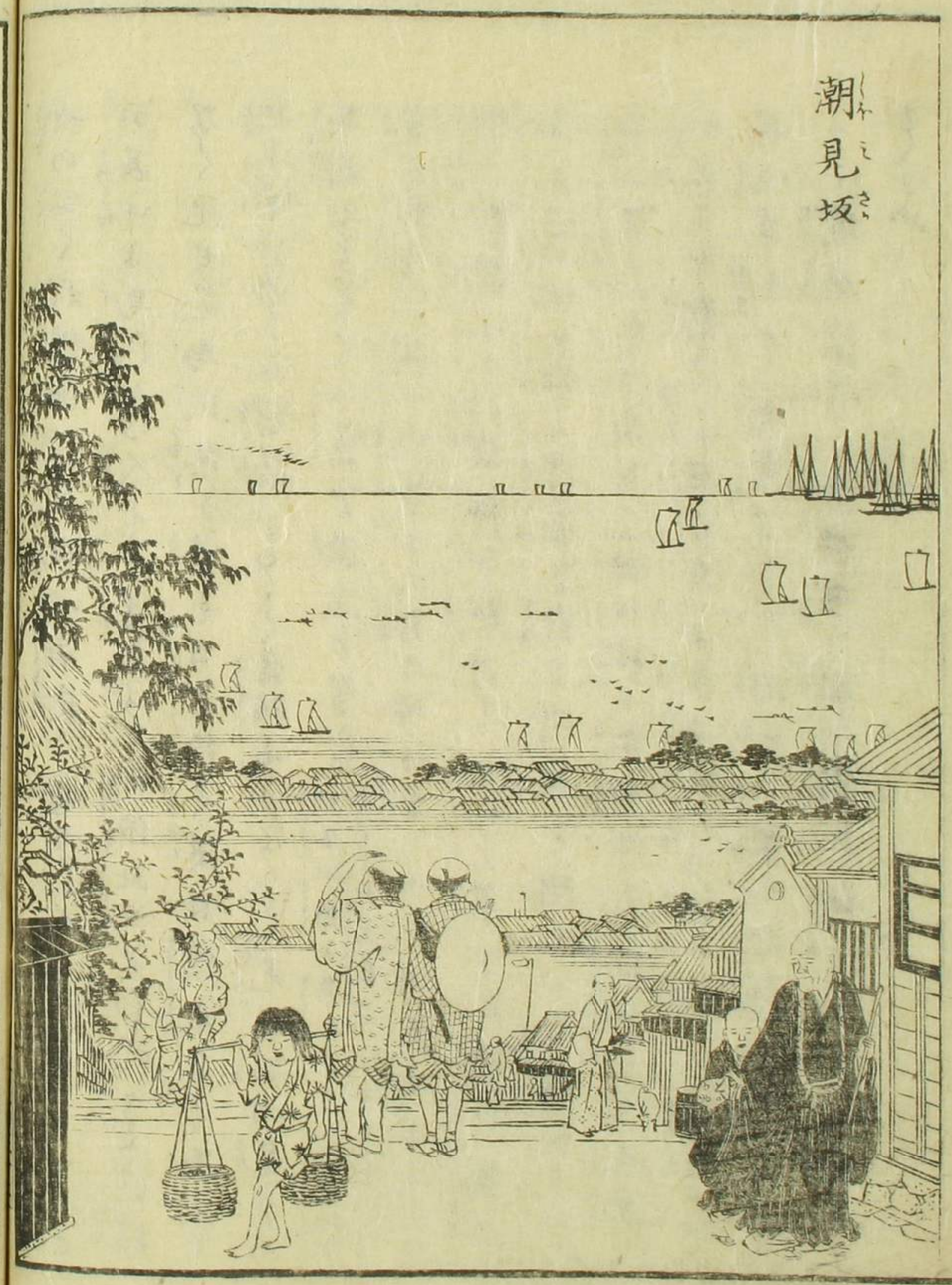
魚籃觀音堂　同所淨閑寺ト云フ

淨刹ハ安置ス本尊ハ木像ハ六寸計アリ面相唐女の姿ニ右の御手ハ魚籃を提ケ左の御手ハ天衣を持ス

緣起曰唐元和年間憲宗の年号金沙灘ト云フ地ハ一人の美婦の籃を持ス魚を鬻ク人ハ見る人其容貌の麗シキを競フ女の云ク我性佛経を悅ム若夫ハ通ス人ハ夫トセンと云其中ハ馬氏ナル人ハ是を依此女をもとめ来る程なく死せり馬氏悲ハ堪ス日を経て後異僧来リ馬氏と共ハ塚を築き靈骨を金鎖ハ光を放つ是より其國こゝろ三寶を崇ム

初金沙灘ハ應化ス妙相を魚籃觀音と号ケ

爰ハ當寺開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎ハ遊化の頃一老婦ハ此靈像を感得シ元和三年丁巳豊前國中津と云ふ地ハ假ハ淨舎を営ム御座を構ヘ魚籃院と号ス竟ハ寛永七年庚午三田の地ハ奉安せしを称誉上人其地の所せまを歎き兼應元年壬辰正ハ今の地ハ移シ當寺を建立ス尔より緇素ハ渴仰シ衆人打群ク歩を運ぶ靈應ハ香煙常ハ風ハ靡き梵唄ハ林ル



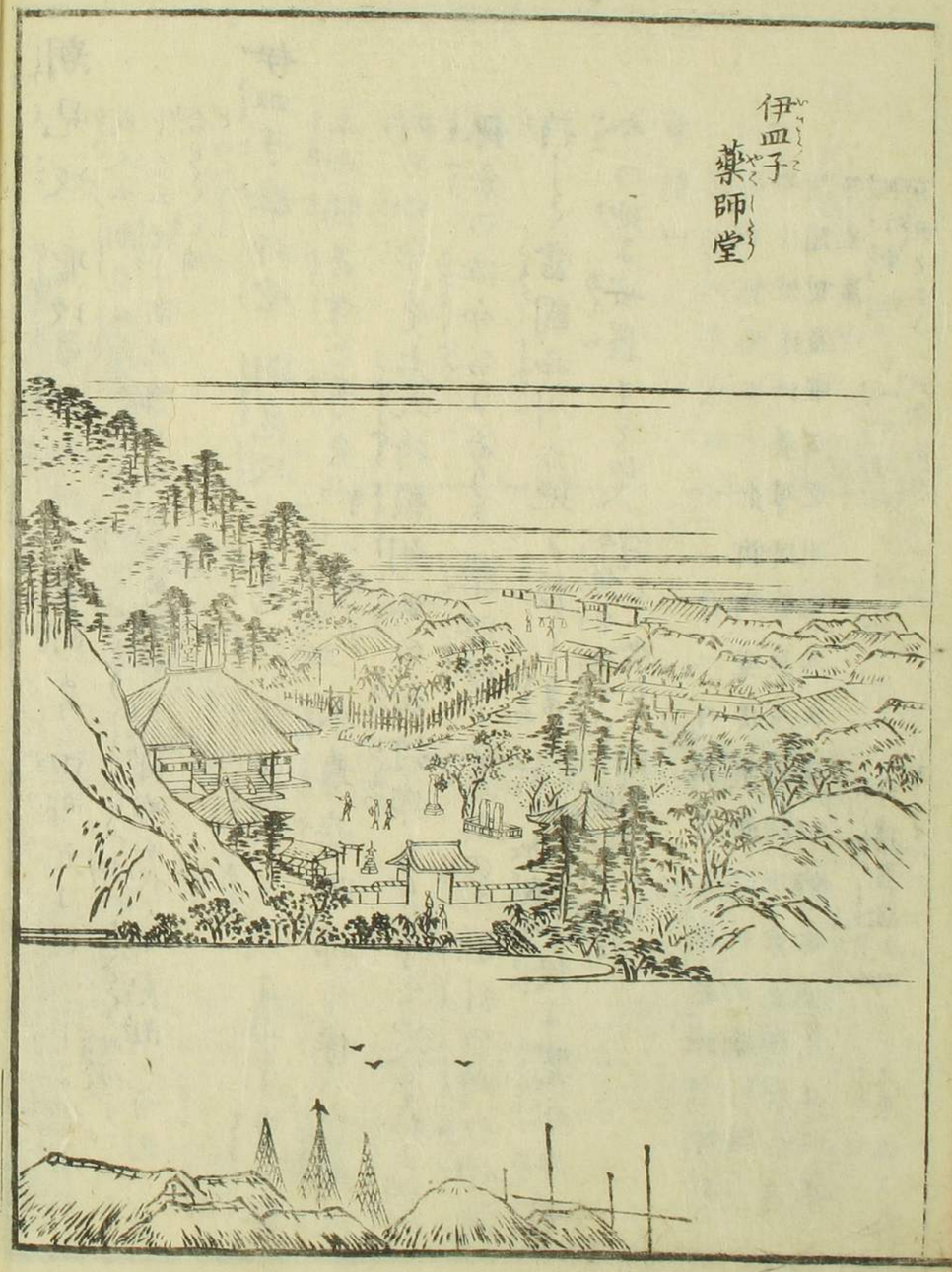
潮見坂

潮見坂　聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ或人云潮見坂四名ハ潮見崎と呼ぶ古ハ此辺より七崎あり と云　按ふ潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒蘭崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を合せて七崎といふ

伊皿子藥師堂　潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり寺を醫王山福昌寺と号す天台宗城琳寺に属す本尊藥師佛の像ハ智證大師の作にして右大將頼朝卿の念持佛なりしと云へり往古相州鎌倉の佐介谷にあり藥師堂といふ其のち騒乱の時住僧護持して當國品川の地に移し今の御殿山今鎌倉佐介谷に藥師堂跡と字する地あり其旧跡なり の地なり終に寛永年間今の地に安置せしとなり

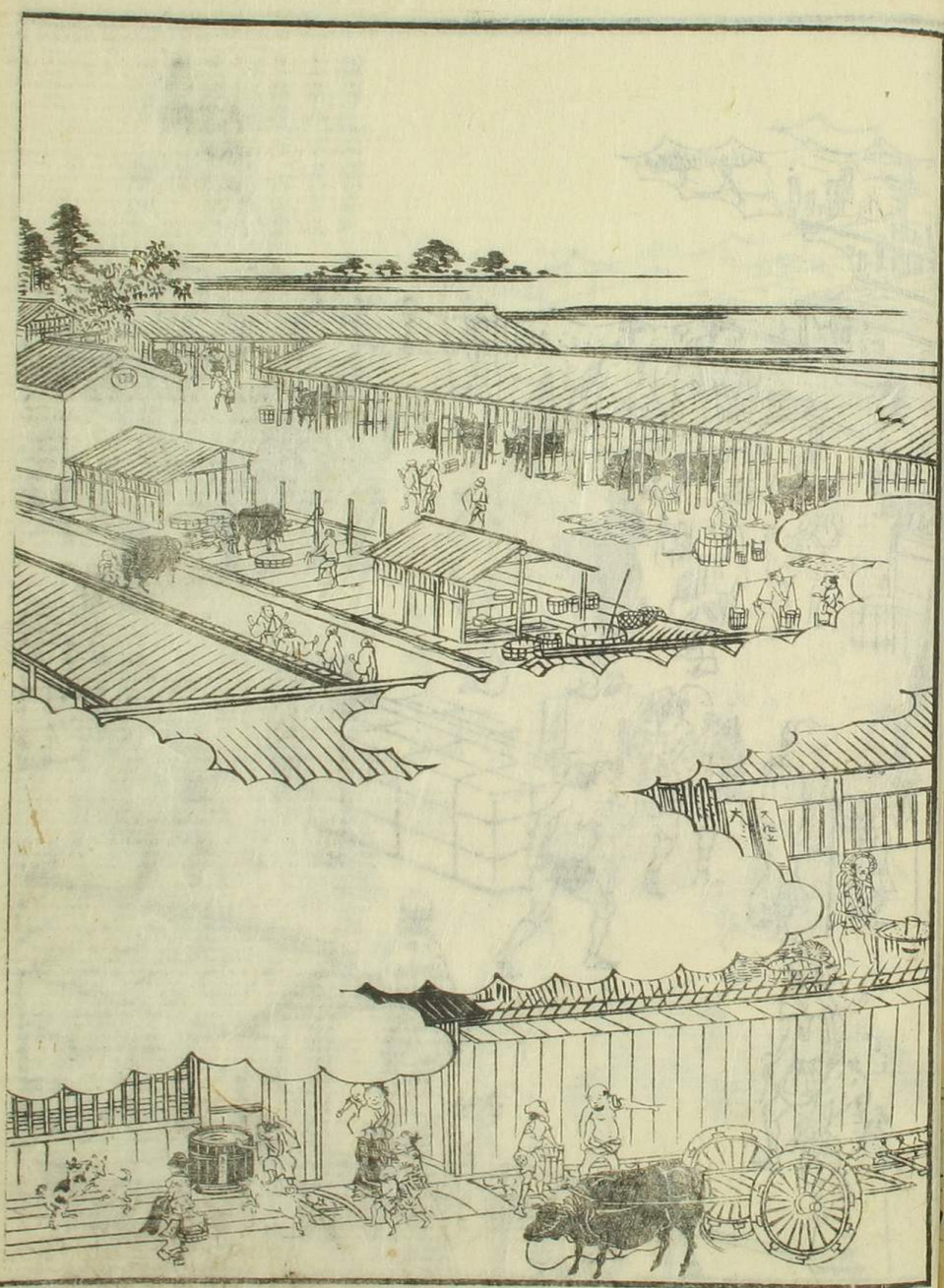
東鑑曰　建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依霊夢所令草創給之大倉新御堂安置藥師如來像実慶造之奉今日被遂供養導師莊嚴房律師行勇呪願圓如房阿闍梨遍曜堂達頭覺房良喜若宮供僧也施主並室家等也蓮中　按ずるに東鑑に此藥師佛を運慶の作と云寺傳智證大師とも又東鑑に右京兆とあるハ北条右京太夫義時のことなり

伊皿子
藥師堂

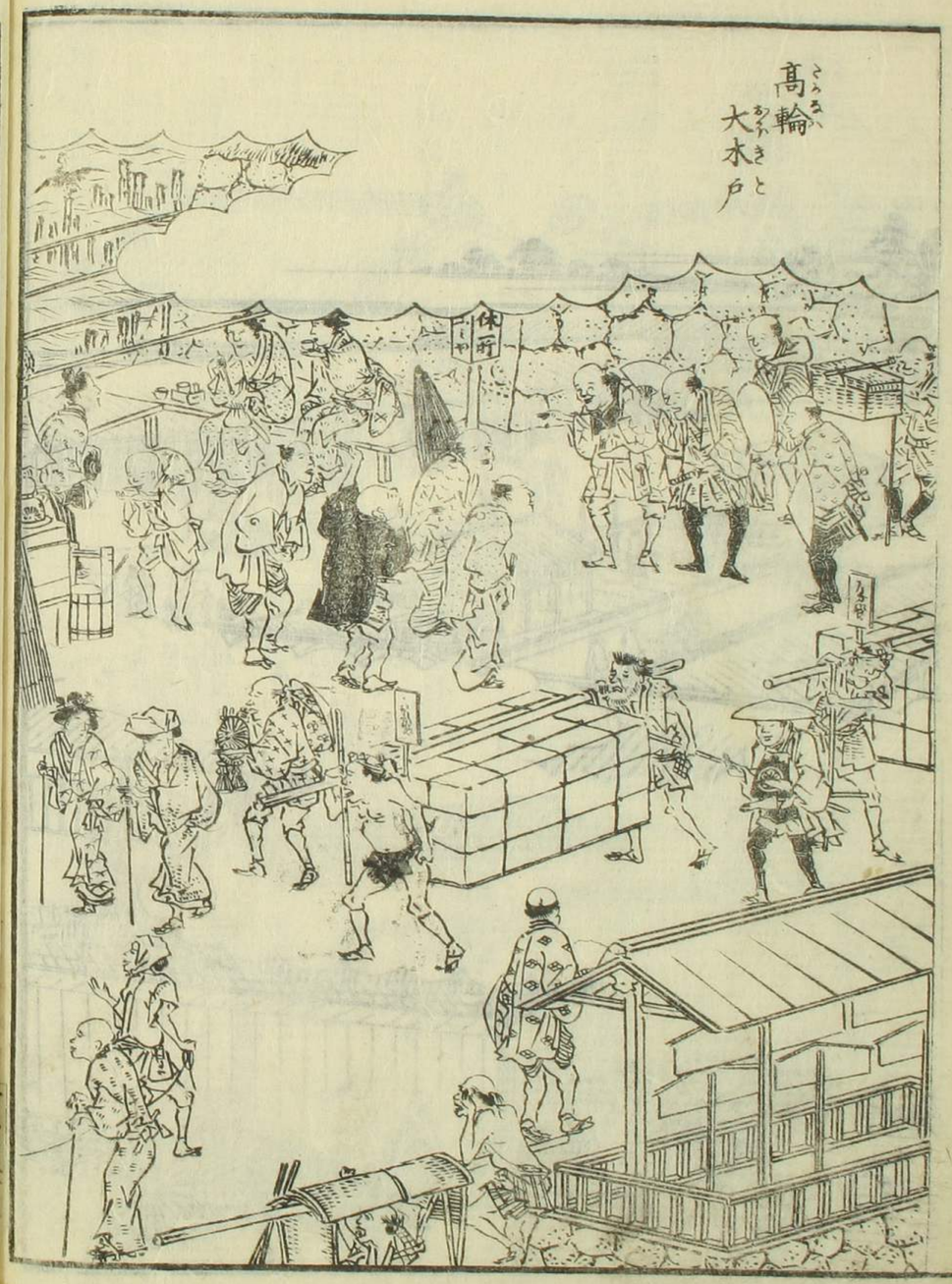


牛小屋　牛町より（延宝江戸図より此地を牛の尻と云とあり）牛を畜する家多く牛の數一千疋より餘り養ふ処の牛額小く其角後より靡きくるを數覆と号けく上品なる都く牛ハ行事正しく殊より早し形巍巍しく精氣拔すん力量勝たるを軛をかけ重を乘せく遠きに運ふ人の用を助るなり其功誠より少くして古ハ淀鳥羽よりあるく都の外なる牛車なるもしるし所入國の頃より許宥ありて江府なを是を用ゆるなりとなるも餘ハ駿河よりあるのみゆく唯此三ヶ所より限りとなる

高輪大木戸　宝永七年庚寅新より海道の左右より石垣を築せらる高札場となるなり其初ハ同所田町四丁目の三辻より品川迄の江戸の喉口なれバなり（田町より海岸なる今も彼地を元札の辻と唱ふ）此地を肆海亭をまうけられハ京登り東下り伊勢参宮等の旅人を餞を迎るとく来ぬる輩くるより宴を催し常より繁



高輪牛町



高輪
大木戸

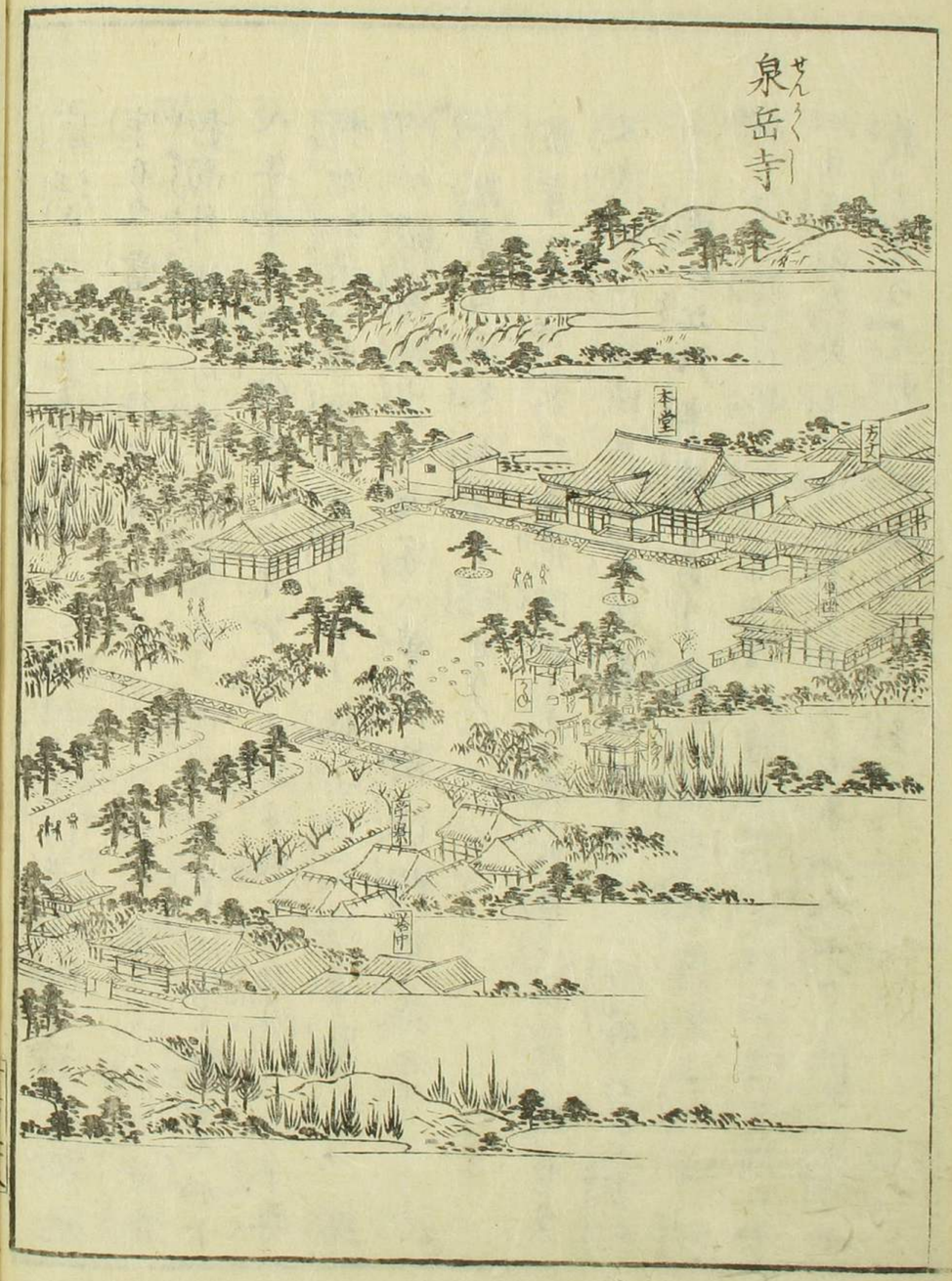
緑海嶠郊関高阡
上路間早朝平吐
日殘霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還

南郭

高輪海邊
七月
二十六夜待

昌の地なり後ゆゑ三田の丘綿くとり前ゆゑ品川の海遥ふ
開け渚よ寄る浦浪の真砂を洗ふ光景を家奥あり
高輪の原　里老云く白金臺及ひ二本榎品川臺大井村杯ハ
辺り迄の惣称なりとそ異本北條五代記上杉修理太夫朝興
武州江戸の城よ居住を大永四年正月十三日小田原北条家
よりも二万餘騎を引卒し朝興を攻んとす彼地を發向を
依く稲毛六郷の上杉の家人早馬をもつて急を告る
朝興ハ俄の事なく軍評定ゆゑ及ハを中途よ出迎ひ勝
負を決せんと欲く出小田原の先陣と品川高輪の原
なく渡り合とあり（追捕ハ捜よ今の海道ハ後世よ開け）（小田原記よ永禄信玄小田原を攻ひと下よ一手ハ江戸品川の縄鳴の辺を焼く民屋を高縄手とあり然る時ハ高縄手ハ古へハ丘の上通りを通路せしなれハ）
萬松山泉岳寺　海道の右よあり野州富田の大中寺よ属を曹洞

宗江戸三箇寺の一員なり（橋場總泉寺芝青松寺當寺ホ）坊舎三宇学寮九
宇あり當寺ハ往古慶長年間　台命を奉しり門庵宗開
和尚外櫻田の地よ創建まる所ハ禪刹なり後寛永十
八年辛巳再命ありく寺を今の地よ移したりとの本尊
釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文殊普賢なり總
門の額萬松山の三大字ハ華僧閑沙門道霈の書ゆゑく
康熙辛酉孟冬上浣と記せり
當寺ハ浅野家の香花院ゆゑく其家累代の兆域あり
又浅野内匠頭長矩及ひ義士四十七人の石塔あり方丈
南の丘よ半腹よあり傍よ當寺住僧建る所ろ石
碑あり其旨趣を注せ二月三月の四日及ひ正月七月の十
八日等ゆゑ英名を追慕しくこゝ集ふ人少くなく又當寺ゆ
義士等の遺物を収蔵せるもの多し


泉岳寺
本堂

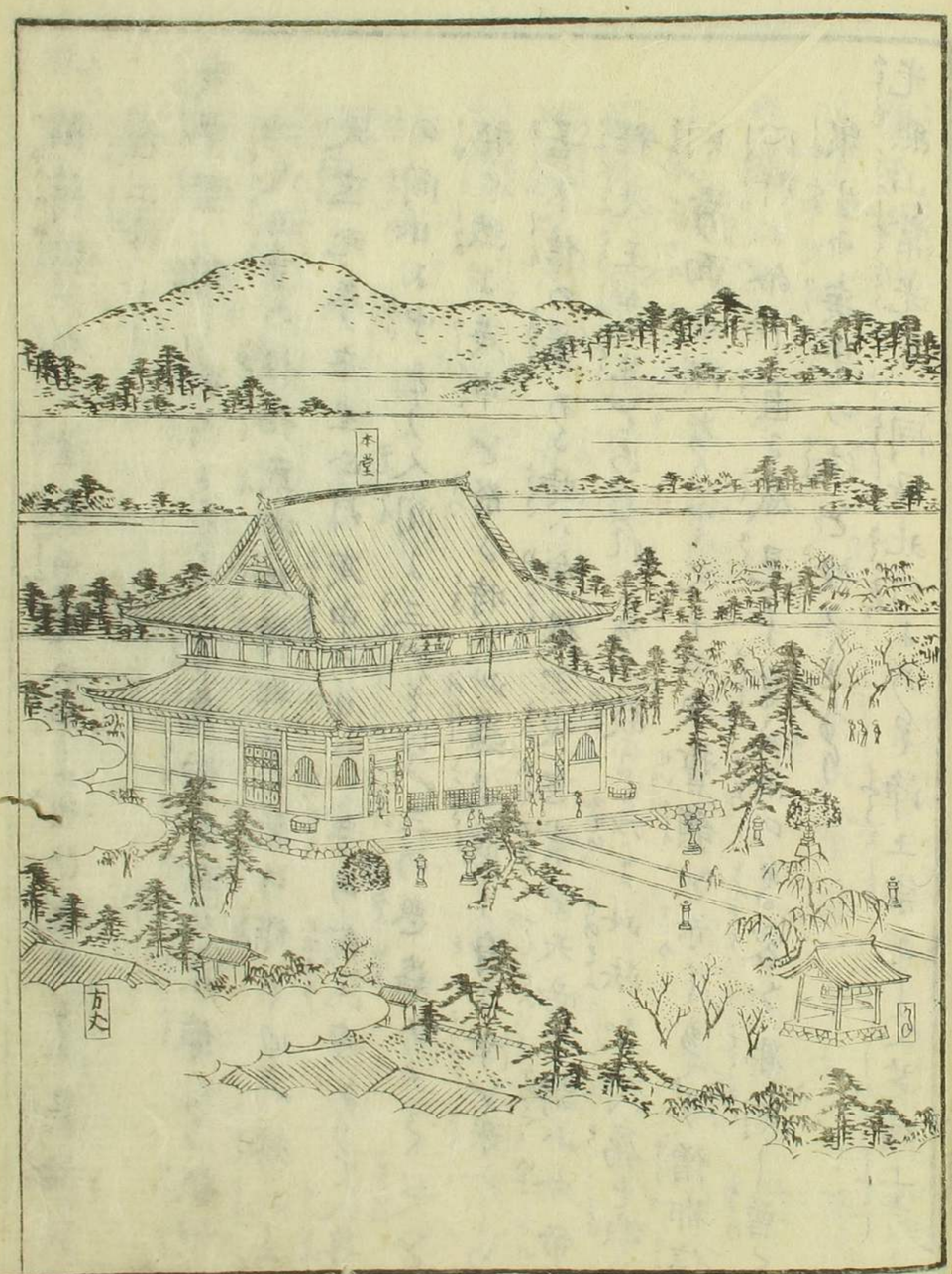
浅野家の義士墓
其角

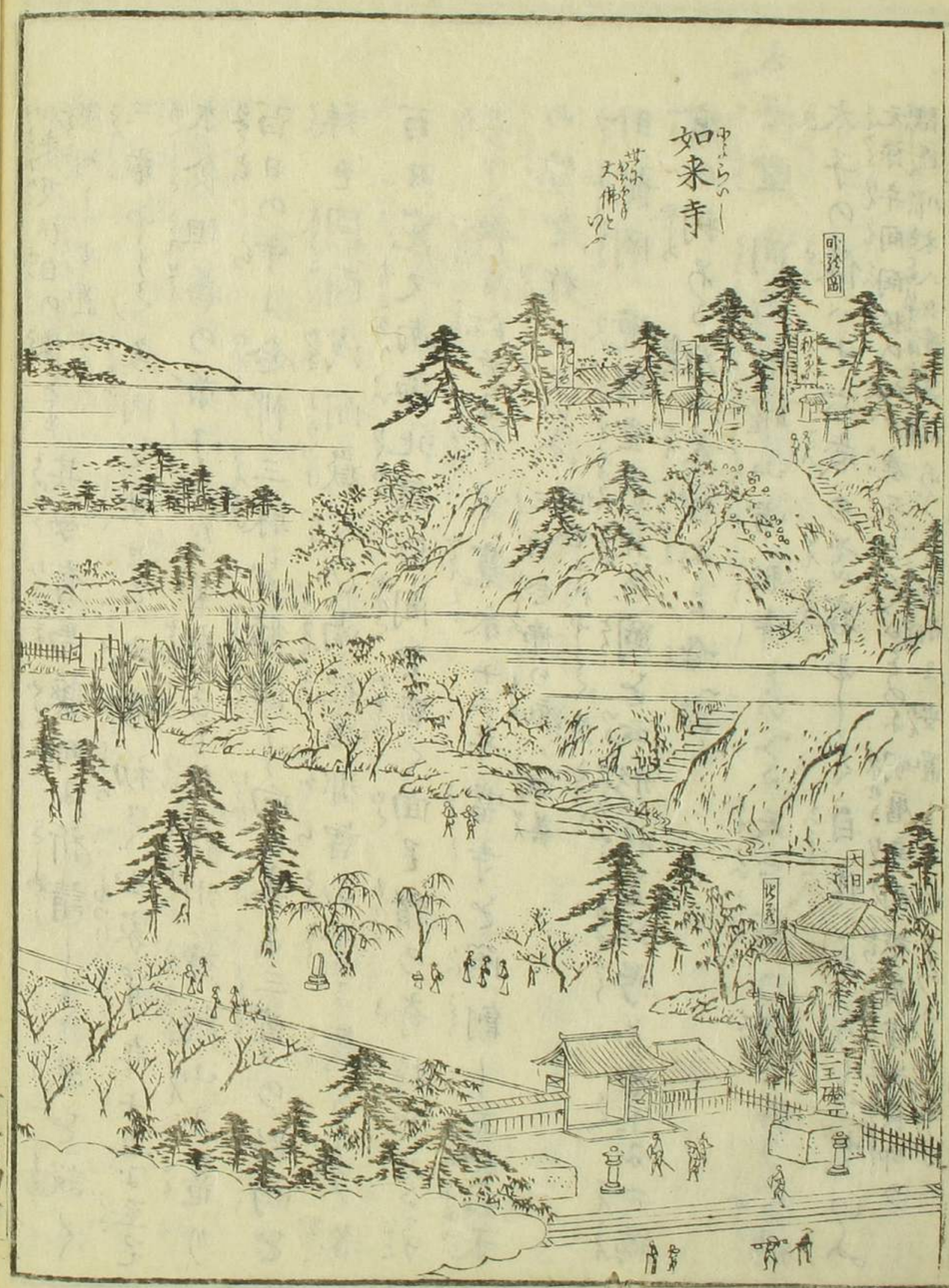
元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を刃傷し及ふふよりて長矩は死をゝ後其家の長臣大石内蔵助良雄本國播州赤穂に在て君の讐は共に天を戴へからすと云の義ふよりて血盟を以て同志の者を かゝらひ終に元禄十五年十二月十四日讐家に至て義士四十七人義英の所在を搜しく其首級を得當寺に至て亡君の墓前に祭るの後誅を待て翌十六年二月四日自殺せしゝ八諸書に詳なるを以て こゝに省く

歸命山如来寺　大日院と號を泉岳寺の南に隣る天台宗わゝく東叡山に属せり本尊五智如来八座像各一丈あり（俗に芝の大佛と称す）木食但唱師の刷造なり（但唱八佛工と云ふ）奇哉如佛と号せり京都鳥滝の五智山に安置する所の石像の五智如来十三佛等八但唱の作なり并に自の像をも作る　但唱摂州有馬郡高須村の産なり　彼所に靈亀山與勝寺と云古刹あるを再興し釋迦如来及ひ自の像をも彫刻し安置せり　其母有馬藥師に祈請しく是を設く三歳にして魚肉を食せを九歳初て出家す年十五に至て木食但善の弟子となる夫より後信州檀特山に籠り百日の中に念佛三昧を修得し向の峯に三尊の影向を拜せ同國浅間嶽及ひ南紀の那智山等に籠るに各百日宛又南海北溟の間を普く回て諸の奇特を顕すこと多し終に江戸に下て寛永十二年當寺を開創し五智如来の像を作るとなり（三時念佛の勤は但唱二代に絶）

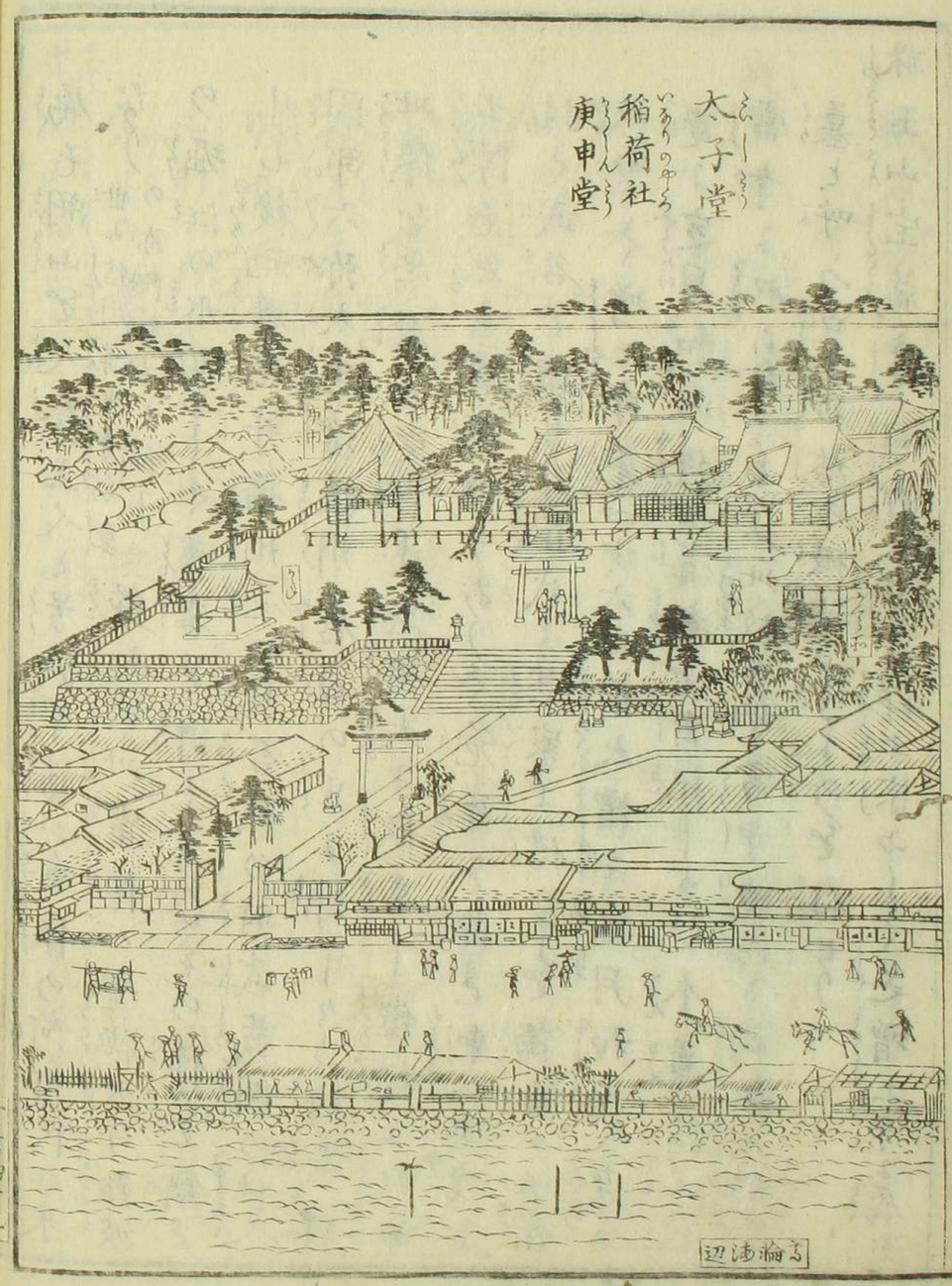
卧龍岡　境内堂前北の岡を云形状を以号とす上に天満宮の祠あるを天神山と称へ

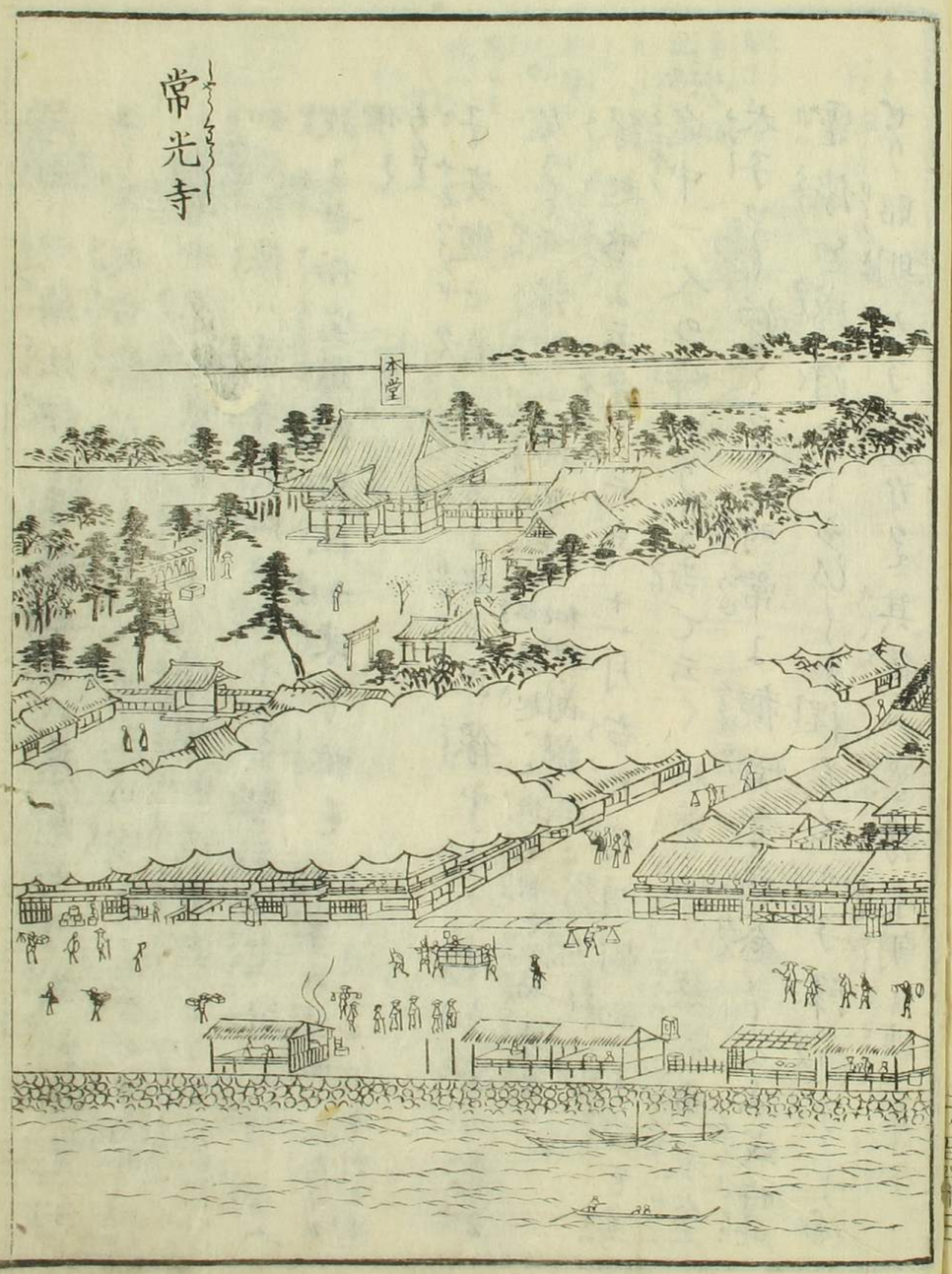
太子堂　同所旭曜山常照寺とゝなへる天台宗の寺にして聖德太子の像は十六歳のそる容にして自作なり（元禄年間開板の江戸鹿子と云ふ明暦年間越後守光長卿の臨臣川木八兵衛某誌あり此所に安置す）


本堂
方丈

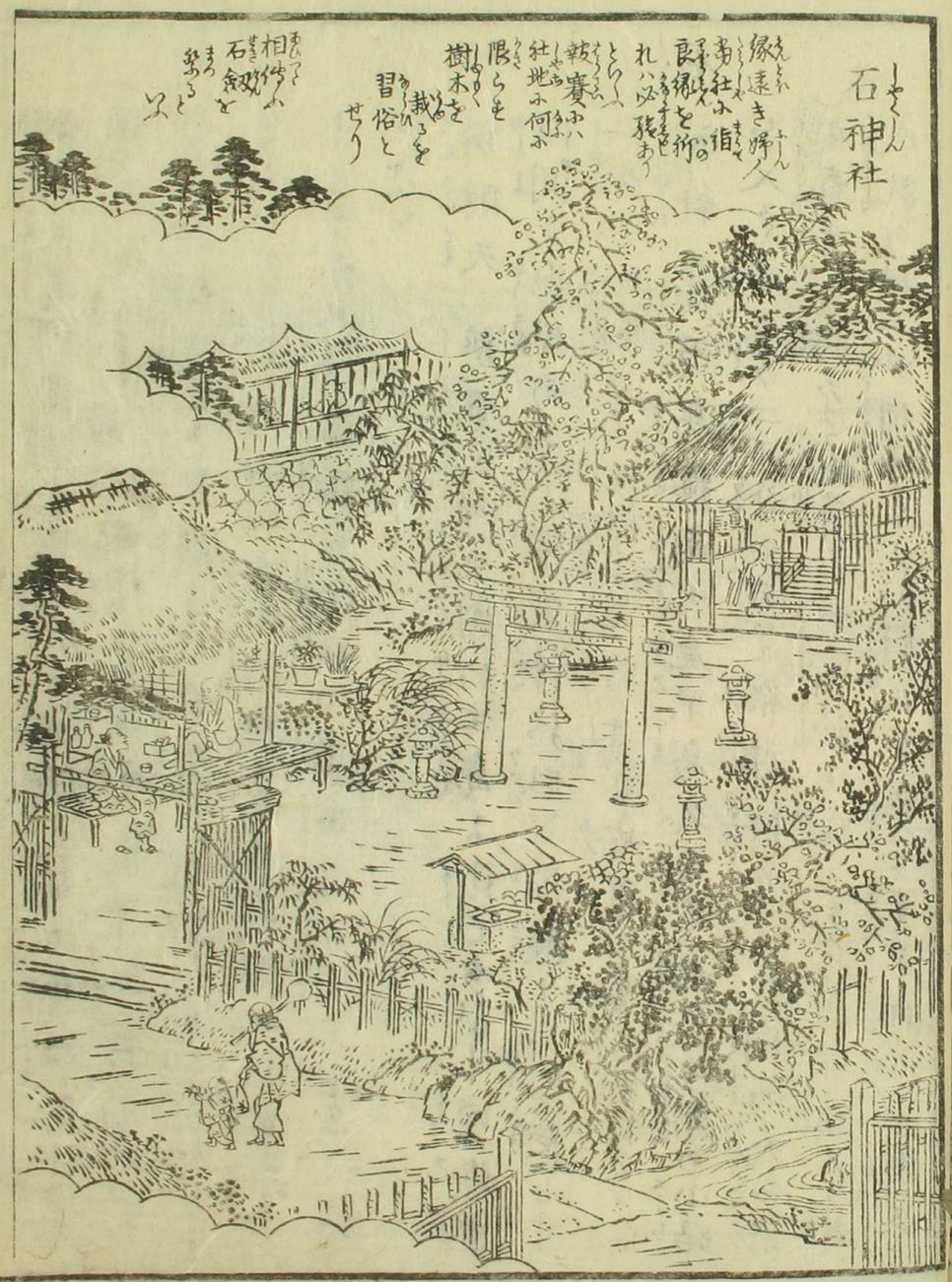

如来寺
可珍閣
天神
大日
三重塔

稲荷祠　太子堂　庚申堂の中に並ひ立せる高輪の
産土神なり
庚申堂　同し境内にあるも本尊青面金剛の木像なり摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作といふ縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日ハ一年の間六度ありて八専
の間日に中もろ人間に三尸といふ三の悪蟲ありて災を
招く然に庚申を祭る時ハ此蟲退散し身に幸を来らしめ
善不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝に訴ふ今帝
釋天王衆生をあはれみ給ふ故に汝に此法を附属せ我ハ
則青面金剛なり世に又十二の誓願を示しめ給ふ僧都信
心肝に命じ直に感見しなる所の容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとなり
光照山常光寺　同所北町にあり浄土宗にて芝増上寺に
属す開山を大誉上人と号す本尊ハ金像の阿弥陀如来
なり世に信州善光寺分身と称す縁起云此霊像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面ゆゝしく光る容を拜しまひその像を鑄さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里に陣しける時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歓喜し鎧櫃に収め
出陣せ然に霊威のあらたなる危難を除き剰へ忠度を
討く武名を顕せり依代其家に伝へしを獨夜と云僧
故あり増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ乞る
遂に定月和尚件の旨趣を自記し本尊と共に
當寺に収られしに此故ゆゑ當寺境内に岡部六弥太
墓と呼ふ古き石塔の破壊せるを存せり
珠玉山宝蔵寺　同所にあり浄土宗にて芝増上寺に属す


太子堂
稲荷社
庚申堂
高輪海辺


常光寺
本堂

開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覚大師開創の梵刹
ゆゑに天台宗なりしといへども今の宗風ハ轉
して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を本尊阿弥陀
如来の像ハ善導大師の作ゆゑに御ゑ宝珠を持しゆへ
故に世俗宝珠阿弥陀如来と称ス　本尊の背面に永隆元年十一月十七日彫刻と鐫
ありて
俗
子安観世音　當寺ハ安ヲ画像ゆゑ　延喜帝の震筆
なりと云縁起一巻ありて　画縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ
和田義盛撰ス所
縁起略に云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其
途中一人の婦あり〳〵告て云く此霊像ハ梁武帝未皇
太子ましゝ〳〵時常に観音を祈念しゆへ或時此
霊像を感得なしあひ〳〵程なく太子降誕ましゝ
ぜり昭明太子是なり其後此霊像本朝に渡ましゝ



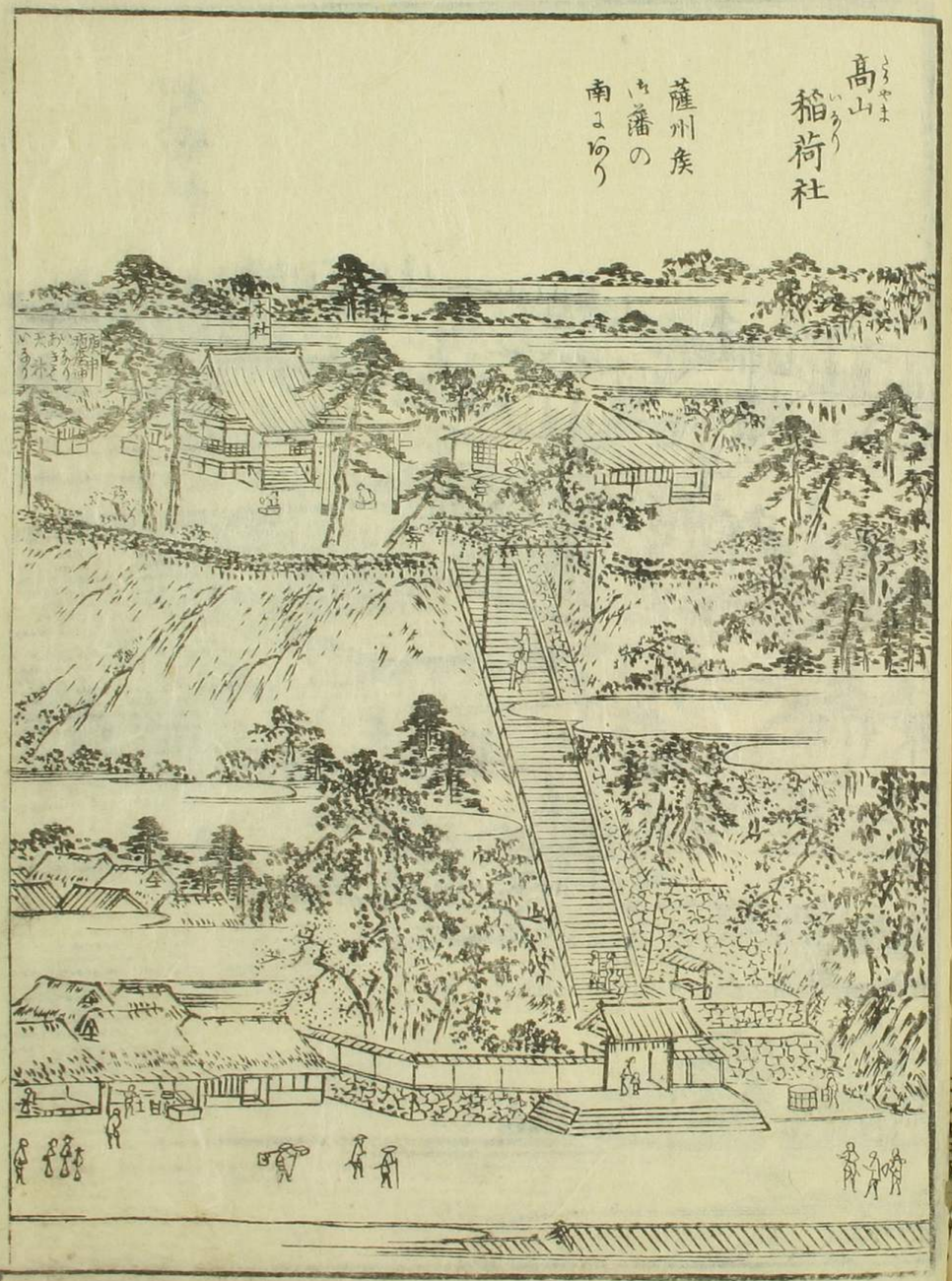
欽明天皇御崇敬あり又　醍醐天皇も尊信なゝひ
震翰を注き縁起を作らせ給ふことを　将軍よりまふと
なり　頼朝卿ゝを得給ひ鎌倉に安置し給ふ信渡ら
さるあるゝ其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添ら
しゝかり此霊像鎌倉兵乱の後當寺に迁しまるゝ
ゝ

辯財天　慈覚大師江州竹生島に詣てゝ頃海中
波間に影現あるゝ宇賀神の形を摸擬し御長七寸
三分に彫刻なりひを當寺に安置しゝるとかり

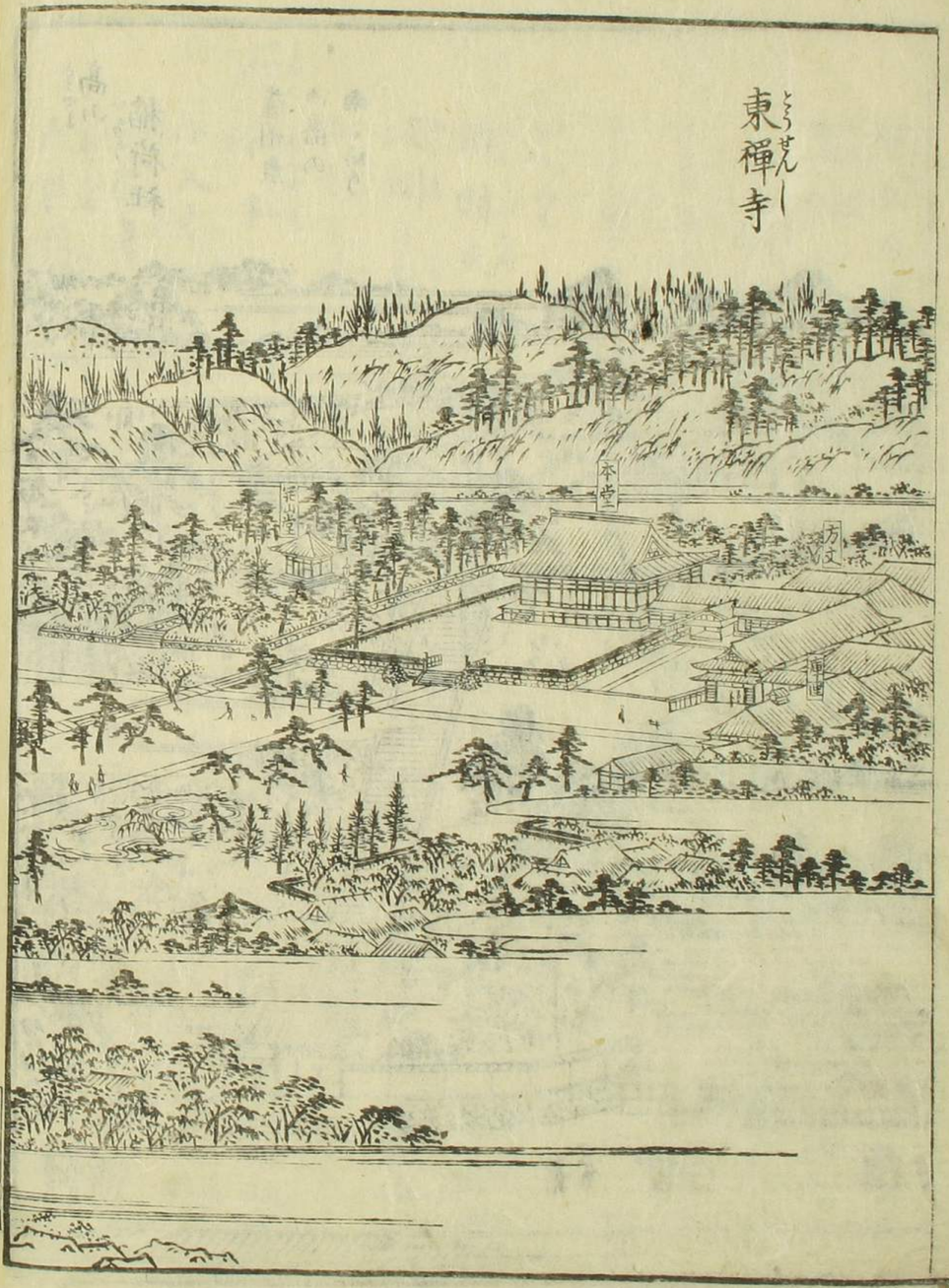
石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両侯の間の小路
を入る西の方二丁斗にあるゝ祭神詳ならす同所天台宗
安泰寺の持なるゝ昔八遊軍神に作るゝ寄願ある者
成就の後八必何に樹木を携へ来る社地に栽る

高山稲荷社

薩州侯
芋藩の
南にあり



東禪寺



賽をとゝめ此地を石神横町と字するハ此社ある故なるべし
土人誤まりて横町と唱ふ

佛日山東禪寺　同所高輪中町にあり　妙心派の禪宗江戸
四箇寺の一なり　本尊ハ釋迦如来　開山ハ嶺南和尚と号し
宝鑑國師　和尚ハ日向國飫肥の人守永氏肥前守祐良の五
と謚す　男なるを幼より佛門に入く　後宗門の大德なり
七日寂を歳六十二　慶長の頃江戸に来る　阿左布に一宇を開く當寺
是なり　其地を今も黒南坂と云　寛永年間今の地に移る　総門ハ海に
臨む　此門の額海上禪林の四大字ハ朝鮮國雪峯の筆
なり　頗る世に称せり　寛永二十年癸未七月廿

宝鑑録云　敕諡大夫法鑑禪師嶺南和尚大心中興主盟東禪
開闢始祖得法洛西之地撥轉向上機闡盛化海東
之邊云云

有喜壽八幡宮　寺外右の方にあり　安泰寺奉祀す
此地を有喜壽の森と号く　或人云古へ老樹の枝一株ありて
鵜の塒なりしハ鵜樹巣とも
かくと いへり

谷山　今云所ハ品川の入口にあり海に臨む江をさしく
もろよへり　昔ハ大日山と号るとき　紫の一水とゝる草帝に昔
猪俣八人の弟宅ありし　此地に出崎ありしとも或ハ
唱るとも　河とも
袖の崎　仙臺侯別荘の地　谷山ハ邑名なり　目黒の南あり
此地に限る号あり　谷山村なるも
後世其堂宇破壊せし頃谷山稲荷の地へうつし　又品川北馬場の光嚴
寺へ移るとゝ　大日如来立せ　故ありとて
今ハ其石像の所在をもらす

早稲田大学図書館
011688984850